
三人のフィアンセ！？

コノハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人のフィアンセ！？

【Nコード】

N6419I

【作者名】

コノハ

【あらすじ】

僕、秀句 四季。

ごくごく普通の高校生。

普通だったはずが、いつしか普通じゃなくなった！？

え、あの、弥生ちゃん？あの、夜闇さんも、何してるんですか……
零ちゃんもやめて！

……あ、ちが、違うんだ間宵ちゃん！僕はやましいことなんかな
にもしてない！頼むよ！信じて！

というか、なんで彼女でもないのにそんなこと言われなきゃ……

ぎゃあああああああああああああああああ！？

続きは本編へ！

第一話〜プロローグ!?!〜（前書き）

この小説には、ギャグ成分、少しの赤面部分、そのたもろもろが
たくさんあります。

御用法に注意せず、いくらでも楽しんでください。

第一話〜プロローグ!〜

「す、す、好きです!結婚してください!」

「好きです。お伝えさせてください」

「興味が出た。研究させてくれ」

三者三様の告白、一人は告白にすらなっていない。

僕、秀句 四季の前に立っている三人の女の子。

なぜ、こんな状況になっているのだろうか？

それを今から、説明しようと思う……………

僕の自己イメージは、どこにでもいる普通の男の子、だ。
実際、成績もそうだし体育もそうだし、身長、体重、座高、そして好きな女の子のタイプまでもが普通で平凡の中間な、そんな男の子。

でも、少しでも人に誇れるところはどこかと訊かれると、僕は『人助けをするのが好き』と答える。

今日もいじめに遭っていた女の子を助けたし、ナンパされていた

女の子を助けたし、おそわれていた女の子を助けた。

詳しい状況は自慢っぽくなるので省くけど、そうやって人助けができる、っていうのが僕の数少ない人に誇れるところだったりする。

で、いつものように僕は学校を終え、幼馴染の東堂 間宵ちゃんと一緒に帰って、いつもどおりにアパートに帰った。

帰ってきて、数瞬。

かばんを置き終え、服を着替えてさてくつろごうか……という時に、インターフォンがなった。

「はい」

僕は少しいらつきながらも、来客を出迎えた。

すると。

おっとり系の、前髪で目元を隠した僕の高校の制服を着ている女の子……確か、今日いじめられていた子……かな？ その子が、

「す、す、好きです！結婚してください！」
と言ってきて。

モデルも裸足で逃げだしそうなほどの人形みたいな顔立ちの、長身でスレンダーなメイド服姿の女の子……あ、この人さっきナンパ

されていた人だ。その人が、

「好きです。お仕えさせてください」
と言ってきて。

眼鏡をかけてまるで研究者ですとも言いたげなちびっこ白衣
姿の女の子……あ、この子今日黒服たちに追いかけられていた子だ。
その子が、

「興味が出た。研究させてくれ」
と言ってきて。

「……………は？」

僕はそう答える以外に反応できなかった。

で、いくらなんでも追い返すのはどうかと思ったし、僕も男の子なので一応話だけは聞いておくことにした。

まず、おっとりした、というよりはおどおどした印象の女の子が、

「わ、わた、私、如月^{きんづき} 弥生^{やよい}と言います……！あ、あの、一目、じゃなかった、ず、ずっと、あなたのころが、好きでした、いや、好きです！結婚してください！」

と、恥ずかしそうにもじもじしながら、飛んでもないことを言っ
た。

次に、人形みたいにきれいな少し冷徹な印象の女の人が、

「私の名は十三夜月^{じゅうさんやづき} 夜闇^{よやみ}。昔の縁であなた様にお仕えするよう

仰せつかいました。以後、どうぞよしなに」

と、冷静に飛んでもないことを言った。

最後に、ちびっこい、研究者のように白衣を着た頭のよさそうな印象の女の子が、

「ボクは心葉こころは零れい。いちおう研究者なんかをやってる。そのせいかこの前助けてくれたお前に興味を抱いてな。無期限で研究させてほしい」

と、えらく尊大に飛んでもないことを言った。

「……え、ええと。まずは整理しようか。如月弥生ちゃんは僕と結婚したくて来て、十三夜月夜闇さんは僕に仕えたくて来て、心葉零ちゃんも僕を研究したくて来た、ってこと……？」

え、ええ？なにそれ。

そりゃ僕だつて男の子だよ？こんな風にいきなり女の子が押し掛けてくる夢想をしなかったってわけじゃないし、結構頻繁にしていた気がする。

でも、この状況は僕の望んだのとはちょっと違うような……？

「あ、あ、あ、ああの！わ、私、家には『尼僧になる』って言うて出てきちゃったんで、帰れないですけど、ここに住んで、いいですか……？」

「私はすでに『月』からこちらに降りて来た身。もう帰るところなどあなた様以外にはありません」

「ちなみにボクは研究所から抜け出て来たからね。しばらくかくまってくれたら嬉しいな」

さらに、追い打ちをかけるような三人の言葉。

え、ええと！？

一体何が！？

ていうか、どうしてこんなことに！？

いったい――

ガチャ。

いま、聞こえてはいけない音がしませんでしたか？

「おーい、四季！そろそろ干上がってんじゃないかって、この優しい間宵様が食事を運んできてやったぞ！喜べ！

なあ、聞いてくれよ、今日はどうも野菜が少なくてな、相対的に肉の方が多くなっちゃったんだよ。まあ、けっしてお前のためにわざわざ肉を買い足した、なんてことはなくな、ただ野菜が少ないか

ら肉が多く感じるだけ……なん……だ……よ?」

……ああ。

「あの、お優しい間宵様?」

なんで、そんなに肩を震わせておられるのでしょうか?

「……なんだ、四季。遺言、か?」

なんで、そんなに女子高生が発するべきでない殺気を発しているのでしょうか?

「あ、危ない、四季君!」

「何奴」

「誰だ!?」

弥生ちゃん、夜闇さん、零ちゃん、三人がほぼ同時に僕を守ろうと背中にかばった。

「……オーケー、オーケー。理解したぜ、四季。たしかその妙にきよどつてんのが今日私と四季が助けたクラスメイトだな? そんなで、隣にいるメイド服の奴は確かナンパされてた奴だ。な、そうだろう? で、その隣のちびっこいのが黒服に襲われてたやつだ。……へえ、そうかそうか。今日助けた奴みんなてめえんとこに転がりこんだか。そうかそうか。それで、てめえは受け入れた、と。……へえ。」

てめえに自殺願望があるとは思わなかったぜ!」

空手、剣道、柔道、合気道、合計一五段。

格闘面では学校一を誇る東堂間宵ちゃんの鉄拳が、僕ら三人をまとめて吹き飛ばした。

怒った間宵ちゃんは、冗談抜きで怖い。

気を失う前に思ったことは、それだけだった。

第一話〜プロローグ!?! (後書き)

こんにちは！作者のコノハです！

今日から始まるラブコメディ、『三人のフィアンセ!?!』です。

とまあ、現段階ではフィアンセ一人しかいないんですけどね。

まあ、『!?!』ですからいいんです。

楽しんでいただけたでしょうか？きっと楽しんでいただけたと信じています。

では、駄文散文失礼しました！

ご愛読感謝！

では次回！

第二話　交渉成功！？

……僕は座らされている。

僕は自室で、本来一人暮らしなはずなのに、女の子に説教されている。

気絶から覚めたら、もうすでに他の三人は正座中で、目覚めると同時に正座を強要された。

まあ、この子は女の子、と言っているのかどうか分からないほど乱暴だけど。

「ああ！？四季、てめえ、今失礼な想像したろ！？今どんな状況かわかってんのか！？てめえの前に得体の知れねえ人間三人も押しかけてんだぞ！」

「得体が知れなくはありません！」

「私は『月』の人間です」

「僕は研究所の人間だよ」

三者三様に言いわけをする。

「だ、か、ら！てめえらわけわかんねえこと言っんじゃねえ！つうか四季！てめえも玄関で追い返せ！なんで家に入れてんだ！こいつらがやばい関係の人間だったらどうするつもりなんだよ！」

「だから、私は怪しいものでは……」

「私は『月』に所属していた十三夜月夜闇です」

「ボクは国立研究所から来た心葉零だよ」

正直、今のところ弥生ちゃんが一番不利なんじゃないだろうか、とどこか遠くの世界のことにように思ってみる。

「おい、四季！聞いてんのか！」

どうやら間宵ちゃんは、少しの現実逃避も許してくれないようだ。

「聞ってるよ。……なんでこの子たちを入れたか、って？」

「そうだよ。どうせ女の子だったからだろ？お前モロ結婚詐欺に引っ掛かりそうなツラしてるもんな」

うるさい。僕だって男の子なんだ。ちょっとぐらい色香につられても仕方ないでしょ。

「てめえなあ。なに開き直ってんだよ。言わなくてもわかるぜ？今絶対心の中で私のこと否定しただろ」

「し、してないよ！」

なんでそんなことまでわかるんだ！？超能力者か、この子は！？

「……まあ、どうせ女の子だから、って理由で入れたんだろ。これがむくつけき男だったらその場でドア閉めるくせに、何考えてんだか。ほんと男ってのは馬鹿だね」

こつ間宵ちゃんが達観するのには理由があった。

たとえば、間宵ちゃんの通う道場に女の子の門下生がほとんどいなくて、男女合同でやるしかない時。

少し胸元を開けて戦うだけで、一瞬で勝負がつくんだとか。

同じ人に何度やっても面白いぐらいに引つかかるので、間宵ちゃん
は男の愚かさを悟ってしまったようだ。

「で、なんでてめえらはここに来たんだよ。ああ、その理由を訊
いてんじゃねえ。どうやって、だよ。ホワイじゃなくてハウな。じ
ゃあ、その内の生徒から」

でも、間宵ちゃん意外と自分の胸の大きさ自覚してないんだよな

……

「おい、てめえ話の最中になに人の胸見てんだこら。月のかなた
まで投げ飛ばすぞ？」

「ごめんなさい」

速攻で土下座。

じゃないと本当に投げられる。

月まではないとしても、アパートの端から端までぐらいはあるか
も知れない。

「よし、仕方ねえから許してやろう。……で、あんたらはどうや
ってここを知った？」

間宵ちゃんがそう訊くと、三人は口をそろえて、

「尾行しました」

と、言ったのだった。

さすがの間宵ちゃんも、ずっこける。

「な、なあ！？お前らそろってストーカーかよ！？ますます怪しいな……」

「で、でも！」

ここで、弥生ちゃんが声を大きくした。

「で、でも、私、家に黙って出て来たので、行くあてないです……ここ追い出されちゃったら私、野宿するしかありません……それが、本当に屁になるか……」

う、と間宵ちゃんが言葉に詰まった音が聞こえた。

「私も、『月』からはもう名を排された身分ですので、もしここから出ていけと言われるのなら、私は死ぬしかありません、『月』の人間が生涯仕える人間は一人ですの」

うぐ、とまた呻く間宵ちゃん。

「ボクも同じようなものだ。研究所から抜けだしてきたからな。ここを追い出されれば引き戻され、罰として死にも等しい苦痛を与えられるだろう」

うぐぐ、と間宵ちゃんはさらに呻いた。

「……ね、ねえ、間宵ちゃん、ちょっとぐらいならこの部屋スぺ

―スあるし、別に泊るぐらいなら……」

「うるせえ四季！ てめえそんなこと言ってこいつらとえっちなことするつもりだろ！ ……その、口にするのも汚らわしいことを！」

「僕はそんなつもりないよ！ でも、行くあてないなら、ねえ？」

うぐ、とまた言葉に詰まる間宵ちゃんに、僕はさらに追い打ちをかける。

「もし、追い出してこの子たちが事件に遭ったらどうするのさ？ ね、少しだけだから、いいでしょ？」

う、うぐぐ、としばらく呻いた後、間宵ちゃんは言った。

「し、仕方ねえ！ いいだろう、泊めたきゃ泊めろ！ 私はもう知らねえからな！ 不純異性交遊してたって、先生に言いつけてやる！」

うわああああああああああああああん！

と、間宵ちゃんは目に涙をためて走り去っていった。

……なんで泣いてたんだろう？

「よ、よろしく、みんな」

僕は三人に向き直り、三つ指をついた。あれ、ちょっと違うような……でも、ま、いっか。こんなのは雰囲気だよ、雰囲気。

「こ、こちらこそ！」

「よろしく願いします、四季様」

「世話になるよ、四季」

挨拶が終わったわけだけど。

「ねえ、君たち、ちょっと訊いていい？」

「も、もちろんです！ なんでも答えちゃいますよ！？」

「どうぞ、ご自由に」

「好きに訊け」

うん、許可が出たみたいだし、訊こうかな。

「どうして、僕のところに来たの？」

「好きだからです！」

「好きなり、使えなくなっただからです」

「興味が湧いたからだ」

なんだか、さっきからこんな理由ばっか。なんか話す気ないんじゃないかとも思えてくる。

……ま、いつか。もしそうなら、きつといつか話してくれるよ。

「そっか。ま、とにかくよろしくね」

「はい！」

「はい」

「わかった」

ま、そんなこんなで。

僕たちの同居が、始まった。

第三話　食事時の恐怖！??

「はう、あの、お、お食事、作りましょうか？」

そろそろ夕暮れ時、弥生ちゃんがそう言った。

「うん、ありがと」

僕はそう軽い気持ちで言った。

「四季様にお食事をお作りするのは従者たるこの私です」

「ボクは研究対象に餌をやる義務がある」

でも、最終的には一つしかない台所を取りあう結果になってしまった。

「い、いえ！わ、私が作るんです！」

「私です」

「ボクだ」

弥生ちゃん以外は口調こそ大人しいが、絶対に引こうとしない。

「……ねえ、一人ずつ作ったら？」

僕は毎日交代して作ったらどう？って言ったつもりだった。

本当に、それ以外の意味はなかったはずなんだ。

「そ、そ、そうですね！じゃ、じゃあ、私から作ります！」

そう言っただけで料理に向かったのだけれど、さっきみたいに二人が割り込もうとはしない。

わかってくれたのかな？

しばらくすると、料理が出来上がった。

「あ、あの、少しだけ、待っててください！」

そう言っただけで、どんな料理ができたのかは見せてくれなかったけど、きつとおいしいんだろうな。

と。そう思ったのもつかの間。

今度は夜闇さんが料理をし始めた！？

「え、ええ！？な、なんで夜闇さんまで！？」

「夜闇、とお呼びください」

料理を作ったまま、僕に呼び掛ける夜闇さん……じゃなかった、夜闇。

「よ、夜闇はどうして料理を？」

「決まっています、私の番からです」

ええと、なんで？

僕は戸惑いながらも、ああ、明日の朝ご飯作ってるのかな？とか勝手に納得しておく。

「完成しました。では」

と、やはり料理は見せてくれなかった。

次に、少しは予想してたから驚かなかったけど、やっぱり零ちゃんまでもが料理に取り掛かった。

「……なんで？」

集中しているのか、零ちゃんは答えてくれなかったけど。

「……できた。ではみんな、お披露目といこうか」

零ちゃんがそう言うと同時に、僕の目の前に三つの料理が差し出された。

三人ともの料理全てがとんでもない量があり、どう考えてもその量を三つも食べるなんて、無茶もいところだった。

「え、ええと？」

「た、食べてください！」

「食べてください」

「食べる」

だから、なんで？三つも？し、しかも……

それ、本当に料理って呼んでいいの？

三人共の料理がみんな、その、なんて言うか……作ってもらったのに失礼なのは重々承知だけど、正直ゲテモノ料理のほうはまだおいしそうだろうというほどの出来だった。

「……こ、これ、なに？」

弥生ちゃんのぐつぐつと煮立っている鍋を指して、言う。

弥生ちゃんの気弱そうな正確に反して、その料理は自己主張の激しい赤が主体の辛そうな料理のようなものだった。

「こ、これですか？か、カレーです！」

カレーって、茶色いよね？

そう突っ込んだら負けな気がした。けど、勝ってもない。

「あの、よ、夜闇？」

「肉じゃがでございます」

「ございますって、……け、消し炭にしか見えないんだけど……」

炭になっちゃった、というよりはもともと炭を作るつもりだったんじゃないかってほどきれいな炭化っぷりだ。炭として使えても、食べられはしないだろう。……食べさせませんよね？

「ええ、と、零ちゃんのは？」

「……う、うどんだ。これしか作れなくな。で、でも！これ、ボクはよく研究所で食べていたんだ、特に問題は……！」

あるでしょうよ。だって、うどんのスープに錠剤がいくつもいくつも浮かんでるんだもん。

ケミカルすぎて食べる気起きないよ……健康にも悪そうだし。

「……あ、あのあのあの！ど、どれが一番おいしそうですか！？」

「私のものに決まっています。料理は肉じゃが。『月』でもそれが一番だと……」

「ボクのだろう。研究所でも評判だったんだぞ？」

「な、何を言うです！私自信作なんですよ！？あ、味見もちゃんとしたし、調味料も間違ってます！私のが一番おいしいんです！……ですよね、し、四季君」

「何をおっしゃいます。私は従者。従者は主人の好みを完全に把握できています。事前調査でも、四季様は肉じゃがが好きだとありました。私に負ける道理はありません……ね、四季様」

「ふん！そんな食べたら死にそうな料理を出すなんて神経を疑うね！キミたちもつとちゃんとした料理を作れないのか！？この調子だと僕が一番のようだな！どうだ、四季！」

……間宵ちゃんの牛丼が食べたいな……

とか言ったらきつと泣かれるんだろうなとか思いながら、僕は
油汗をかきながら三つの料理を眺めた。

いちばん右。赤々しくて味は想像できる。……正直、これが一番
病院直行コースなんじゃないだろうか。

真ん中。黒々しくて味は想像できる。……これは将来的に危ないんじゃないだろうか。焦げって発癌物質だって聞いたことあるし。

一番左。真っ白けっけで味は想像できない。うどんの白に、錠剤の白。これが一番安全に見えてきた僕は、おかしいのだろうか？

悩んで、悩んで、悩んで……最後に僕が出した結論は。

「僕と勝負しようか。もし僕が勝ったら自分で作った料理は自分で食べることにしよう。じゃあ、料理を作るよ——」

結果、僕の圧勝。でも、彼女たちは自分の作った料理を笑顔で食べてましたとさ、ちゃんちゃん。

……なんだか、料理係は僕になりそうな予感だな。

第四話　登校時の災厄！？

「……うつ……すみません、四季君……お料理作れなくて……」
「すみませんでした四季様。なんなりと罰を申しつけください」
「すまなかったね、四季。あれがボクのスタンダードなんだよ。
……まあ、キミの作った料理もうまかったけどね」

「あはは、いいいいよ。そろそろ夜も遅いし、寝よつか？」

三者三様の謝られ方をした僕は、そう言っただけで布団を敷き始める。

と、言っても布団は一組しかないんだけど……。

「ねえ、君たちはこの布団で固まって寝てよ。僕は外で寝るから」

やっぱり女の子と同居はできないよ。
そう思っただけだよ、僕は。

なのに、なのに、なのに！

「え、私と、一緒に嫌、……ですか？」

「従者たる私と一緒に嫌いですか？」

「研究者のボクと一緒に嫌かい？」

完全に嫌だから断ってるみたいに取り立てる！

「なんでみんなそう取るの！女の子と一緒になんかダメだから言っ

てるんだよ!」

まったく、一つ屋根の下っただけで危ないのに、一緒に寝るなんてダメだよ。ダメダメ!

「……わ、私、は、その、はい、覚悟はして、来ましたから……」

「私はもとより四季様の従者であり道具。四季様の欲情を満たすのも、また勤めかと」

「ま、ボクは別にかまわないよ。興味ある」

皆さん方は全然ダメとは思っていないようです。
どうして? 今日初めて会ったんだよ?

「あ、あの、みんな! ? なんでそんなにノリノリなの! ?」

僕が訊くと、みな一様にして答えた。

「四季君のことが好きだからです!」

「四季様の従僕だからです」

「四季に興味があるからだ」

もう、どうにでもしてよ……。

僕は学校では結構評判がいい。らしい。

この間、宵ちゃんが、

『あんたさ、結構女子の中でも人気あるんだぜ、知ってたか？あ
んたがいつも人助けしてるところを見てるやつがかなりの数いるん
だよ。……だからな、四季。』

お前は誰にも見られてねえわけじゃ、ねえんだ』

そう言ってくれた時には、ちょっぴり涙が出た。

僕には両親がいない。少し前に、死んでしまった。

だから僕には保護者がなくて、もう誰にも見てもらえないんじゃないだろうか、って思ってた。

だから、誰かに見てもらえるよう、人助けをした。

それは簡単なことじゃなかったけど、ちゃんと評価されていた。

それをしれたから、とてもうれしかった。

『お、おい！なんで泣いてんだよ！私何にもしてねえぞ！？お、おい泣きやめって……………四季、泣きやめよ……………泣きやめつつってんだろ！！』

そう言ってドロップキックをかまされたけど、励ましてくれた間宵ちゃんに、感謝していた。

「よお、四季」

で、僕に感動をもたらしてくれた天使は。

信じられないほどドスの利いた声で、僕をとらえていた。

「え、あ、あの、間宵、ちゃん？」

「そんなに死にたかったのか、四季」

ゆらり……と、間宵ちゃんの後ろの空気が歪む。闘気が空気を曲げているのだ。

「……え、なんで」

「てめえ、如月弥生と寝たな？」

ぐさつと、僕の胸に何かが刺さった。

「あ、ぐ、なんで知って……」

「私とあいつは友達なんだよ。向こうが知らんぷり決めてたから私も付き合っただけどよ……でも、弥生がそんな風な目的でてめえに近付いたとはな、思わなかったぜ」

そ、それをなんで僕に言ってくるのかな？なんて訊いたところで無駄だろうな……。

「それで……？」

「てめえの節操のなさを教育しに来てやったぜ、感謝しな。そして死ぬ」

闘気が、形を持って僕に向かってくる。

え、あの、その……

「この、色狂いの大馬鹿野郎――――」

ズド――――ン！

人のこぶしが出したものとは思えないような轟音が、朝の学校に

響き渡りました。僕はもちろん、気絶しましたよ。

「……いてて……」

で、なんとか気絶から覚めた僕は、朝のホームルームで先生の話
を聞いていた。

「……で、今日は突然だが、転校生が来る。……正直、彼女たち
には私からも説明しづらいので、詳しくは本人たちに言うてくれ。
……そして、嫉妬はほどほどにな」

まだ頭の痛みがとれない僕は、先生の話がほとんど聞こえていま
せん。

からり……！

そんな音がして、教室中が騒がしくなったことだけは、聞こえた。

……なんだろ……？

僕は教壇に目を向けた。

先生が本来いるべきところにいたのは。

「今日からこのクラスで四季様ともどもお世話になります、十三夜月夜闇です。よろしく」

「今日からこのクラスで世話になる、心葉零だ。四季のことはなんでも教えてくれ！」

また気絶しそうな予感しか、しませんでした。

第五話　転校初日で言い争い！??

「……は？」

教室中が、そんな声を出したように僕は感じた。

「……な？わかんねえだろ？じゃ、質問な」

先生の質問に答えれる生徒はいなかった。ただでさえ、意味のわからない人間なのだ。何が地雷なのかわからないのだろう。

「……あ、あの……」

同じクラスの、弥生ちゃんがおそろおそろ手を挙げた。

その自己主張に、クラスの中の何人かが、驚いたような顔をした。

如月弥生。このクラスのポジションはいじめられっ子、であった。

僕が頑張つていじめはやめさせたんだけど、それでも、弥生ちゃんの根暗な子、というイメージは拭えなかった。

そんな子が、自分から手を挙げている。

「……あ、あの、夜闇さん、零さん、どうして……どうして、四季君に付きまとうんですか……？わ、わ、私は、一緒に、四季君と寝た、仲なんですよ……？」

またも、教室がざわめく。

「はあ！？秀句と如月が？マジかよ！」

「すげえ、進んでるな〜！」

「……ぶちっ……四季の奴、調子に乗りやがって……」

そんな声が教室のあちらこちらで起こる。ぼ、僕が一体何を？

しかし、さらに混乱を招いたのは、教壇に立つ二人の女の子の言葉だった。

「何を言っているのです如月弥生。四季様と同禽させていただいたのは私です。冗談は名前だけにしてください……なんですか、二月三月って……」

「私が二月二九日生まれだったからです！ほっといってください！あなたこそなんですか、『十三夜月夜闇』って！どう考えても偽名じゃないですか！」

教室がざわめいているのを気にも留めず、弥生ちゃんとはは思えないほどはつきりとした口調で言いあう。

「私の名前は『月』にちなんでつけていただいた『従名』です。名前がその者の能力を表すのです、偽名とはなんですか、偽名とは！」

「『十三夜』って満月一歩手前ってことじゃない！大方、料理だけがダメなんですよ！」

「う、ぐ！？な、あなたにだけは言われたくありません！この激辛料理女！普通真っ赤になったカレーなんて食べませんよ！？」

「消し炭食べてるような味覚音痴に言われたくありません！」

なんか、二人ともヒートアップしすぎてない？

「……キミたち、言い争うのは勝手だが、少しは場の雰囲気というものを讀みたまえ。……見る、四季が宇宙人でも見るような目を向けているぞ」

そう零ちゃんが言った途端、ぱつと赤くなって口を閉ざした弥生ちゃんと、冷めた氷のような表情に戻って一礼した夜闇。

「……ちなみに、四季はボクとも布団を同じくした」

まるで小学生のような体の零ちゃんが言ったんだから、教室はまたうるさくなった。

「おいおいおい！四季ばかりずるいぞ！間宵に続いて三人かよ！やるねえ」

そんな風に、冷やかしてくれる声は少なかった。

よくこの教室の喧騒を聞いてほしい。誰彼かまわず話しているように聞こえるでしょ？

でも、違うんだよ。

ほら、男の声はほとんど、いや一切聞こえない。

女子や教師に聞こえないように、声の調子を変えているのだ。

この声を聞きたろうとするなら、二カ月近い地獄の特訓に耐えなければならぬ。……あれは、つらかったな……

でも、僕もこのクラスの男子生徒、その声の調子は聞きとれる。

「……さて、どうする諸君。闇討ち、夜焼、いろいろあるが……やはり定番のトイレが一番訊きやすいのではないか？」

そう、さっきのように冷やかしてくれるのなら、まだ恩の字だったのだ。

女子や先生は気付いていない。こんなにも恐ろしい会話が、今かわされていることを。

「拷問つて、ほんとに効果あるのか？」

「あるさ。別に死んだところで構わねえし」

「裏切り者だからな。死を持って償わせるのが当たり前、というものだろう」

誰かー助けてー

そう心の奥で叫んでみたけど、無駄みたい。

「……まずは、トイレ、そして裏庭、体育館裏、ラスト路地裏だ。

……わかったな？」

コクリと意思に燃えた瞳でうなづく男子生徒諸君。

……明日の朝日、拝めるかな……

「……四季君！」

「四季様」

「四季」

いきなり、名前を呼ばれた。

え、と見回してみれば、教室はいつの間にか静かになっていた。もちろん男子の秘密会話は続いたままだが、誰にも聞こえない声なんて、ないのと同じだろう。

「……なに？」

「四季君は誰のことが一番お気に入りなの？」

「四季様は誰のことが一番なのでしょう？」

「四季は誰のことが一番好きなんだい？」

……え、いきなり、なんで？

会話を聞いていなかった僕がそんな質問に答えられるわけがない。ど、どうしよう？

「……四季」

そう悩んでいた時だった。

「へ？」

本日二度目の、悪鬼羅刹修羅、東堂間宵本気モードだった。

「おい、四季。てめえが家でメイド従えてようが乱交しようが文句はねえ」

え、文句ないの？って声が女子の間で起こった。

「だがよ、ここは学び舎だぜ？学校だぜ？てめえのハーレムのプレイスボットと同列にみられちゃ困るな……ああ、本当に困るぜ！」

目が、間宵ちゃんの目が真っ赤に燃えて、僕をにらんだ。

「おい、最後に何か、遺言はあるか？」

え、あ、そ、その……

「話を聞いて、間宵ちゃん、僕は別に彼女たちとは何にも……」

「問答無用だばかやろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

またも闘気の塊とこぶしが僕にクリーンヒットし、僕はまた気を失ったのでした。

第六話　神の申し子、妹襲来！？

放課後に目が覚めた。

今までどうも昏睡状態が続いて、死にそうだったらしい。

うん、さすが間宵ちゃん、暴力の桁が違うね。

そう思っ^て体を起こすと、ここがどこだかよくわかった。

ここは保健室。白いシートと白い壁の清潔の象徴ともいえる部屋だ。

「……四季様」

「あ、夜闇」

なんだか、こうやって夜闇を呼び捨てにするのも慣れちゃった。
なれない方がいいんだろうけど、慣れてしまったものは仕方ない。

「……みんな、は？」

あれ、そう言えば僕なんでみんながそばにいてくれるなんて思っ
てるんだろう？

いつもいつも一人だった僕に急に人が増えて、混乱してるのかな。

「……四季様」

もう一度、夜闇が僕の名前を呼んだ。

「四季様、私はあなたのしもべです。あなたが死ねと言えば、死ぬ道具です。……ですから、何かありましたらお話ください」

夜闇は強い意志を感じられる瞳を僕に向けたまま、僕にそう言った。

「……うん、そうするよ」

なんだか、いい相談相手ができたみたいに僕は感じていた。

「……四季様、少しお話が」
「ん、何？」

神妙な顔つきで、夜闇が言ってくる。
僕の生活を変えかねない、重要な事を。

「四季様の妹様がおいでなさっています。……どうしますか？」
「……え？」

僕は口に出してそう驚いた。

秀句 四様。^{しやう}

愛を示す杯の紋章、^{さかすき}知性を示す杖の紋章、意志の強さを示す剣の紋章、価値や気品を示すダイヤの紋章の四つの紋章……つまり、トランプの模様の四つの意味を丸めて、四様。

彼女は十三歳になる僕の妹であり、僕が八歳の時、両親が死んでしまったことをきっかけに生き別れてしまった。

そんな彼女が今、はるばる僕のところまできた。……ああ、元気にしているかな、四様。

僕は四様が待っているという学校の玄関まで夜闇と一緒に رفت。すると。

「……ら、あんたはどうしてお兄ちゃんと一緒に帰るってことになつてんの！？普通、遠いところから兄に会いに来た妹に隣を譲るもんでしょ！？」

「そ、それはどこの普通ですか……？」

四様がいると案内されたところでは、弥生ちゃんと女の子が喧嘩をしていた。

女の子は黒髪で、とても美人だが、言動の乱暴さが少し魅力受损ている。……間宵ちゃんみたいだ。

「……あ、お兄ちゃん！」

女の子は僕の姿を見つけると、ダッシュでこっちに駆け寄ってきて……

「うわっ！？」

いきなり、抱きついてきた。

「……四様様、四季様からお離れください」

夜闇がさりげなく、でも確実に四様を僕の体から引き離そうとする。けれど、四様は離れようとしない。

「何、あんた？私とお兄ちゃんの再会を邪魔するわけ？」

「私は四季様の従者、十三夜月夜闇です。……とにかく、お離れください」

バチバチ…… って、効果音が二人の間に流れた気がした。

「……さて、弥生君、そろそろ四季が来るころだろう？……おや？」

そして、今までトイレにでも行っていたのか、第三者、研究幼女がやってきた。

「……新しい君の愛人かい？」

「私はお兄ちゃんの妹よ！なんなの、あんたは！」

「ボクは心葉零。……ふむ、妹、か。……離れたらどうだ？四季が嫌がつてる」

また、バチバチ。

「おい、四季！さっきはその、少しやりすぎた……すまない、じやなくて！あの、その、一緒に帰らねえか…… って、何してやがんだてめえらは！？」

ああ、これで僕終わったな。間宵ちゃんの登場だ。

「私はお兄ちゃんの妹よ！……あんた、何？」

さすがに四様もおんなじような質問を4回もすれば煩わしく感じ

るのか、少しめんどくさげだった。

「私は東堂間宵。……へえ、四季の妹ねえ。昔話にや聞いてたが
…実在したんだ？てつきり四季の妄想かと思ってたぜ」

三度目のバチバチと、僕と四様を同時に攻撃する間宵ちゃん。…
…おい、頼むからこれ以上刺激しないで。四様はキレるととても
…もなく怖いんだから……。

そう不安になるのは遅かったのかもしれない。

「……………如月、弥生」

ひどく、冷めた声が抱きついたままの四様から聞こえた。

「……………十三夜月、夜闇」

ふわりと、地獄の底からわき出るようなそんなエネルギーが四様の
…の周りを囲む。

「心葉、零」

周りの空気がそれにつられてひどく冷えた気がした。

「……………そして、東堂、間宵」

「な、なんですか……?」

「何でしょう」

「何だい?」

「何だよ」

「……名前は、覚えた。覚悟しててね。ちゃあんと、闇討ちしてやるから」

ああ、言っちゃったよ。秀句四様の『闇討ち宣言』。

四様が本気でキレた時にしかない宣言だが、めちゃくちゃ効果ある。

何せ、闇討ちと言っても四様が手を下すんじゃないくて、世界が手を下すのだ。

もともと、四様は神様に愛されているような人間で、運が向こうからやってきて不幸が向こうから去っていく、そんな天運の持ち主だった。

だから、彼女が闇討ちすると宣言された人間は、数日間の内に間違ひなく不幸な目に遭う。

たとえば、7歳のころ僕をいじめていたガキ大将たちは、四様に宣言されたその次の日に両手両足複雑骨折で一年近く入院して、小学校の時点で留年する羽目になった。

これは噂だが、一度四様に告白した馬鹿な奴がいて、そいつも例のごとく宣言された。

『私にはお兄ちゃんがいると言うのに、それを知ってなお、私にそんなことを言うとは……!!』

それが理由らしい。

宣言された二日後、その馬鹿は……………

隠れた、絶対に秘密だったはずの趣味である女装がばれて、しかも全国区で噂が広がって、名前まで公表されてしまい、日本に居場所がなくなって今はアメリカ暮らしなんだとか。

四様との学校は遠く離れているのに僕まで噂が届いているのが、四様の力の証明だろう。

「……四様、そんな簡単に闇討ち宣言しちゃだめだよ……」

「そうね、お兄ちゃん。闇討ち取り消し」

そう言つと、四様に取り巻いていた地獄のような雰囲気はきれいさっぱり消え失せる。

あれ、四様って結構沸点低かったはずだけど……？

四様が怒りを引つ込めた理由は、すぐに分かった。勝者の余裕だったのだ。

「なんたつて、お兄ちゃんは転校して私のところに来るんだもん。……あなたたちは、ここでわ、か、れ！」

……聞いてないぞ妹よ。

第七話　妹襲来の真実説明！？

よくよく考えれば、今までおかしかったのだ。

僕は8歳で両親が死んだ。

そして、それ以来一人暮らしをしている。

当時五歳の妹は母方の祖父母に引き取られたが、なぜ僕は8歳の時分で一人暮らしなんてできたのだろう。

僕が、強く言ったからかもしれない。

間宵ちゃんが主張したからかもしれない。

でも、一番の理由は。

『私には特殊な力があるけど、お兄ちゃんが一緒にいたら発揮できないの』

と、四様が嘘をついたからなのでは、と今になってならわかる。

祖父母は四様の特殊な神懸った運に惚れこんで、利用しようとしていたのだろう。

だから、今まで僕は四様に近づけてももらえなかったし、四様は僕に近づけなかった。

僕があのアパートに残りたい、なんて我がまま言ったから、そう
なったのだ。

「お兄ちゃんともう一度暮らしたい、今度は大丈夫になったから、
って言ったら快諾してくれたわ。あの二人は私の運にあやかれたら
もう何でもいいみたい」

そう四様が悲しそうに言っても、僕には否定の言葉は見つからな
い。

「……で、でも、四季君が断ったら……」
「断るわけないでしょ」

四様は自信たつぷりに言い放った。

「昔からお兄ちゃんは私のことが大好きだったんだから！いつ
もいつも、二言目には『四様をぼくのおよめさんにする』だったも
の。いきなり出てきてあなた達に気持ちが揺るぐはずないわ！」

ここは僕のアパート。あれからいくつか言い争いをしながらも、
全員無傷で帰ってきた。

ちやぶ台に僕、弥生ちゃん、間宵ちゃん、夜闇、零ちゃんが円を
書くようにして座っている。

「いや、勝ち誇つてるところ悪いけど、僕行かないよ？」

ちやぶ台に足をのっけかねない勢いで勝ち誇っていた四様の顔が、
凍ったように固まる。

「え、ええ？お兄ちゃん、なんで、どうして!？」

四様はさっきまでの傲岸不遜はどこへやら、いきなり泣きべそになりながら僕にすぐるように抱きついてきた。

「だ、か、ら！僕はこのアパートから離れるつもりはないの！な
んでいきなりやってきて僕がここから出る前提で話が進んでるのさ
！四様、少し見ない間にかなり我がままになってるよ！？おじい
ちゃんたちに迷惑駆けてるんじゃないだろうね！？」

「……お、お兄ちゃんが男らしくなってる……」

僕の必死の説教を、その言葉で済ませた四様。

「なに言ってるんだい、君は！」

「男子三日会わざれば、括目してみよ、とはよく言ったものね…
…お兄ちゃん、お兄ちゃんらしくなってる……」

なんだか本気で馬鹿にされている気がしてきた。
昔の四様って、もっとこうかわいらしかった気がするけど……。

「さあ、用事が済んだなら帰って！僕は君のところには行かない
よ！」

それが、四様との最後の会話だった。

「……っん」

そう言つと、すごすごと引き下がり、まるで幽霊のように扉を開
けて、出て行ったのである。

パタン。

物悲しげな音を立てて、扉が閉まった。

「追いかけなきゃいけません！」

「追いかけた方がよろしいかと」

「追いかけなよ」

「追いかけてやがれ！」

いきなり女性陣から追いかけるコール。……一応、触らぬ神にな
んとやら、ここは従っておこうかな。

「……いつてきます」

僕はそう言っていると、四様を追いかけて扉を開けた。

公園。

この街の公園は、僕らにとっての思い出の場所だ。

いつもいつも、お父さんたちと一緒に、遊んだ、公園だった。

「……四様」

そんなところに、僕の妹はいた。

ブランコに座って、さみしげにキイ……キイ……。

「……お兄ちゃん。追いかけてきて、くれたんだ」
それが意外なことであるかの様に、四様は言った。

「何意外そうな顔をしてるんだよ。いきなり出てったら驚くだろ？」

「でも、邪魔なんですよ、私……」

そんなことない。

でも、さっきの言葉を言ってしまったあとでは、取り繕うように

しか聞こえないだろう。

「……お兄ちゃんは、変わったね」

「四様も、変わったよ」

何年ぶりになるんだろう。いまさらながらにそう思った。

「……お兄ちゃん、私ね、ほんとね、お兄ちゃんに会いに来ただけだったんだよ」

急に告げられる、真実。

「私ね、ほんとね、……外国、行くんだ」

……え？

一瞬何を言っているのか理解できず、僕は口を開けたまま突っ立っている格好になった。

「私、この能力をもっと開花させるために、有名な脳開発の先生のところに行くことになってるの。……おじいちゃんたちが、そう言ってたの」

あの人たち、……そんなこと、まで。

「嫌がったのか？」

「……さっき、お兄ちゃん言ったよね、答えてあげる。『迷惑なんてかけてない』。私はね、今のところ、搾取されてるの。……迷惑なんて、かけようがないんだよ」

ひどく悲しげに、四様は言った。

「……ばいばい、お兄ちゃん」

そう悲しげに言う四様に、僕は――

第七話、妹襲来の真実解明！？（後書き）

第八話　新たな決意と死の香り！??

「行かせないぞ」

僕はつよい口調で言った。

「……え？」

四様はどうも驚いているみたいだった。

「絶対に、行かせないぞ。そんなバカみたいな理由で、外国になんか行かせるもんか」

そうだ。何考えてるんだ、祖父母達は。

能力を増強する？そんなことしたら、今まで病院送り程度で済んだ闇討ちが今度から本当の意味での闇討ちになっちゃうだろう。

「……おにい、ちゃん。……ありがたいけど、無理だよ」

「無理じゃない。……絶対、外国なんて行かせるもんか。行かせないぞ。……絶対にだ」

僕は強い口調で言う。

四様は驚いたような顔をしているが、その顔にうれしいとか、そう言った表情はない。

「……無理だよ。……だって、もう一週間後には先生のところに行くことになってるんだから……」

「大丈夫。おにいちゃんに任せて。四様はしばらく休んでて。…

…長旅で疲れたろう？」

僕はできるだけ、優しく言った。

正直、何をすれば四様が外国へ行かずにいられるかなんて僕には思いもつかない。

でも、いったん部屋に戻れば。

弥生ちゃんも、夜闇も、零ちゃんも、間宵ちゃんだっている。

三人あれば、文殊の知恵。

五人でなら、文殊よりもきつといい知恵がでる。

……四様を、守るんだ。

「……うん。お兄ちゃんの部屋で休んで、いい？」

「いいよ。……じゃ、帰ろうか」

僕はともすれば泣きだしそんな顔の四様を見ないふりをし、前を行って歩く。

「よかったよう……」

ふと、注意していなければ聞こえないほど小さく、四様は言った。

「よかったう……私、お兄ちゃんに嫌われたんじゃないかって、ずっと、ずっと思ってた……」

……そうか。あの時、僕があのアパートから出たかと言ったのは、自分と会いたくないからだ、思われてたのか。

「嫌う？誰が誰を？僕のたった一人の血を分けた妹を、嫌うわけないじゃないか」

僕は少しだけキザったらしく、そう言った。

「……うん、私も、お兄ちゃん大好きだよ」
「僕もさ」

僕と四様は夕日に染まりかけた道を、昔のように歩いて帰った。

なんだか、家に帰ったらお父さんもお母さんもいるんじゃないだろうか。

そんなありえない想像をしまうぐらい、懐かしかった。

お父さんはいなかった。
お母さんもいなかった。

でも、はなぜかエプロン姿の彼女たちはいた。

「……みんな？」

「な、なんですか？」

「なんででしょう」

「なんだい？」

「なんだよ」

同時に返答が返ってくる。

「……何よ、あんたたち」

四様がそう引きながら言つのも、今では無理なかった。

だって、四人とも、エプロン姿。

ここまでは、いい。

うん、たしかにみんな似合ってる。でも、その四人が囲っている鍋の中身が、まずかった。

いや、まずそうだった。

「……お、お料理、作ってます」

「料理をしています」

「料理をしているんだ」

「料理してんだよ」

僕は四様に対抗するために魔術の力でも借りようとしていたのか
と思ったけど、どうもみんなの答えを聞く限りでは、料理をしてい
たようだった。

でも、鍋の中身は確実にそっち方面の内容だよ？

黒、紫、緑、赤……

それらがマールブル状に形作って、きれいな模様を描いている。も
しこれがきれいなガラス球の中に封入されていたら、さぞかし美し
いインテリアになるんだろうな、ってぐらいには整っている。

でも、これはインテリアではなく、料理だ。

……まさか、僕と四様が食べるんじゃない、よね？

「……お兄ちゃん、きつと食べるのお兄ちゃんだけだよ。だって、
私運あるもん」

あ、そうか。四様は神がかった運があっただんな。と、いまさら
ながらに妹の能力を再認識。

「な、何があったかは知りませんが、ど、どうぞ四季君、た、食
べてください！みんなで作りました！」

「四季様に食べていただくため、私たちは奮闘しました。……せ
めて、一口だけでも」

「四季、キミのためにボクが頑張ったんだ、ちゃんと食べてくれ
るだろう？」

「わ、私、料理は少しだけ不得意だけど、お、おまえ、じゃなか

った、四季、お前のために作ったんだ、食べてくれ！」

……はい、みんな誰一人として四様の存在を考えてる人がいない。
助けて……

そう言う意思をこめて四様を見た。

「……………」

もう死を待つだけの病人を見るような顔をして、四様は首を振った。

「……お兄ちゃん、本当にお兄ちゃんはいいいお兄ちゃんだったよ」

別れの言葉までつけてきた。

「……ええい、ままよ！」

僕は差し出されたそろそろ色が混ざってなぜか金色銀色になりつつある鍋をにらみつけ……

最初の一口を口に含んだとたん、僕の意識はブラックアウトした。

もう、この人たちにキッチンを明け渡すもんか。

第九話　夜闇の打開策！？

「……で、……なの」
「……そう。……で、……が、……あ、目が……」

声が、聞こえる。
多分、四様の声だ。
それと、間宵ちゃん。

「……ん、ですか？」
「……誰だろう？」

……ああ、そうか、弥生ちゃん、かな？

「……です。……はい、そのように……」
あ、これはわかる。夜闇だ。

「……く、これは一体……。……こんなことも……。……ものか」

あと消去法で零ちゃん。

四様と間宵ちゃんはすぐに分かったのに、他の三人は声だけじゃ過ぐにわからなかった。
でも、しょうがない気もする。

だって、まだ一日しか経ってないのだ。

三人が来て、僕の部屋に住み始めてから。

……だんだん、意識がはっきりしてきた。

「……あ、目が覚めるわ」

その、誰かわからない声をきっかけに。

僕は目覚めた。

「あ、起きた。ってか、生きてたのか。今から葬儀屋に電話しようか悩んでたところなんだよ」

いきなり、間宵ちゃんがそんな辛辣な言葉を投げかけて来た。

「はう、ま、間宵さん、今まで気を失っていた人に、その、その言い方は、どうかと……」

「は！人の料理食って気絶するような奴に与える温情はねえ！そのまま死ねばよかったんだ！」

なんだか、いつもに増して乱暴な言葉遣いの間宵ちゃん。
どうしてだろう？

「……とかなんとか言っておりますが、四季様が寝ておられる間一番心配していたのは間宵さんですよ？」

「う、うっせえうっせえ！嘘だよ四季！とっとと死ねばいい、とか、私の手でとどめ刺してやろうか、とかずっと思ってたんだからな！」

「ふむ、それでかいがいしく頭の濡れタオルをこまめに変えてやつたり、30秒に一回『大丈夫か、こいつ！死んだりしない、よな……？』とか訊いていたのか。実に興味深いな」

「そこ、黙りやがれ！」

「さっきまでうるさくお兄ちゃんの心配してたのは誰だった？」

病院連れて行った方がいいのかな』って、あなたたちお兄ちゃんに毒盛ったの忘れてそんなことまで言って……」

まあ、調べて体から毒物が検出されたら間違いないく間宵ちゃんたちは警察のご厄介になるだろう。

「ち、ちが、あれは、その、ってか、毒ってなんだよ……ってあ
あ、もう！」

そう言っつて突っかかりうとするが、相手が四様なを見て、う
つ、と動きを止める間宵ちゃん。

……なんだか今日は間宵ちゃんがかわいく見える。こんなの本人に言っつたらまた気絶させられそうだけど。

「……僕は、どれぐらい眠っていたの？」

頭にある冷えた濡れタオルを手でどかしながら、訊いた。

「おおよそ4時間、現在時刻は9時でございます」

すぐに答えが返ってきた。他のみんなは時計を見たりしてるのに、ずつと僕の方を向いて、正確な時間を言った。すごいな、夜闇は。

「私の名前は十三夜月夜闇。完全を示す『望月』一歩手前を意味します。料理以外で、私が失敗することはあり得ません」

自信満々にそう言う夜闇。

「へえ、さすがだね。……じゃあさ、四様の外国行きとか止めれたり……しないよね、やっぱり」

さすがに冗談言いすぎたかな。ああ、お兄ちゃんに任せるとか言

っておきながら、僕は何を……

「可能です」

「……え？」「……」

僕、四様、弥生ちゃん、間宵ちゃんの四人が同時に声を上げた。

「か、可能って、ど、どうやって？神の運を持つ私でも、このできごとは、……回避できなかったのに……」

「いえ、おそらく四様さんの運は発揮しています。私に会い、四季様が四様さんの外国行きを止めたい、そうおっしゃったというだけで、もうその願いはかなったも同然。……さあ、四季様。私に命令を。『四様の外国行きを止める』、と」

ど、どうしよう？

正直、夜闇さんはできると思う。……でも、一体どうやって？

「あ、あの、夜闇。どうやって、止めるのかな？」

なぜか、それを訊かなきゃ絶対にダメな気がして仕方がなかった。

「いくつか方法があります」

「いくつも方法があるの？」

「はい」

「言ってみて」

「了解しました」

いったん息を切って、夜闇はその方法を、語り始めた。

「まず、第一に。」

四様さんを引き取っておられるという祖父母さん達二人を、亡き者に。そうすれば四様さんに外国に行けと強要する人間はいなくなるわけです」

さっきの僕の直感も、四様の運の内なのだろうか。夜闇の話を聞きながら、僕は思った。

「え、あ、その、つ、続けて？」

あれ、なんで僕、こんなこと言ってるんだろ？

「第二に、外国におられるという能力開発の先生を亡き者にすることです。そうすれば目的がなくなり、祖父母さんも外国に行けと強要しなくなるでしょう」

また、訊いていてよかったと思った。もしなにも訊かずに止めたと命令していたら……

想像したくない。

みんなは急に頭角を現した夜闇の怖さに閉口し、何も言えずにいる。

「も、もつとないの？」

できるだけ、安全なの。

夜闇にはどうやら、その意思をくみ取ってはくれなかったようだ。

「第三に、四様さんを亡き者に。いくらなんでも、死体が能力を進化させるとは――」

「本末転倒じゃねえかこら！」

わりかし本気で、間宵ちゃんが夜闇の後頭部をはたいた。よくやった、とみんなも目で言ってる。

「何をするのです」

「何をするのですじゃねえバカ野郎！てめえさつきから黙って聞いてりゃ物騒なことばかりじゃねえか！てめえメイドじゃなかったのかよ！」

「今のメイドは戦闘するもののほうが多いと聞きましたが」

「それは物語の中でのことだろ！本気にすんなバカ！」

間宵ちゃんが、なんとか夜闇の暴走を止めてくれた。

夜闇だけは、怒らせたらダメだ。

しだいにつるさくなる部屋の中、僕は深く心に、この言葉を刻みつけた。

第十話　平和な平和な金曜の夜！？

で、結局。

「……もつと効率的な方法があったと思うのです、四季様」
「てめえは黙ってろ、殺人メイドが」

「暴力女に言われたくありません」

「人殺し好きにも言われたかねえな！」

「私は殺人狂ではありません」

「じゃあさっきの提案なんだったんだよ！全部人死に出てるじゃねえか！」

「仕方のない犠牲です」

「その犠牲の中に当事者混じってどうすんだ！」

「別に犠牲になるのはあなたでもいいのですよ？」

「ああ！？やんのかゴラァ！」

で、結局、僕たちが四様のためにしてやれること、として決まったのは、

「あなたこそ。一発で泣きを見ても知りませんよ？四季様のお友達ということで手加減ぐらいはしてあげますが」

「んだとゴラ！かかってこいやクソメイド！」

四様の実家に行つての直談判、ということになった。

まあ、ありふれているし、現実性があるし、何よりも死者がでない。これはいいことだ。

「ええ、行つてあげましょう。お迎えが来るまで遊んでさしあげます」

「はあ！？そりゃこつちのセリフだクソメイド！メイドを冥土に送つてやるぜ！」

「ぼけたつもりですか、暴力女。面白みに欠けます。まあ、人間性が欠けているんです、冗談のセンスが欠けていないという道理もありますまい」

「殺してやるぜ、クソメイド！」

「どっちが殺人狂だか疑われるようなセリフですね。口には氣をつけた方がいいですよ？自制できないようでしたらその口、縫つて差し上げましょうか？」

「ああ！？てめえのむかつく口、二度と利けなくしてやる！」

どうせ明日は三連休で暇もしていたし、四様の家は観光地としても広く知れ渡っているのだ、これで行かない手はないだろう。

「できるものならやってみなさい、私の名前は十三夜月。料理以外は完全なのです！」

「やってやろうじゃねえか！」

それに、四様をいように利用している祖父母の姿も、一度見てみたかった。

「はう、あの、ふた、ふたりとも、あ、争いは、はふ、よくないです……」

「うるさい！」

「少し黙っていてください」

「はう……なんで聞いてくれないんですか……？ 争いなんて、

いいことひとつもないのに……」

「四様、君の家って、どこら辺にあるのかな？」

「え、お兄ちゃん、今それどころじゃ……」

「え？何か変なことでも？」

何言ってるんだろう。今日も平和でいい夜じゃないか。喧嘩なんか起こってない、断じて起こっていないいい夜だ。

「ああ、うん、わかったわ。……ええと、熱海。温泉と海が有名な」

熱海、かあ……

テレレ、テレーレー！

……みたいな場面しか思い浮かばない僕は、おっさんなのだろうか。

「……さて、準備しようか」

「あ、は、はい……」

「……放っておいていいのかい？」

「何を？なににも起きてないじゃないか」

変なこと言うなあ、零ちゃん。何にも起きてないよ。そう、喧嘩なんて何にも起きてない……

「……わかった。では、準備を始めようか」

「そうね」

「そろそろ……くたばれ」

「お前こそ……早く倒れてください……」

なんかいい感じで勝負になってる光景なんてまったくない。ないっ
たらない。

「さ、始めよっか！」

僕達の三連休は、熱海で過ごすことになった。

お金が妹持ち、というのが兄としては情けなく感じるのだけど。

第十一話　三連休の旅行計画！？

「……すまん」

「すみませんでした、四季様」

二人はなぜか、僕に謝ってきている。
何故だろうね？

「あはは、どうして謝るの？なんにもしてないじゃないか！別に、謝らなくてもいいよ！」

「う、……もう意地悪はやめてくれないか。頼む……」

「普通にお叱りください、お願いですから」

……むづ。

「なんで二人は喧嘩してるの！夜間、君がめちゃくちゃな提案するからでしょ！」

「返す言葉もございません」

「おいおいおいおい！てめえずいぶんと私の時と対応違つくね！
？猫かぶりかクソメイド！」

「間宵ちゃん！」

僕が言つと口を閉ざす間宵ちゃん。

「……わあったよ。で？いつ行くだよ、熱海へは」

「うーん、それなんだけどね、どうすればいいのかちょっとわからないんだよ」

熱海へ行く、って目的はできたものの、そこまで電車で行くにしてもいくらぐらいかかるのか、とかそういう具体的なこと何一つわからないんだよなあ……

「その辺の事情なら大丈夫だ。ボクがいる」

零ちゃんが誇らしげにその小さな胸を張って言った。

「どういうこと？」

「電車で行くのもいいだろう、しかしここから熱海まで行くのなら五人で万近くのお金がいるぞ。四季はそれほどのお金を移動だけに費やせるのか？」

無理。万単位のお金なんてすぐに使えるはずがない。

「だから、車で行く。車はボクが持つてるし、免許なら夜闇が持っているだろう？ なにせ、完全一歩手前、料理以外は完璧と公言しているのだから」

零ちゃんが挑戦的な目を夜闇に向ける。

「お察しの通り、私は車の免許のみならず、ありとあらゆる乗り物に乗ることができます。戦車も乗れます」

そんなの乗れてどうするんだろう。
それを訊いたまた夜闇が残酷なことを言いそうなので、黙っていた。

「なら、話は決まったな。どうせ三連休だ、じっくりと熱海を楽しもうじゃないか」

零ちゃんがきらきらとした笑顔でみんなに言った。

意外と、旅行好きなのかもしれない。

「そうね。お兄ちゃんに私のことだけで来てもらって言うのは申し訳ない気がするし。遊びの次いで、ぐらいがちょうどいいわ」

四様も特に文句はないみたいだった。

「……あれ、そう言えば四様、どうやってここまで？」
そう言えばどうやって来たのだろう。

「電車よ」

「お金はどうしたの？」

「お金なら配り歩いてもいいぐらい持ってるの。株って知ってる？」

いくら僕でも株ぐらいは知ってる。

「あれね、適当に会社選んだら勝手にお金が増えて行くの。私が選んだところは絶対に株価が上がるの。……それを何度か繰り返し、気が付いたら資産増えまくって、小さな国なら買収できるほどになったわ」

……あれ、運とか特殊能力って金儲けに使ったらなくなるのが定説っていうか定番なんじゃ？

「ま、そういうわけで、お金ならあるわけ。おばあちゃんたちもそれで楽してる」

それなのに、まだ四様に能力を強くしろと。なんて勝手な。

「……では、明日明朝出発しましょう。零さん、足の手配よろしくお願いします」

「任されたよ。出発ごろに届けるよう言うておく。ま、それまで旅行の準備としゃれこもうか」

「おう」

「はい！」

なんだか、楽しい三連休になりそうだ。

僕は旅行鞆を押し入れから取り出しながら、そう思った。

「……あ、あの……私、かばんないんです……」

「はあ！？なんでだよ？」

「ここには体一つできましたから……」

「服は？」

「抱えて持ってきた二着を洗い回しです……」

「あゝ……うん、服は私のかばんに入れろよ。スペースなら余ってたから」

「ありがとうございます、間宵さん！」

「お、おう……」

……まあ、とにかく楽しい旅行になりそうだ。

「……キミは熱海に何をしに行くつもりだい？」

「直談判でしよう？」

「どんな談判をするのだろうか？参考までに聞かせてもらえないだろうか」

零ちゃんがそう言いながら手帳に何やら書きこんでいる。タイトルは『研究手帳』とあった。

「はい。まず、最初は建前として交渉を。一度でも断つたら、力づくで交渉を」

「具体的には？」

書き込みながら、さながら新聞記者のように訊く。

「具体的には、ブラックジャックなどでの欧打や、ナイフなどの鋭利な刃物で皮を剥ぐ、などです」

「……実に拷問に近いね？」

「はい。最終的には拷問になると思います。二時間もやれば外国に四様さんをやるうなどという考えはなくなるはずです」

「ふむふむ……」

相変わらずブラックなことを平然という夜闇も、それを熱心に書きとめる零ちゃんも、僕は放っておいた。

……うん、楽しい旅行になりそうだ。……なんだか、最後の二人で自信なくしたけど。

第十二話　出発直前また喧嘩！？

明朝2時に、僕は起こされた。

眠っていたのは僕と四様だけで、他の四人はずっと起きていたようだ。

何をしていたのか訊いてみたら帰ってきた答えは実にかわいらしいもので、旅行がわくわくして眠れなかったそうだ。

「さて、いこうか四季、四様。車はすでに届いているよ」

寝ていないはずなのに元気そうな零ちゃんにそう言われて、僕はアパートから出た。

「……なにこれ」

アパートの駐車場に、大きな車があった。

それも、十人ぐらいは乗れるんじゃないかってぐらいの大きな車だ。

「ボクの私用車だ。研究所に無理言って持ってこさせた。あやうくとらえられかけたけどね」

そう言えば、零ちゃんはどこかの研究所に属していて、零ちゃんは僕を研究すると言う名目でこっちに逃げて来たんだった。……悪いことさせちゃったかな……？

「気にするな。ボクは手に入れたかったからこの車を手に入れたし、行きたかったからこの車を手配させた。キミは何も悪くない」

そついう気遣いができる零ちゃんって、本当に大人だよなあ……

体は子供のままでけど。そう言えばいくつなんだろう？高校に来ていたってことは高校生であることは間違いないんだろうけど……

「じゃ、じゃあ、行きましょうか、四季君！ふ、二人での、初めての旅行、ですね！」

「おい、弥生。二人つきりじゃねえからな？勘違いすんなよ？」

「は、はう……」

おどおどしながらも勇気をだした弥生ちゃんを、間宵ちゃんが忠告する。……何でこんなに起こってるんだろっ、間宵ちゃん。

「では、まいりましょうか、みなさん、四季様。では四季様、助手席に……」

「おい！？」

「あの！？」

「ああ！？」

夜闇が僕を助手席に座らせようとしたとたん、他の三人から猛反発。

「おいおいおいおい、夜闇君、まさかキミ四季の隣に座るつもりじゃあるまいね？」

「そうですが、何か？」

「な、何かじゃ、ないです！な、なんで夜闇さんが、四季君の隣に……」

「私が運転するからですが、何か？」

「あのな！行先知ってんのは四様なんだぜ？普通なら四様を助手席に乗せるべきだろうが！」

つまり、僕が助手席に座ることに対して、もめているらしい。
…
そんなに助手席に座りたいのかな？

「……お兄ちゃんって、結構ニブチン？」

「は？」

「……いや、なんでもないわ」

四様は諦めたように、首を振った。何か僕したかなあ……？

「……うらああああああ！こっとなったら力づくだああああああ
ああああああ！！」

そうやってこんどは零ちゃんと弥生ちゃんまでもを巻き込んで、
喧嘩が勃発したのだった。

そろそろ、日が昇る。
時刻はだいたい6時ごろ。

「あの、みなさん朝ご飯にしませんか？」

「そうだな」

「おう」

「そうですね」

「いいわね」

「いいね」

僕らは弥生ちゃんの言葉に賛成する。

僕は助手席、弥生ちゃんは僕の後ろ、その横に間宵ちゃん、その隣が零ちゃん。

そして、後部座席には、夜闇が座っていた。

「……最後のご飯になるかもしれないしね」

「もう、お兄ちゃん、私の運転で事故すると思ってるの？」
「思ってるよ……！」

最終的に、なぜか四様が運転することになったのだ。

『私には神様の運がついてるわ。よっぽどのことがないかぎり事故なんてしないわよ』

それが、四様が運転席につけた理由の全てだった。

これで怖くない人間がいるはずがない。

……と、思っていたのだが。

「わあ……すごいきれいなお料理ですね……四季君が作ったんですか？」

「はん！四季は料理だけはうめえんだよ。私は毎日食ってたから

わかるけどな！」

「傲慢かい？その程度のアドバンテージ、すぐなくなるさ。なぜならボクらはともに過ごしているのだからね」

「その通りです。四季様のお料理を食したことが有利になるなど……」

そんな風に、僕の作ったお弁当を仲良くわけつつ言いあうくらいには、なじんでいた。

「み、みんなは怖くないの……？」

僕はたまらず訊いてしまったけれど、

「あの、私、怖くないです」

「私もそんなに怖くねえな。四様の力が本物なのはずっと前から知ってるし」

「正直、私が運転するよりは事故の確率は少ないと思います。四様さんの運は株価を操作できるほどののです、車の操作などたやすいでしょう」

「ボクもそう思う。多分どんなプロドライバーが運転するよりも安全だと思うね。なんたって神の御加護があるんだから」

意外にも、みんなはなじんでいた。

「ね？怖がつてるのはお兄ちゃんだけだって！」

なんでみんな、こんな子供が運転する車で楽しそうにご飯なんて食べれるんだ……！？

僕の心の叫びは、心の叫びなのでもちろん誰にも届かなかった。

第十二話　出発直前また喧嘩！？（後書き）

こんにちは、作者のコノハです。

……すみません、一日更新がなかったのにはわけがあるんです。
熱出して寝込みました。

はい、完全に風邪ひいて、今でも喉ごほごほ言わせながら書いています。

でも、クオリティ（そんなのあったのか）はいつものままを保証？しますので、どうぞ気楽にお読みください。

では、次回からはまた気合い入れて毎日更新していきますか。

駄文散文失礼しました！

ご愛読感謝です！

また次回！

第一三話　代わり果てた四様の実家！？

……風が、なびく。

きれいな風だ。

色はきつと、薄い緑色なんだろうな。

私は、ふとそんなことを考える。

ここは熱海直前のサーブスエリア。長旅、というほどではないけれど、結構長い道のりだったので少しトイレ休憩、というわけだ。

……ふふ、お兄ちゃんつたら、こんなところまで来てトイレ休憩もなにもないでしょうに……

お兄ちゃんは、私をちよくちよく休ませるために、こうやってサーブスエリアに入るよう提案してくれた。

私は全然大丈夫だったけど、お兄ちゃんの好意を無駄にするのもアレなので、黙って聞いていた。

……お兄ちゃん、怒るかな。

実は私、たとえ眠っていたとしても、ここに辿りつけたであろうという自信がある。

もう、私の天賦の運はもはや能力と呼べるまでに昇華している。外国に行くのだって、能力を強めるためじゃなくて、もっと広い土地で豪遊するため。私の能力で手に入れたお金で、なんでもする。私も、お金に限らずなんでもできる。

望めば手に入り、願えば叶う。

でも……こんな能力持ってたって、なんにもうれしくなかった。

おじいちゃんとおばあちゃんのところで使わされる能力は、お金
儲けにだけ。

人助けになんか、使わせてもらえない。全然、幸せじゃない。

……でも。

お兄ちゃんのところに来て、全然違った。

お兄ちゃんと、あの女の人たちと一緒にいるだけで、私は幸せに
なれた。

あれが、私の幸せだった。

……お兄ちゃん、怒るかな。

私は、もうすぐ神様に近づこうとしている。

その能力を使って、お兄ちゃんとあの女の人たちと一緒に、ずっ
とずっとずっとずっと暮らしていきたい、なんて願おうとしてる
ってこと知ったら。

「おーい！四様！いくよー！」

お兄ちゃんだ。

お人好しで、鈍感なお兄ちゃん。

「うん！すぐ行く！」

私はお兄ちゃんに駆け寄った。

「じゃあ、あとちょっとだ、もう少しだけ、頑張ってね」

「うん！」

全然かんばつたりはしないけど、頑張らなくてもできるけど、私はそう言っておいた。

できないことをするから、人は褒められるのだ。できないことを頑張っただけから、ほめられるのだ。

……じゃあさ、じゃあさ。

なんでもできる人って、どうやったら褒められるの？

もうしばらくの旅路を終え、僕らは目的地、熱海へとたどり着いた。特に特筆することはなかったけれど、とても楽しい旅程だった。

祖父母の家のすぐ前で車を止めると、四様が降りて、他のみんなが降りる。

「……ついたよ、お兄ちゃん」

「ありがとう、四様。よく頑張ったね」

僕は車から降りてそうやって褒めるけど、四様はあんまり喜んでくれなかった。

「……どうしたの？」

「なんでもない。……なんでも、ない」

四様はうつろな瞳でそう言うだけで、ふいと祖父母の家へと向か

った。

「うわ、……すげえ!？」

間宵ちゃんが祖父母の家を見て驚くのも、無理はなかった。

「……これが、四様さんの運の結果、ですか」

そう夜闇がつぶやいて、氷の表情に驚きの色を浮かべるのも、無理ないだろう。

「……はう……」

弥生ちゃんが言葉が出ないのは仕方ないだろう。小市民過ぎて、このスケールについてこれないのだ。僕もそうだし。

「ふむ、これが四様と四季の祖父母の家か。くすくす、いかに四様の運を悪用して私腹を肥やしてきたのかが一瞬でわかる構図だな？」

零ちゃんがあまりにも適切な分析をするのも、今はほとんど聞こえていなかった。

たしか、僕は一度この場所に来たことがある。そう、ここではないか、と誘われるときにお試し感覚で数日泊ったことがあるのだ。でも、その時の祖父母の家はどこにでもある木造住宅で、時代劇に出てきてもなんら不自然じゃないほどの年季の入った家だったはず。

こんな、絢爛豪華で城みたいに大きな家、僕は知らない。

白亜の城、というものはヨーロッパ地方にあつて初めて美しいのだ。こんな日本の住宅地のご真ん中にあつても、嫌味なだけできれいじゃない。

そんな他人の気持ちはお構いなしなのか、とにかくお金を使ったくてしょうがないのか、無意味なまでに、金や銀がいたるところにちりばめられている。

もとは白亜の城だったのだろうが、今は半分金閣寺並みに金が使われている。

「……こゝ、こゝ？」

四様は無言でうなづく。

……誰だつて、こんなところから出て行きたくなる。

「……いこ、お兄ちゃん」

きゅっ、と僕の服の裾をつかんで、うつむいたまま四様が言った。さつきまで喧嘩していたことをすっかりわすれて、後ろの四人も仲良くついてくる。

「うん、行こうか、みんな」

「おう！」

「はい」

「はい！」

「ああ」

さあ、直談判だ。

絶対に、四様を外国になんてやるもんか。

僕が四様を、守るんだ！

第一三話　代わり果てた四様の実家！？（後書き）

人は、お金を持つと変わるそうです。

おとぎ話に、よくそんなたとえが出てきます。

鶴の恩返し、かぐや姫、その他もろもろ。

僕が思うに、世界で一番広く使われる魔法の道具は、お金なんじゃないかと、思います。

ただの紙、ただの金属が人の命をも左右するほどの価値を持つなんて、魔法とは思えません。

お金の魔力、そんなものがあるから人は狂うのです。

でも、お金がなければ人は何で価値を測ればいいのでしょうか？

そんな、二律背反。

お金は人を狂わす。けれど、お金が人を救うことができるのも、また事実です。

……僕は狂う側になるのでしょうか、それとも、救う側になれるのでしょうか。

……もしかしたら、救われる側、施される側になっているかも、知れませんか。

第一四話　交渉開始と戦闘開始！？

インターフォンを押す。

もちろんカメラ付きで、しかもそれは常時録画だ。誰が来たのかあとあと確認できるようになっている。

『誰だ？』

あなたこそ。

確かに祖父の声だった。でも、態度が全然違う。昔はもっと、優しそだったのに。

「……僕は、秀句四季と言います。覚えていますか、おじいちゃん」

『……さあ？覚えとらんな。わしの孫はただ一人、四様だけじゃ』

その声にも欠片も愛情は感じなくて、なんだか急に悲しくなってきた。

「……おじい、ちゃん」

『四様か。こいつは誰じゃ？』

「私のお兄ちゃん。……ね、入れて？少し、お話があるの。聞いてくれなきゃ、能力の質が落ちちゃうよ？」

そう言った四様の顔は苦々しそだった。

多分、四様だって自分の運を盾にしたいわけじゃないだろう。でも、しないとなにも聞いてくれないと、四様は思っているのだろつ。

『……そうか、なら、入れ』

『なら』

その言い方に、心底怒りがわいた。
なんだよ、なんだよその言い方！

なら？なら、だって？四様の価値は、能力だけか？神様の運だけか！？違っただろ！なんで、そんな風に四様が運以外に意味がないなんて言い方をするんだ！

「……いこ、お兄ちゃん」

「……うん」

もう、絶対に僕は決めた。

いざとなったら夜闇をけしかけるぐらいの気持ちで、僕は四様について行った。

絶対に、四様を守る。この子はここにいちゃだめだ。

無意味に大きくて金きらな玄関を通り抜けると、僕たちは客間に通された。

金のふすま、金の畳、金、金、金……

そんな金が全体を埋め尽くす、20畳ぐらいの客間に、僕たちは通された。

広い部屋の真ん中には玉座みたいな仰々しい椅子がおいてあって、その前に僕は並び、座っている。椅子からの距離も、遠い。まるで王様に謁見しに来てみたいような錯覚をうけてしまう。

「……広いね」

僕は感想を漏らす。他のみんなは、どう反応していいのかわからず、黙っているようだった。

「……広いよ。……でも、広すぎるよ」

四様の悲しげな声が、広すぎる部屋に響いた。

「……で、今までどこに行っていたんだ、四様」

ガラリと重苦しい音とともにこの部屋に入ってきたのは、祖父。

でも、体中に装飾品をつけて、きらびやかな服を着ている祖父の態度はどこまでも尊大だった。

「……おじいちゃん、僕は」

「私ね、外国に行かない」

すつくと立ち上がり、四様は宣言した。

「……なんじゃと？それがどういう意味か、わかっておるのか？今まで育ててもらった恩を、忘れたか？」

「何言って」

問い詰めようとした僕を、四様は止めた。

「お兄ちゃん、私がやるから。……一人で、できるから」

そう言って、一步、四様は前に出た。僕からは、四様の顔が見え

なくなる。

「な、何をするつもりじゃ、四様」

「黙って。おじいちゃん知ってるよね、私は望めばなんでも手に入るってこと。だからこのおうちはこのなにも大きくなって、おじいちゃんたちはそんなにもきれいな服を着てる。」

「……ねえ、養ってるのは、どっち？私？それとも、おじいちゃん？」

声からは感情が読みとれない。……四様は何をしようとしてるんだ？

「……答えないの？いいよ。別に。……もう決めた」

「な、何をじゃ？」

四様は質問に簡単に答えた。いつそすがしさまで感じれるほど、軽快に。

「決まってるじゃない。この家は、滅ぶべきよ。完膚なきまでに、完全に。……お兄ちゃんは、初めてだよね？」

くるりと振り向き、僕たちに微笑んで言う四様は、どこか危うさがあった。

「何が？」

「私が世界に願うところ。じゃ、始めるよ」

そう言うと、四様は両手を天に掲げた。

「『世界よ世界、聞いてちょうだい。私の願いを、聞いてちょうだい。私はもうこんな家うんざり。もうこんなところにいたくないでも、おじいちゃんは居ろという。もう嫌。嫌なの。だから、だから。』」

世界よ世界。この金にまみれて、意味なく広いこの家をどうか――壊して『」

変化は、起きない。

「……三日、ぐらいかな。三日ぐらいは、この家はこのまま。でも、もうこの家は滅んじやうよ。外国行くお金も、残らない」

悲しそうなのは変わりがなかったが、どこかすっきりした表情の四様。

「な……、な……なんてことを！……貴様が、四様をたぶらかしたのは！誰か！誰か！こいつらを……殺せ！」

わなわなとふるえ、僕を指し、そして命じる祖父はもう、目の焦点が合ってなかった。

自分がさんざ利用してきた能力に牙向かれ、恐れあまり正常な判断ができなくなったんだ。

「……お兄ちゃん」

「大丈夫だよ。……ね、みんな？」

心配そうな表情の四様に微笑むと、皆を見回す。

第一四話、交渉開始と戦闘開始！？（後書き）

第一五話　戦闘終了と腕試し！？

ボン！

部屋に小規模な爆発が起これと、数人の用心棒が倒れた。

「ふむ、『スタンボム』成功、と。……まずまずの出来だな」
「おいてめコラ！」

スパコーンと小気味いい音を立てて、零ちゃんは後頭部をはたかれた。

はたいたのはさつき爆発が起きた近くにいた間宵ちゃん。

「むう、何をする」

「何をする、じゃねえ！てめえ私も巻き込むつもりだったろ！？」

「キミみたいな野生児にでも効くのか試してみたかったからな、巻き込まないつもりとは言えないな」

「てめえもこいつらと一緒に私の拳の餌食になるか？」

女の子とは思えないほどの殺気をまとわせて零ちゃんに詰め寄る間宵ちゃん。

その後ろを、用心棒の一人が迫る！

「間宵ちゃん、危ない！」

僕は思いつきりそいつを蹴ろうと、走って

「ぬ」

悲鳴の途中で、用心棒が倒れた。

「は、はう……や、やっちゃったです……」

手にメリケンサックはめた弥生ちゃんが、茫然と言った。

「やるじゃねえか」

「……ど、どこからそんなのを？」

てか、なんで弥生ちゃんが？

「わ、わた、私、如月戦闘術、っていう昔からある武術を、……その、たしなむ程度ですけど、や、やってます！」

「如月戦闘術、ねえ」

「……ふむ、如月戦闘術、か」

「知ってるの？」

「ああ。殺人術が多い実戦仕様の武術だな。暗殺や集団戦も想定していて、ときたま軍隊でも使われることがあるほど完成度は高い。」

武器を使うことに抵抗を抱かず、とにかく『勝利し、生き残ること』を念頭に置いた武術だ。

しかし、最近は実戦が減ったから日本でかなりすたれたがね」

「ああ、そうですね！その通りです！……すごいですねえ
零さんは」

「まあ、そんな感じた、博学だな、零は」

弥生ちゃんはそう言って零ちゃんの頭をなでるけど、その手にはまだメリケンサックがはめられていた。

……なんだか、弥生ちゃんが怖い。

「……むう、ボクは子供じゃないぞ。ほら、敵だ。戦おう」

「おうよ！ ささつとやってちゃちゃつと遊ぶぞ！ せっかく熱海に来たんだ、温泉だ！」

「はいです！」

みんなは仲良くそう言いつと、各々自由に戦っていく。

夜闇は一人黙々と数を減らしていて、もうすぐで半数を彼女一人が倒したことになる。

「おらおらおらおら！ 『裂波昇竜脚』！」
れっぱしやうりゅうきゃく

間宵ちゃんは闘気をまとわせた蹴りで相手を上空にかちあげた！

「ほらよ、『追撃降竜拳』！」
ついげきかうりゅうけん

落ちて来た敵に闘気をまとった本気のこぶしで地面にたたきつけた！

「……ほらよ、てめえら。かかってこいや。片端から私の拳、脚
の餌食にしてやらあ！」
あし

一括すると、敵は二歩、三歩下がった。

しかし、それは失敗だった。

彼らはあまりにも間宵ちゃんの威圧が強すぎて、気付かなかったのだ。

後ろに、ナイフを構え目を光らせている夜闇と、殺意こそないがバットを手に持ち、何やら居合の構えをしてずっと待っている弥生ちゃんが、いることを。

「行きます。我が名は十三夜月夜闇。主人四季様の命令をお守りする、従者です」

「い、行きます！私は如月弥生。四季君を守る、こ、こ、こい、……友達です！」

その言葉で、間宵ちゃんを恐れて下がった用心棒が、一斉に後ろを振り返る。

その、刹那。

「『月牙十三夜』」
「『居合・瞬速散撃』！」

キキーン！

一瞬でいくつもの銀閃がひらめき、用心棒たちは全員もれなく倒れ伏した。

「……ご命令、完遂しました、四季様」
「や、やった！できた、できたよ『居合・瞬速散撃』！練習だったら何度やってもダメだったのに！」

……弥生ちゃんだけは戦えない側だと思ってたのに……正直夜闇
といい勝負なんじゃないか？

「……おいおいおい！おい、弥生。……ちょびつとだ」
「何がですか？」

あゝあ、出ちゃったよ間宵ちゃんの悪い癖。

「勝負しろ。てめえの如月戦闘術と勝負がしてえ」

強い人間と戦いを申し込む、っていう悪い癖が。

「……いいですよ、私も間宵さんの戦い方には興味ありましたし」
ああもう、弥生ちゃんもしっかり考え方武人だし！

僕だけか？僕だけがこの中で戦えないのか！？

「……お兄ちゃん、ありがとう」

「……僕は何もしてないよ。お礼ならあの四人にいいなよ」

四様も戦ってなかったな。……でも、戦えないというわけじゃないと思う。結構筋肉あったし、身のこなしもそれっぽかった。

「……言って来たよ。あとは、お兄ちゃんだけ」

「そうなんだ。……どういたしまして」

「おらあ、行くぞ！『竜頭直突』！」

「行きます！『居合・鈍速強撃』！」

僕と四様が会話している間に、すぐ目の前では闘気の拳と居合のバットが激突していた。

「……夜闇、そろそろ旅館行こうか。二人を止めてきて」
「了解」

てくてくと、ゆっくりとした調子で夜闇は激戦を繰り広げる二人の元へ行き……

「ぎゃ！」
「きゃ！」

夜闇は一瞬で二人をのすと、ずるずると引きずって僕たちのところまできた。

「任務遂行しました、四季様」

「……うん、車に連れ込んだじゃって」

なんかこの会話だけ切り取れば僕、完全に悪役だけどね……。

とにかく、これでこの家にもう用はない。それは四様だって、一緒だろう。

第一六話　戦闘後の露天風呂！？

僕たちが泊るのは、いい感じな旅館だった。

雑魚寝で、食事も質素なものが多いけど、安いし、何より気が楽だ。

旅館に到着早々、四人はお風呂に入ると言ってきた。まだお昼前なのに。戦ったからかな？

「……さて、と。私は風呂にはいつてくるけど……四季、覗くなよ？覗いたら殺すからな！？」

「私は湯浴みさせていただきます。……では」

「あ、あのあのの！わ、私、お、お風呂入ってくる、けど……の、の、覗きたか、たかったら、……その、覗いても……いいんだ、よ？」

「……はあ。何を言っているんだいキミは。そんなことしたらボクらも一緒に覗かれる。そんなのはごめんだね。じゃ行くよ。四季も、この子のことを真に受けるなよ」

そして一瞬うちに、四人が消えた。

「……ふたりきりになっちゃったね、お兄ちゃん」
「そうだね」

なんだか、ありえないことのような気がする。もしかしたら四様が二人きりになるよう望んだのかも知れない。

でも、僕は四人が気を利かせてくれたと信じたい。

「私、帰るとこなくなっちゃった。……この年で、もうホームレスだよ」

「……」

「私、家族を不幸にしちゃったよ。……私、悪い子だよ。私、私……」

四様の浮かない顔を見ていると、何も言えなくなる。

「四様のしたことは、確かに悪いことなのかも、知れないね」
でも、そんなこと、言っている場合じゃない。妹が苦しんでいるんだ。頑張らなきゃ。

「でも、祖父母達がしたことも、悪いことだよ。今まで四様をさんざん利用してきた。……その報い、とまでは言わないけど、復讐の権利ぐらいあるさ。……こんなこと妹に言う僕も、悪い子だね」

「……お兄ちゃん………あ、ありがとう……」

ん。少しだけだけど、顔色が戻ったかな。

「……ねえ、お兄ちゃん。一緒に住ませて、もらえないかな……？」

おずおずといった雰囲気で、四様が言った。何もいちいち言わなくても願えば手に入るだろうに、四様はそれをしなかった。それだけで、もう充分に四様はいい子だ。

「いいよ」

即答した。

「……いいの？」

「いいさ。たった一人妹の頼みを断るわけないよ！」

そう僕が言うと、少しだけ晴れやかになった四様は、意気揚々と、部屋を出ようとする。

「どこ行くの？」

「お、お風呂！覗いたら知らないから！超絶悶絶級の不幸、お見舞いするからね！」

そう言っパタパタと駆けていく四様を見ると、とてもほほえましい気持ちになる。

「……僕も行くかな」

ゆっくりとした足取りで、僕はお風呂場に向かった。

かぼーん……………

そんな音が聞こえてきそうなほど、ゆったりとしたお風呂場だった。

露天風呂、という奴だ。

ここから海が見えて、そのきれいさがお昼間に風呂に入った異和感を完全に吹っ飛ばしてくれる。

「ああ……来てよかった……」

もしこの光景がなかったとしても、僕はそう言っただろう。
なんとって、四様を救えたのだ。

それだけでもう、十分すぎるほど十分だった。

「……何すんだ夜闇！ーおいこら！四季がいないからって、おい
……！」

と、僕がくつろいでいると、隣から声が聞こえた。

え……

どうも、ここは薄いついたてを阻んで隣同士で男女が分かれて
いるようだった。

露天風呂はそんなにスペースがとれないのはわかってるけど、そ
れでもやっぱりなぜかおいおい、と思ってしまう。

「……なぜ、普段はあなたは平べったいのにここではこんなにも
あるのですか。四季様にご奉仕するためですか」

「違い！？激しく違うよ夜闇！？ってか、そもそも何言ってるんだ
よクソメイド！」

「私は今メイドではありません、ただ純粹に四季様を好く者です」

うわあ……聞いてるこっちが恥ずかしくなる告白だった。

……てか、なんで？なんで夜闇は、僕のが好き？

「……ほう、それは実に面白いことを聞いたな。ふむ、ここは裸
の付き合いというやつだ、ボクも想いのたけを……おや？……ふむ、

やはりやめておこうか」

何かを言いかけた零ちゃんは、急に一人合点して、言葉を区切った。

「どうしてですか？」

まるで僕の心を代弁するかのように言った弥生ちゃん。

「ふむ、……そうだね、……どうたえようか……うん、このそばに神様がいるんだよ、だからだね」

「神様？ そばに？」

神様の運がついた女の子、四様が訊いた。

「ああ、そうさ。神様だよ。……神様って、何をするかしってるかい？」

「それはもちろん……あつ！ そういうこと」

「わかつちやいましたよ、私」

へえ、早いなあ。四様も弥生ちゃんも頭の開店結構早いな。……で、一体どういう意味なんだろう？

「間宵さん、夜闇さん、やめておいたほうがいいですよ。『神様が聞いています』」

「はあ！？ 何言っただよ弥生。神様なんていやしねえんだよ」
「そうです。私の神は四季様のみ。他の神々は必要ありません」

「いや、この場においてはいるのだよ」

「ますますわかんねえんだけど！？」

「わかりませんが」

「くすくす……わからないなら、わからないままでいいです。続けといってください」

あ、あれ？なんか弥生ちゃんイメージ違う……

「……弥生、なんか落ち着いてねえか？いつもと違っって言つか……」

間宵ちゃんの質問に、弥生ちゃんは、

「私はね、好きな人の前だと、どうしても緊張してしまうんですよー！」

必要以上に叫んで、答えたのだった。

……
『神様』って一体何のこと？

第一六話、戦闘後の露天風呂！？（後書き）

こんにちは、作者のキノハです。

さてさて、そろそろシリアス部分も終わり、妹も増えてまたまたどたばたやっていきます！

……さて、ところで、零がたとえた『神様』、なんのことかわかりますか？

では、駄文散文失礼しました！

ご愛読感謝、また次回！

第一七話　～ 比喻の真相と四様の気持ち！～

私は熱海の露天風呂で、裸で取っ組み合いのけんかをしている間、宵さんと夜闇さんを眺めながら、零さん、弥生さんと話をしていた。

「……神様、ね。よくたとえたわね」

私、本来なら敬語を使わなきゃいけないはずんだけど、弥生さんも零さんもいいって言うてくれた。私はそれに甘えることにしたんだけど、敬語を使わないおかげでより親しくなれた気がする。

「ははは、昔見たのをそのまま言ったまで、だよ。たいしたことじゃない」

でも、そのわりに考え込んでたから、きっとこれは謙遜なんだろう。

「あはは、でも『神様』、かあ……本当、よくたとえましたね……」

弥生さんが遠い目をして相槌を打つ。

弥生さん、聞いたところによるとかえるいあがり症で、好きな人の前だと、どうしても緊張してどもったりするらしい。が、そうでないならしっかりしゃべれて頼れるお姉さんだ。

「弥生さん、ぶりっこだって言われませんか？」

嫌味で言ったわけではないのは、ニュアンスでわかってくれるだろう。

「いえ？私、誰にでも、ってわけじゃないですから。私があなったのは、人生で四季君が初めてでした……」

なんと、初恋だったのか。

……と、いうことは？

「……零さん」

「なんだい？」

「お兄ちゃんのこと、好きですよね」

私が訊くと、零さんは顔を私に寄せて、囁くように言った。

「当たり前だ、そうでなければわざわざ研究所など抜けだしてくるものか」

すぐに離れて、シニカルに笑う。

「……そうですか」

と、いうことは。

間宵さんは、……わからない。でも、お兄ちゃんのことを気にかけてる。

夜闇さんは、お兄ちゃんのが好き。

弥生さんももちろん、お兄ちゃんのが好き。

零さんも、同じく。

そして私も、……どうなんだろう？

私、お兄ちゃんのこと好きだ。

でも、それって恋愛感情だろうか？

違う、かもしれない。

だってお兄ちゃんと一緒にいても胸なんかときめかないし、お兄ちゃんのこと頭がいっぱいになったりなんかしない。

でも、恋かもしれない。

お兄ちゃんに話しかけられたら胸が暖くなるのは事実で、一緒にいて安らぐのもまた、事実だった。

人によつては親愛の情だと言うのだろう。

でも、私にとってはこの気持ちは恋に近い何か、なのだ。

家族愛とも、兄妹愛とも違う何か。

これって、どんな感情なんだろう？

知りたい、って願えば知れるのかな。

こればかりは、わかんない。

「おい、こら！神様って何のことだよ！おい！待ちやがれ！……
って、いい加減離せクソメイド！なに発情してんだ！」

「間宵さんはいつもいつも四季様と共にいました。……もしかたら、四季様の匂いが移ってないか……」

「移ってるわきゃねえだろ！気持ち悪いこと言っな！てめだから、離せてんだろ！この、発情メイド！とっととゴシユジンサマに尻尾振ってこいや！私に抱きつくな！」

いい加減にのぼせて来たので、私たちは抱きついて何やら言いあっている二人を置いて、お風呂場を出ました。

「知ってる、間宵さん、夜闇さん。神様ってね、なんでも見てるし、聞いているんだよ？」

きつとお兄ちゃんは見えていないだろうけど、聞いてはいるはずだ。

全ての会話を聞きとる神様。

私の神様は、いつも私に味方する。

でも、この神様だけは、私の思い通りにならないし、してはいけないと思った。

「……………う……………」
「……………し、四季……………様……………」

僕がお風呂からあがるころには、弥生ちゃん、零ちゃん、それと四様が先に部屋でくつろいでいた。

それからしばらく僕は話しこんで、気が付いたら結構時間がたっていて、んで、あんまりにも遅いんで心配した弥生ちゃんが間宵ちゃんと夜闇の様子を見に行つて、帰ってきたらこうなった。

「……………まったく、何をやっているんだい、キミたちは。のぼせる

まで喧嘩するなんて、バカじゃないのか？」

零ちゃんが適切な応急処置をしながら、うんうん唸る二人に嚴重注意をする。

二人はせつかくの休日、それも熱海で過ごす三連休の半日を、寝て過ごすこととなった。

まったく、お風呂の時ぐらいゆっくり仲良くやればいいのに、ねえ？

僕はそう思いつつも、零ちゃんに言われて新しい濡れタオルを用意するのだった。

……明日もこんな調子なのかな？

第十八話　休みの終わり、四様の同居！??

唸る二人を無視して遊ぶのも気がひけたので、僕らは今日は大人しくここで休んでいることにした。

僕はそうじゃないけど、間宵ちゃんや夜闇、零ちゃんや弥生ちゃんまでもが四様を助けるために戦って、その分きつと疲れているだろう。

「……まったく、呑気な。誰のせいでこうなったと思っているんだろうね」

愛おしげに二人の髪をなでながら、浴衣姿の零ちゃんが言った。

「そうですよ！せ、せっかく四季君とい、一緒にお出かけできると、思ったのに……」

おなじく浴衣を着た弥生ちゃんは僕をちらりと見て、顔を真っ赤にした。……どこに行くつもりだったのだろう？

「……まあ、それは冗談だとして。正直言うと、ここで休んでいの方がいいかも知れない。間宵と夜闇はあの趣味の悪い屋敷で一番の功労者だからね。……今日もしのぼせなくとも、いつか無理が来たと思う。」

ただでさえ必要以上に緊張する旅先だ、休みすぎるということはないと思うがね」

ハンガーにかけられた白衣は伊達じゃないのか、的確に二人の状態を分析する零ちゃんはさすがと言えた。

「……そうね。私のために、戦ってくれたんだからね」
申し訳なさそうな顔をして、四様が言った。

「何を言っている。キミはついでだ。……そう、本来の目的はここに遊びに来ることなのだよ。だから、キミは気にせず旅を……いや、最後の故郷を楽しむんだ。いいね？」

この中で一番幼そうな外見してるくせに、言ってることは一番まともだ。

それとも、僕らがたんに子供っぽいだけなのか。……たぶん、後者だと思う。

一見ひどいことを言っているように聞こえるが、それは零ちゃんがついた四様に気にさせないための嘘。

みんな四様のためにここに来たのであって、遊びなんて二の次だ。

僕と四様は兄妹だ。僕がわかっていることを、四様が理解していないはずがない。

だから、

「……ありが、……とう……」

かすれるような声でお礼を言った四様に僕は。

「……どういたしまして」「」

優しく、そう言った。

それから三日、元気に回復した夜闇と間宵ちゃんと一緒に僕らは熱海を心ゆくまで楽しみ、そのままのテンションでアパートまで帰ってきた。

新しい同居人、四様と一緒に。

ちなみに。

四様の祖父母がどうなったかというと、僕たちがアパートに帰る日に警察に捕まった。四様を利用しているだけでは飽き足らず、いろいろと黒いこともやっていたようで、それが表にでてしまったようだ。……いやあ、やっぱり四様はすごいね。

で、その事件の僕の感想。

お風呂、覗かなくてよかった……。危うく死んでたところだった。

めでたしめでたし、かな？

「お兄ちゃん！この人たち早く止めて！早くしないと死人がでちゃう！」

熱海から帰った次の日、つまり三連休明けの朝。
いきなりたたき起こされた僕は、四様の切羽詰まった顔を見ることになった。

「どうしたの！？なんかあった！？」

僕は飛び起きて、周りを見回す。

「なんかあった！？じゃないよ！お兄ちゃんが朝早く起きないのが悪いんだからね！？」

「何があったの！？」

僕はわめく四様を諭して、訊く。

「弥生さんと零さん、夜闇さんがお兄ちゃんのために朝ご飯作って言って聞かないの！なんか料理とは思えない行程で何かを作ろうとしてるから、早く止めて！」

あ、さすが神様の幸運、あの三人に料理を作らせることがいかに

危険か事前に察せたか。

「……うん、とめてく」

ドゴーン！

「る？」

あ、あれ、今なんか聞こえてはいけない、てか聞こえてほしくない音が後ろから聞こえたんだけど？

僕はおそろおそろ振り向く。

そんなバカな。

そこには、キッチンがあつたはずだった。
あつたはずなんだ。

なんで、そこから青空が見えるんだ！？

「……ご、ごめんなさい……ご、ご飯、つ、作り間違えて……」

「……すみません、どんな罰でも受ける所存でございます」

「……素直に謝ろう。……悪かった」

三人の手の中には、フライパン、お鍋、ヤカン。

そのどれもが、昨日眠るまではきれいなままだったものだ。

それが、その全部が。

焦げ焦げで破裂して、底が抜けていて……

「もう二度と、三人とも台所に立つな！……！」

僕がそう叫んだのも、理解してくれると思う。……ああ、修理ど
うしよう……そんなにお金ないよ……

第十八話　休みの終わり、四様の同居！？（後書き）

こんにちは、作者のコノハです。
妹登場編はこれでおしまいです。

主人公はこれからどたばたな日々を送るわけですが……
次回からは、『如月弥生編』に入っていきます。

なぜ、彼女は同居を望んだのか？なぜ彼女は四季を好きになったのか？

それらを説明していくわけです。
では、駄文散文失礼しました！
ご愛読感謝、また次回！

第一九話、些細なことから殺し合い！？

「死にさらせ四季の色ばけ野郎がああああああああああああああああ
ああああ！！！！」

「うわあああああああああ！？」

ドガゴキボキュ！

家のキッチンに続いて聞こえてはいけない音が、今度は僕の身体から聞こえた。

僕は地面、つまり教室の床に顔から崩れ落ちる。

崩壊したキツチンを放置して登校した僕は、間宵ちゃんと会う
なりいきなり右フックそして右エルボー、ラストに本気の左正拳突
きを食らわされた。

もう意識は半分飛びかけてます。

「ああ！？今度は妹と同居たぁいい度胸じゃねえか！しかも夜一緒の布団に寝たんだったな！？」

「そ、それは」

それは、四様がさびしいからって、泣きついてきたから……

「問答無用だシスコン野郎！」

ガシ。

僕は頭をつかまれ、立たされた。

え、間宵ちゃん、僕の頭を両手でつかんでなにをするつもり？

「は、決まってるあ。てめえの色ぼけた頭を叩きなおして……やんだよ！」

こきゆ。

僕の身体は間宵ちゃんを向いたまま、僕は後ろを向きました。向かされました。……って、これ、まずくない？

「きゃあああああああ！四季君、大丈夫？……間宵さん、いくらなんでもやりすぎです！首を百八十度ひねるなんて何考えてるんですか！四季君死んじやったらどうするんですか！」

「四季様！大丈夫ですか？……どきなさい、暴力女！今すぐどこかないと四季様が……！」

「おいおいおいおい！いくらなんでも死ぬだろう！キミは少し力加減というものを覚えたほうがいい！……四季、落ちつけ、今ボクが直してやる。だから、もう少しだけ生き延びるんだ。なあに、すぐ済む」

あ、やっぱりまずいんだ。みんなの騒ぎようが普通じゃない。……僕死ぬかな？

「うつせえ！こんなの私たちの間じゃ日常茶飯事だ！こうすりゃ治んだよ！……ほら、よ！」

ぼきゅ。

また小気味いい音がして、僕の首は元に戻って、鬼の形相の間宵ちゃんに視線が戻される。

「……は、色ぼけ野郎のツラってのはほんとに鼻のした伸びてんだな。……死にやがれ！」

「そんな理不尽なああああああああ！！！」

ガコーーーーーーン！。

すがすがしいほどきれいに決まったヘッドバットを食らって、また僕は学校で気絶しました。

………出席日数大丈夫かな？

最後に見たのは、騒ぐ皆と、……え、ええ？

間宵ちゃんに向かって飛びかかる弥生ちゃんだった。

「……ん」

起きると昼休みになっていた。

「四季様、動かないでください。首、く、首が……」

ああ、あれ、さすがの夜闇も驚いたんだ。

「大丈夫大丈夫、子供のころからやられてるから慣れてるよ」
「なれないでください」

まあ、されるたびに死を覚悟するわけだけど、まあ、今生きてるならいいじゃんか。……生きてるっていいなあ……。

「……あれ、みんなは？」

「暴力女と弥生さんの殺し合い……ではなく、大喧嘩の仲裁、および教師への説明をしています」

「え、ごめんもう一度お願い。誰と誰が喧嘩したって？」

しかも夜闇、今殺し合いって言いかけたよね？どんだけ激しかった

たのさ？

「……私も驚いています。暴力女と、弥生さんです」

……ええと、僕はこう言う時、なんて反応したらいいんだろう？

「……は？」

うん、これ以外に言葉が出ないよ、やっぱり。

間宵ちゃんと夜闇ならまだわかる。でも、弥生ちゃんと……？

……何があっただろう？

——少しだけ、時は巻き戻る。

「四季君！……よくも、四季君を！」

プチりと、彼女、如月弥生の中で何かが切れた音がした。
弥生は去年、いじめられていた。

いじめられていた理由は『おどおどしてるから』『弱そうだから』

しかし、後者の理由に当たってはまったくの間違いであった。

去年彼女をいじめていた張本人達もこのクラスにいるのだが、今日彼女たちはそれを目の当たりにする。

ある理由で弥生への攻撃をやめた彼女たちだったが、今はそんな些細な理由よりもとにかく、手についていじめのことを謝らなければ殺される、と本気で思っていた。

……さて、ここで少しだけ話をずらそう。

現在クラスの中でも一番女の子に囲われている男子、秀句四季。彼を気絶させた張本人、東堂間宵のことだ。

この学校にある特定の人物を表すあだ名、というか『通り名』というものは数多くある。

しかし、通り名を持っている人間は、たった一人しかない。

『暴君』だとか『秀句四季の外付け悪意』とか『学園の裏の女王』だとかの通り名は、全てある一人を指している。

その一人が、東堂間宵。

あらゆる武道に精通し、暴力的な技術に異常な関心、興味を抱き、口調は男言葉。

自他共に認める『学園最強』だった。

……ここで、如月弥生の話に戻る。

彼女のイメージは、弱い、おどおどしている。
体育でもいっつも弥生はビリだし、彼女が入ったチームは必ず敗
北を喫することになる。

そして、おっとりとしていて怒ることがない。

そんなイメージのはずの彼女が、キレていた。

「……んだよ、弥生」

「よ、よくも四季君を！毎日毎日毎日！四季君ばかりいじめて
！許しません！」

「へえ、許さなかったらどうすんだ？」

誰もが、無謀だと思った。

間宵は脅威こそ感じていたが、こんなところで暴力沙汰を起こす
とは、とうてい思えなかった。

「私を助けてくれた四季君を、今度は私が守るんです！」

行きますよ間宵さん！全力で私の全力であなたを倒します！」

「やってみるか？」

そんなことをしたらこの騒ぎがどうなるか、わかってんだろっな？
そう言う意味で、間宵は言った。

でも、周囲はそう受け取らなかった。

こいつなんて一発で倒せる。

そっという余裕の言葉だと誰もが思った。

そしてその誰にも、弥生自身も入っていた。

「……！！なめられましたね……！！」

弥生はそう言つと、かばんからメリケンサックを取り出し、指にはめる。

それだけでも周囲は大騒ぎなのに、今度は、

「……あなたを殺す気でいきますので、注意してくださいね」

そんなセリフと、間宵も凌駕しかねないほどの殺気と闘気。

「……マジで、やる気かよ……！！」

ここで初めて間宵は自身の失敗を悟つた。
恋する乙女をからかつてはいけない。

そんな言葉が、彼女の頭に浮かんだ。

「如月戦闘術次期党首、如月弥生、行きます……！！」

「……おいおいおいおい！！」

一瞬の動作で跳び上がり、弥生は間宵に襲いかかった。
それと同時に、秀句四季が完全に気絶した。

第二十話 頂点を極める戦い！??

「『けんせん拳閃・ぎんこうせつな銀光刹那』！」

ヒュン、と振り切った右フックの軌道はメリケンサックの銀色に光っていた。

「く……」

ぎりぎり、それをよける。今弥生が装備しているメリケンサックは刃が付いているので、もし触れたり受けたりしたら怪我じゃ済まない。

うおおおおお！！

と、クラスが湧く。

暴力の女帝とも呼ばれている間宵とおどして弱っちそうな弥生とが互角、いや、ともすれば互角以上に戦っているということが、何よりもクラスの人間を湧かせた。

まあ、弥生をいじめていた張本人達は青い顔して冷や汗をかいていたが。

「ち……！『進竜撃』！」

湧く教室を無視し、というか本気でやらないと殺されると直感した間宵はすぐさま闘気の塊をまっすぐ、振り切った体勢の弥生に放つ。

「『拳撃・直崩滅』！」

それを弥生は左のストレートで相殺すると同時、間合いを詰めて、間宵に肉薄する。

「『交撃・銀華旋風！』」

下の足払いし、倒れたところを追撃の拳。

これは本来足払いは牽制で、もしこれで倒れたら追撃、という程度の技だった。

しかし、弥生の足払いは、信じられないほど速く、間宵でも見きれないほど、巧妙に隠されていた。

「な……！！」

地面から天井を見上げ、そして一瞬もしないうちに刃付きの拳が撃ち込まれてくる。

「うわ！」

間一髪、というか反射でよけた間宵はすぐさま立ち上がり、攻撃態勢に移る。

「『弧竜蹴拳撃』！」

弧を描くような蹴りと、拳が順に繰り出される。間宵が扱う拳法の中でも致死性の高い技だ。素人に使えば即座に死を与えられるよ
うな、そんな技。

「『反衝・心突』」

それを流れるような動作で拳を上、蹴りを下に受け流し、間宵の中心を開けさせる。

そこに、刃付きの凶悪な拳を、突きいれ――

「やめろ！」

どなり声が聞こえて、弥生は止まった。同時に、今までうつだつたような教室もシンと静まりかえる。

「……え、あれ……」

はつと、周りを見渡す弥生。

「キミたちは一体何をやっているんだ！こんなところで殺し合いなんかしている場合か！そんなものは熱海で十分やっただろう！まだ足りないのか！？」

そんな弥生に構わず、心葉零は二人を叱責し続ける。

「間宵！君は四季に対してやりすぎだ！そして、いちいち人をからかうな！」

「い、いや、私は別にからかったりなんか……」

「キミの言動で襲いかかってきた人間がいるのに、からかわなかったと言うのか！？ならばキミはよほど無神経なんだろうな！」

今度は茫然とする弥生に、

「キミはなんで今日に限ってそんなもの取り出すんだ！熱海の時でもそこまで物騒ではなかっただろう！何考えてる！こんなところ

で人を殺して騒ぎにならないとも思っていたのか！」

「ひう、ご、ごめんなさい……！」

なぜ自分がメリケンサックをはめた拳を間宵に突き出しているのか理解できないまま、弥生は謝る。

彼女はメリケンサックをはめたところまでしか覚えていない。

「なぜ叱られているのかわからないまま謝るな！そもそも攻撃体勢に入ったら我を忘れるような武道をこんなところで使おうと思うな！キミの師匠はそんなことも教えなかったのか！」

「ひう、ち、違います……！師匠はちゃんと、教えてくれて、でも、大切な人を守る時は気にするな……」

戦闘中はいかなる精神攻撃に耐える武道、それが弥生戦闘術。我を忘れて、というよりは修行中に戦闘用の人格を新たに作り上げるのだ。

「ああ、いちいち間宵と四季のことにキレるな！四季の危険を感じるな！別に間宵は四季を殺したいわけじゃないんだ、その武道は本当に四季が危なくなつた時のために取っておけ！」

「は、はい！」

弥生はちゃんとかかとをそろえて返事をする。

「キミもだ間宵！今後は少し四季に対する暴力を控える！能力のあるものがないものに能力を振るってどうする！今のままだと本当に夜闇が言うように暴力女だぞ！」

「う……す、すまねえ……」

間宵もしゅんとなつて謝る。

「ふん、わかればそれで……」

「おい、お前らなにしてる！」

その時、教師がやってきた。

カタブツで有名な体育教師だった。

——時は戻る。——

第二十話　頂点を極める戦い！？（後書き）

第二十一話　弥生と新しい人物！??

「……で、今まで説教食らったり説明していたりしていた、というわけだね」

「はい、そうです」

僕は夜闇から聞いた、僕の気絶と同時に弥生ちゃんが間宵ちゃんに戦闘を吹っ掛けた、という話を半ば信じきれないでいたが、もう半分は信じていた。

夜闇が嘘を言うとは思えないし、そもそもよく考えたら弥生ちゃんには戦えるんだった。なぜかはわからないが、弥生ちゃんは戦闘をしかけて……

「どっちが勝ったの？」

うわ、なんか僕最低な質問してる気分。

「おそらく、弥生さんかと。零さんが止めなければあの攻撃は入っていたでしょうし、全体的にも間暴力女は後手に回っていました。……暴力女は普段からですが、まさか弥生さんが戦うなんて……」

「あはは、僕もちよっと信じられな」

「四季君！」

スパーンという感じの軽快な音が保健室の扉から聞こえ、件の女の子、弥生ちゃんが入ってくる。

「四季君、大丈夫ですか？その、死んじゃったりとか、しないで
すよね……？」

「あはは、気にすることないよ！慣れてるし」

「な、慣れないでください、そんなこと！」

弥生ちゃんにも言われちゃったよ。……僕たちがおかしいのか？

ふつう、幼馴染同士って喧嘩するものじゃないの？

「……ふむ、キミが思っている幼馴染との喧嘩、というものが知
りたい、言ってみてくれ」

「心を読んだ！？」

「読めるはずがないだろう。でも、慣れるなど言われて不思議な
顔をするということは自分が当たり前だと思っている証拠だ。……
そこから推測しただけだ」

「……すごいね、零ちゃん」

少しの顔の表情やしぐさでそんなことまでわかるなんて……。熱
海の時もそうだったけど、本当に零ちゃんって研究者、っぽいよね。

「……ふん、ほめてもなにも出ないぞ。むしろ出してくれ。ほら、
ボクに情報をくれ」

「わかったよ……」

僕は半ばあきらめつつも、零ちゃんの質問に答えた。

「……互いのどつちかが気絶するまでするのが、幼馴染同士の喧
嘩……かな？」

三人が黙りこくった。

……あれ？

『あははゝ私もなんだよゝ！』

みたいな明るいノリを期待していたのに……なんで？

「か、可愛いそうに……四季君、今日からは私が守ってあげるからね！」

「……四季様、今回はかりは暴力女から四季様をお守りするため、弥生さんと協力します。……一緒に頑張りましょう、弥生さん」

「はい！」

弥生ちゃんと夜闇はなんだが結束しちゃってるし。

「……ふむ、インプリンティング……いや、習慣か？……どちらにせよ、哀れなものには変わりない……。四季、今までつらかったろう？ボクが間宵を説得しよう……」

コンコン。

零ちゃんも新たに決意している時、保健室に控えめなノックが響いた。

「はい？」

僕はすぐに答える。

間宵ちゃんかな？

……いや、あの子がノックなんかするわけがない。……いや、するんだろうけど、僕にはしないだろうな。って思ったただけだよ？全然、これっぽっちもノックする間宵ちゃんが想像できないとか、そんなじゃないんだからね！？

「あの、如月弥生という生徒がここにいと聞いてきたのですが……」

「ひうー！？」

扉の向こうから聞こえてきた老獪な男の人の声に、弥生ちゃんは目に見えて動揺する。

「……弥生ちゃん？」

それだけでなく、手に持ったかばんからナイフやらバットやらメリケンサックやらの携帯武器を取り出し、

「あ、あの！みなさん、これ持って待機しててください！」
夜闇、零ちゃんに渡した。

「どこに行かれるのです？」

「どこに行くんだい？」

二人は武器を受け取ったまま訊いた。

「逃げます！四季君、しばらくの間ごめんなさい！私のこと、忘れないでくださいね！」

そう言つて、保健室の窓の方に向かって走り出した！？

「弥生ちゃん何やって……」

パリーン！

……ええっと、一度整理してみよう。
来客が来た。

で、その人は紳士的に弥生ちゃんがいなかどうか訊いてきた。
その人の声を聞いたとたん弥生ちゃんの様子がおかしくなった。

で、そのまま弥生ちゃんは保健室の窓からグラウンドに飛び出し、
オリンピック選手もかくやという速度で走り、どこかへ行方をくら
まそうとしている。

「……すみません、弥生は今いませんが……」

送れて、夜闇が扉の向こうにいる人に答えた。

ところが、返答は返ってこなかった。どころかさつきから無反応
だ。

……あれ？

「……おかしいな？……あ……」

不審に思った零ちゃんが保健室の扉を開けた。

誰もいなかった。

「……帰っちゃったのかな？」

「い、いえ……違います……」
「え？」

珍しく動揺した感じの夜闇の声。

ゆっくりと夜闇は手を水平にあげ、ある一点を指さす。

僕と零ちゃんは同時に夜闇が指さした方向を見た。

そして、絶句する。

一人で逃げていたはずの弥生ちゃんの後ろに、バイクかと思うぐらいの速度で走って彼女を追いかけるおじいさんの姿が、増えていた。

……
だれ？

第二十二話　三月ちゃんと十二月さん！？

「……誰？」

「私にもわかりません」

「ボクにもわから……いやもしかしたら……」

まったく正体不明のおじいさんの正体の見当を一瞬でつけた零ちゃん。
「やん。」

「……心あたりがあるの？」

「おそらく、……弥生の保護者だろう」

「保護者？　なんで？」

まさかただ喧嘩しただけで親が出てくるわけがないし、いたとしてもあんなおじいさんではないだろう。

「なんで？　四季はもう忘れたのか？　弥生は唯一『親の承諾を得ずに』キミの家に寝泊まりしている人間だぞ？」

「あなたはどうなんです、あなたは。研究所から逃げて来たと言っていたではありませんか」

「ボクは違う。ボクはあそこで働くのはごめんだと思ったから自主退社したようなものだ。親はもうとっくに死んでいるのでな。心配してくれる人間などいないのだよ」

零ちゃんは笑いながら言った。親がいないのは零ちゃんにとってあまり悲しいことではないらしい。それとも、悲しいのを無理して隠しているのかな……？

「さて、四季。もしかしたら今日明日中には弥生がいなくなるかもしれないぞ」

「……なんで？」

「いくらキミでもわからないわけではないだろう。保護者が来たんだ、目的は一つ。どこの馬の骨ともわからん輩から愛娘を取り戻すためだよ」

「零さん、四季様は馬の骨では……」

「親御さんから見たら馬の骨にしか見えないだろうね。娘を誑かしたにつくき仇……なんて思われていても不思議じゃない。……あ、そうそう、おそらく弥生の保護者は如月戦闘術の党首だろう。」

四季、骨の十本二十本で済めばいいな？」

さあーっと僕の顔から血の気が引いて行くのがわかった。

子供の弥生ちゃんでもめちゃくちゃ強い如月戦闘術。その党首が僕に怒ってその力を振るったら……！！

「……どういうことですか、零」

「ま、運悪かったり虫のいどころが悪ければボクたちは翌日にでも葬式の準備をしなきゃいけない、ということさ」

「そんな！」

夜間は悲しそうに言うが、僕はそれどころではない。

こ、殺される……？

確かに僕と弥生ちゃんと一緒に暮らしてる。でも、やましいことなんか何一つしてないし、誑かしたりもしてないよ！？

「…………ふむ、グラウンドにいた彼らはどこに行ったのだ？」

ふと、零ちゃんが見て、今まで走りまわっていた二人の姿が忽然と消えていることに気付いた。

え、と僕が疑問に思うと同時に。

「がははははーわしから逃げようなぞ、百年早いわ、弥生！」
「は、はっ……」

がらりと、呵々大笑しているおじいさんが脇に弥生ちゃんを荷物のように抱えて保健室に入ってきた。

「…………あ、ああああ、あの、…………あ、あなた、…………は？」

僕は弥生ちゃん以上におどおど、おろおろ。

「…………うつん？お主はなんじゃ？」
しかも質問に質問で返された。

「ええ、つと、僕は秀句四季、です……………」
「わしは如月 師走^{しわす}じゃ。…………ふむふむ、そうか、お主か？」

そう言いながら、如月 師走さんは僕を品定めするようじろじ

ると全身を見回す。

「な、何がです……?」

ちなみに、夜間も零ちゃんも師走さんに圧倒されているのか、それとも下手に動いたらまずいと感じているのか微動だにしない。僕だってできることなら動かない側に行きたい。でも、どう頑張っても師走さんの視線は僕に釘付けで、動こうとしない。

それが敵意か親愛かは、まだわからないけど……。

「弥生を誑かして自分の家に連れ込み、うちの弥生を好き勝手しているのは、お主じゃな?」

あ、死んだ。

僕はそう思った。

「え、あ、あの……、ぼ、僕は……あの、」

「お、お、お師匠様! わ、私は、私から四季君の家に行ったの! 四季君は悪くない!」

「弥生は黙っておれ」

「は、はう……」

「ええっと……僕は、何もしてません」

「ほう、何もしてない?」

「は、はい」

「キスも?」

「は、はい」

「……えっちもかの?」

「「はい!」」

最後の質問は僕も弥生ちゃんが顔をまっかにしながら答えた。

「……なんじゃ、面白くない……」

とん、と優しく弥生ちゃんを地面に下ろした師走さんは、しかめっ面でそうつぶやいた。

「え、今なんと……？」

僕がおっかなびっくりに訊いた。

「面白くないと言ったのじゃ！お前さん仮にも男じゃろう！かわいい女子とひとつ屋根の下にいるくせに、手も出せんのか！？情けないにもほどがあるわ！」

ええ、えええ！？

なんかめちゃくちゃ不条理なことで怒られてませんか、僕！？

「あ、あのあの、お師匠様、なんでここに……？」

「決まっておろうよ」

弥生ちゃんの問いに、師走さんはりやりと僕を見て笑って、言った。

「弥生の婿殿として、四季、お主にわしら如月の里まで来てほしいのじゃよ」

……ええと、また旅行ですか？

第二十三話、如月の里へ、レッツゴー！〜

如月戦闘術。

殺すためにある武術だそうです。

「ま、わしらのことはどうでもいいんじゃないよ、この際」

そう言ったのは、大型ワゴンの運転席に座る如月師走さん。

「どうでもよくはねえだろ。世界一の武術だぜ？」

助手席に座ってその世界一の武術の師範にため口を利く間宵ちゃん。

彼女は僕らが車に乗る算段が付いてようやく先生たちのお説教が終わったみたいだ。弥生ちゃんよりもお説教が長いのは普段の行いが悪いせいだよ、と僕が言ったらまた殴られた。気絶はしなかったけど。どうもお説教が効いているらしい。

「そ、そ、そうですよ……お師匠様」

僕の右隣に座っているのは、おどおど度がいつもの三割増しぐらいの弥生ちゃん。

どうも師走さんは弥生ちゃんのプロテクト者兼師匠というらしい。

「いや、そんなことよりも弥生の縁談の方がはるかに重要じゃない。どうせすぐ廃れる運命にある武道なぞ、もはやどうでもいいわ」

「……そのような悲観に走るのはまだ先でもよろしいかと」

僕の左隣は、学生服から一転、メイド服に着替えた夜間。

「ま、事実なんだ、仕方ないだろう」

僕の後ろの席で冷淡に切り捨てるのは、学生服の上から白衣をはおった零ちゃん。

「そうかしら？意外と長持ちしたりして、ね？」

そう思わせぶりな言葉を発するのは、車でアパートまで迎えに行つて連れて来た四様。

師走さんを除けば総勢六名。

「……それにしてもずいぶん大人数じゃな？」

思わず、といったふうに漏らした師走さんの気持ちかわからないでもない。

しかも僕以外の全員が女の子だし。

「……ふむ、そうかそうか、理解したぞ」

「何をですか？」

僕は訊く。もちろん敬語。

「この子たちも嫁候補じゃな？」

「違う！何勘違いしてやがんだじじい！」

「私は妹ですよ？」

だが、否定したのは四様と間宵ちゃんだけだった。

……え？

「ふむふむ、お前さんは違うのか……おいしいのう」

「何がおしいんだよ」

間宵ちゃんがいぶかしげに訊く。

「その腕と肩、それから脚の筋肉の付き方が格闘家のものじゃかな、てつきり、な」

「……わかってんじゃねえか」

格闘家、と言われて嬉しがるなんてどこの少年漫画の主人公ですか、間宵ちゃん。

なんて言ったらまた気絶だろうな……なんて思いながらも、車は進む。

高速道路に入ってもう二時間。師走さんの話ではそろそろ着くらしいけど……

「さて、一つ言っておかなければいかんことが一つだけある」

高速道路を下りた時点で、師走さんが神妙な面持ちで口を開いた。

「今から行くところは如月戦闘術の里、つまり住人全員が戦闘員、というような現代社会とかけ離れたところじゃ。今回は婿を迎える、という名目で四季殿を連れていているわけじゃ」

全員がうなずく。

「じゃが、おまけがあまりに多すぎる。……まあ、一人は肉親じやから構わんが、それ以外の人間が多すぎるわけじゃ。……じゃから、選別をする必要がある、と言いつける者があるかもしれん」

「それって、みんな同士で戦ってこと……？」

僕は不安げに言う。だ、だって、みんなが戦うところなんて、僕見たくない

「……いいじゃねえか。おもしれえ。おい弥生、さっきの決着、向こうでつけねえか？」

「い、い、いいですよ？わ、私も、その、あの、間宵さんとは、その、戦いたかったなあ……って、ちょ、ちょうど思っていたところですから！」

「私は相手がだれであろうと、勝利します。それが私の意味なのですから」

「……ま、実験したいのはまだまだあつたし、戦闘なんて趣味じゃないが、四季の研究の妨げになるものは排除しなければな。受けて立とう」

「……私の能力、戦闘でも役立つか疑問だったの。使えなきゃギブアップすればいいし、別に私はいいわよ？」

みんな、なんでそんなにノリノリなの？なんで四様までそんなこと言つの？お兄ちゃん悲しくなちゃうよ？

「……いや、ノリノリなのは構わんが、戦うのはお主ら同士じゃないぞ。里の者たちと戦って、それで実力を認められれば、弥生と共に四季殿を取り合っている権利を得られる」

「ちょっと待てじい」
「なんじゃ」

めちゃくちゃ偉そうな間宵ちゃんの言葉に全く不快の意を示さないのは、大人の冷静な態度なのか、それとも師走さんの中ではそれが当たり前なのか。

絶対に前者であってほしい。

「なんで、弥生が嫁なのが前提なんだよ。おかしいだろ」

「……ふん、ただの順番じゃ。それとも、勝つ自信がないのか、おぬしには？」

「あるにきまつてんだろ！ どうせ弥生みたいなのばっかなんだろ？ なら余裕だぜ！ さつきも全然私の勝ちだったからな！」

……ほんと、変なところで見栄張るあたりも男みたいだな、間宵ちゃん。

「……ふはは、その言葉、忘れるなよ？」
「つたりめえだ！」

そう間宵ちゃんが叫ぶころには、車は右も左もわからないような森の中に入っていた。

目的地はもうすぐだ。

第二四話　如月弥生の思い出話！？

闇。

私の中って、それだけです。
暗くて黒い、それだけです。

私は私、なんて甘えた言葉も言えないくらい、真っ黒に染まっちゃってます。

助けて、苦しい。つらい、悲しい、さびしい。
そんな感情が全部バツサリ消えてるんです。

あの人たち——去年私をいじめていた人たちも、きっと、私の泣き顔見たことないと思います。

だって、そう感じないように生まれた時から訓練されてるんです。

何をされてもなにも感じないように、訓練されてるんです。
親に殺されてもなにも感じないように、鍛えられてるんです。

幼いころからそんなことばかりやってたら、誰だって私みたいになります。だから、私の家——如月家の人間はみんな仲良しです。

だって、他人を憎むよう『作られて』ないから。他人を愛することしか知りません。愛されなくても、何も感じません。うれしい、気持ちいいは感じるのに、苦しい、痛いは感じません。

変ですよ？でも、私にとっては変じゃなかったんです。

それが、当然のことだと思ってました。

そして、私も家族と同じようなものだ、信じていました。

……でも、でもです。

今でも……忘れません。

『何やってるんだ、君たちは！』

本気のどなり声でした。

『うわ、やば、暴力姫の金魚のフンよ』

彼女たち——私をいじめていた人たちは、そうやって『彼』をけなしました。

『それで？僕がフンなら、君たちは？他人をいじめて悦ぶ雑菌かな？』

今では信じられないことですが、『彼』はとっても傲岸不遜に、そう言っただのです。

『……調子乗ってんじゃないわよ！何よ、あの暴力姫なんかと一緒にいちやって！あんな女私たちにかかれば……』

『……だつてさ、間宵ちゃん』

『え……？』

そう言えば、ここはどこだったでしょう。たしか、廊下でした。先生も友達も見ているはずなのに、誰も助けてくれなかったんでし

た。

『……よお、私がんたつて？』

強い――

私は訓練を受けていました。だから、一目で彼女の実力がわかったのです。

里にいた誰にも負けないような強い思い。

それが、彼女の力の源だということも、すぐにわかりました。

『ひつ……！』

『私はな、強い奴と戦いてえんだよ。……お前ら、強いんだつてな？よし、上等だ、やろうじゃねえか。武器だろうがなんだろうが自由に使えよ。私は勝つ』

助けられた、ということは頭に浮かびませんでした。

ああ、早くこの人の戦いが、戦闘が見たい。

私はそう強く思いました。

一般人に力を振るつてはならない、そんな不文律も忘れて、とびかかりそうになりました。

でも、私が望む瞬間は訪れませんでした。

『……間宵ちゃん、ダメだよ、喧嘩は』

『……つたく、しゃあねえな、……お優しいんだな、四季は』

そう言つと間宵ちゃんと呼ばれた人は、いともたやすくあんなに大きな闘気を消してしまいました。

『……あ……あ……』

『早く消えたらどうだ？私の気が変わる前にな！』

『は、はい！』

間宵ちゃん、ではなく四季、と呼ばれた男の子に敬礼すると、彼女たちはどこかへと消えてしまいました。

『大丈夫？』

さつきの傲岸不遜な態度はどこへやら、とても優しい顔を私に向けて、手を差し伸べます。

その瞬間、私は直感しました。この人は私を助けるためだけに、あんな演技をしたんだと。

生まれて初めてのことでした。誰かから、助けられた、なんてことは。

里にいた時はもちろん、都会に来てからも、誰一人助けってくれる人なんて、いませんでした。

だから、でしょうか。

『……ほ、ほつといて、く、ください……。わ、私一人で、なんとかできました……。』

そんな、心にもないことを言ってしまったのです。でも、違和感に気付きました。

知らず知らずのうちに、助けてくれた四季さんの反応をくまなく、細かいところ——心拍数や体温の変化などです——まで探っていました。

『……そう。じゃあ、何かあったらまた助けるよ。おせっかいを焼かせてくれるかな?』

私が想像した、残念がる様子や怒った様子は全く見られませんでした。でも、その代わりに感じたのは暖かい、本当に澄んだ親愛の情。

『……は、はい……』

……あ、れ?

気がつけば、私はそんな返事をしていました。もっとひどい言葉で袖にするつもりだったのに。なぜ、私はこんないい返事をしているのでしょうか?

答えはすぐに見つかりました。

私は、彼に恋をしたのです。

私は生まれて初めて、こんな身体に生まれたことを、如月の里で訓練したことを真剣に、どうしようもないレベルで悔みました。

こんな、闇に染まった女の子なんて、絶対に好きになってもらえない——

私はあきらめました。 あきらめたつもりだったのです。

……でも、私自身、気付いていなかったのです。

私の闇は、果てしなく深く、大きいことを。

第二五話　到着、そして不穏な影！？

その日から、一週間。

一週間で、私をいじめようとする人は、クラスにはいなくなりました。仲良くなれませんでしたけど、私をいじめようともしませんでした。誰が止めてくれたのかは、簡単に推理できました。

お礼がしたいな。

きっかけは、ほんの些細なことでした。
知らないなんて、私は言えません。

『……あ、あの！』

私は、さりげなくを装って、でも全然できなくて、おたおたしながら楽しくおしゃべりしていた四季君に話しかけました。

『なに？如月さん』

『あ、あの……き、来てくれ、ませんか？』

今からしたら、なんて大胆なことをしたんだろう、って思いました。ついてきてくれないかも、って思いました。

でも、四季君は笑顔でいいよと言ってくれました。

私は冷やかされながらも、四季君を屋上に連れ出すことに成功しました。

その時の会話は、昨日のことのように思い出せます。

「……ねえ、四季君」

「なあに、如月ちゃん、こんなところに呼び出して」

「弥生」

「え？」

「弥生って呼んで？」

「……弥生、ちゃん？」

「……ありがと、四季君。……四季君は、さ。なんで私のこと助けてくれたの？」

「……なんで？……なんでだろうね？」

「わからないまま、見ず知らずの私を助けてくれたの？」

「ううん、見ず知らずなんかじゃないよ」

「え……？」

「クラスメイトだろう？なら、助けあわなきゃ」

「……そ、そんな」

「え？」

「そ、そんな単純な理由で、私を？私だからじゃなくて、クラスメイトだから？」

「そうだよ？」

「……っ！」

衝撃、でした。

夢に見ました。思い馳せました。でも、全部幻想だったのです。

私のことを見ていてくれたんじゃないか、っていう夢は夢のままです。

私のことを好きなんじゃないかという希望は絶望になりました。

私が特別だからじゃない。私がクラスメイトだから、助けた。

もし、別のクラスだったなら？

もし、どこかの路地だったなら？

私は、助けてもらえなかったの？

訊くことは、できませんでした。

気が付いたら、走り出して、いましたから。

その次の日、決心しました。

『私は、出家します』

お父さん、如月 睦月とお母さん、如月 葉月。

大切な話があると前置きして、私はこう言いました。

『……本気か？』

『どういう意味かわかってる？』

いまだに戦闘こそが世間を渡る方法だ、なんて信じている田舎で、出家なんて家出の理由でも、嘘だとはすぐにはわからないのです。

とにかく、この家から、こんな血と闇にあふれたこの里から、一刻も早く出なくては――

私はそういう思いで、一心に両親を説得し、見事許可をいただきました。

もちろん、お寺になんか行きません。屁そぎなんてやってられません。

行くのは、……その、尾行して調べた、四季君のおうち。

古い、年季の入ったアパートです。

私の決心。それは、四季君のところに押しかけて、一緒に住んでしまおうと言うものでした。

私は特別じゃなかった。じゃあ、特別になればいい。

そんな単純な道順で、私は今まで嘘もついたことのない両親に嘘をつきました。

もしかしたら追い返されるかも。もし住まわせてくれたとしても、襲われちゃったりするかもしれない。

……もちろん、後者は大歓迎ですよ？

四季君が部屋に入るのを見計らって、四季君部屋の扉の前に立ちます。

すると、私の他にも二人ほど、おんなじことをしようとしている人がいました。

『……同時に行きましょう』

『そうですね』

『だな』

変に騒いで四季君に嫌われたらどうしよう……

私たち三人は、瞬時にそう考えたのでしょうか。意外と喧嘩することなく、私たちは扉をノックし……

『はい？』

そして、私の新しい生活は始まりました。

……あ……

「ここが、如月の里かあ……きれいなところだね、弥生ちゃん」
「は、はい！」

出家の話をした時に一度帰って来たけれど、なんだか一年ぐらい来ていないたいでした。

つい昔のことを思い出すぐらい、郷愁の思いにかられていました。

ここに来るたび、私は嫌な嫌な気持ちになります。

……ここが私の闇を生みだした場所。

私の闇を、四季君は知らない。知られてはいけない。

でも、その四季君の隣で私は、何も知らない少女のように振る舞っている。

闇を隠して、何も知らないかのように。

「……へえ、きれいじゃなか」

間宵さんが言います。

間宵さんは帰れないかも、知れませんか。

私は少しだけ、慣れない未来予想なんてしてみます。
でも、きつとこの予想は当たると思います。

「……」

夜闇さんが、少し顔色が悪いです。なんか、胸のあたりを押さえて、苦しそうです。ここの空気、そんなに薄いわけじゃないんだけどなあ……？

「……四季様、この里、雰囲気が少しだけ……」

「なあに、夜闇？具合悪そうだけど？」

「……いえ、大丈夫です」

そう言つと夜闇さんはなんでもない振りをして、ぴんと胸を張る。私の緊張も、同時に張られました。

なんで、夜闇さんは気付いたのでしょうか？

『月』という組織が何かは知りません。けれど、相当な能力を持っているようです。

私は緊張を隠したまま、四季君の隣で里に向かいます。

「……ふむ、興味深いな」

ぽつりと、零さんがつぶやきました。私はそれにどきりとしてしました。

「なんでだよ、零」

「……意外なのはキミだ。何故キミは気付かない？……ああ、そうか、完全な一般人は、キミと四季だけか……」

「はあ？何言つてんだよ、零」

「……いや、忘れてくれていい。へば研究者のたわごとだと、聞き逃してくれ」

「はいはい、わかったよ」

……どうして、零さんまで？

普通はどうあっても気付けないのに……。

あと少いで、里につきます。

あと少いで、四季君が私の生まれ故郷にきます。

「……四季君」

あと一歩で、里の領域です。

「なあに、弥生ちゃん」

「……ありがとうございます、私の里に、来てくれて」

「気にしないでよ。旅行気分だし、めっちゃくちゃ楽しんでるから」

……胸が痛みます。

「そうですか」

四季君が里に入りました。

——一名、確認——

声が、聞こえました。

わかってます。いちいち言わないでもわかってます。

「……四季君」

あと一歩で、私も里に入ります。

でも、私はそこで歩みを止めました。

「……どうしたんだよ、弥生」

「なんでも、ないです」

私のことを気にせず、間宵さんは里に入りました。

——二名、確認——

どうやら、夜闇さんも一緒に入っちゃったみたいです。

「どうした、弥生。……何かあったのか？」

「いいえ？ なにも」

勘のいい零さんも、首をかしげながらも、私の横を通り過ぎ、
歩。里に入りました。

——二名、確認——

「……どうしたの、弥生さん？ しんどいの？」

朗らかな笑顔を、里に入った四様ちゃんは私に向けました。

……これで、全員。

「……おい、早く入らんか」
「……はい」

先にお師匠様が入りました。

もうこれで私の後ろには誰もいません。
いません。いません。

いないのです。

「早く行きなよ。怖いのか」

いないのです。後ろには、誰も、いません。

いません。いない。いない。

「……いま、行きます！」

心配し始めたみんなに気付いた私は、そう言って一歩、踏み出しました。

……これで私も里に。如月の里に入りました。

……さよなら。

私は氣を失いました。

第二六話　違和感、そして始まり始まり！？

くらっ。

「うわっ！」

僕は駆けて、ふらついた弥生ちゃんを抱きとめた。

「……あ、すみません、四季君。ふらついてしまつて」

弥生ちゃんは僕にもたれながらしつかりと立った。

ゆっくりだけどふらついてはいないから、多分大丈夫だろうけど、何かあったのかな？

「大丈夫？」

「大丈夫です。気にしないでください」

「う、うん……？」

何か違和感を感じながらも、僕はまた里に向かって歩き出す。

僕が抱いていた武術の里のイメージは、森に囲まれていて、古い昔ながらの家が立ち並んでいて、それで住人の人たちを見ても一見普通なんだけど、実はめちゃくちゃ強いとか、そんな誰でも抱くようなものだった。

実際は山に囲まれていて、森にも囲われているんだけど、しっかりと開発は進んでいて、家もところどころに洋式のものがある。

「……ふむ、弥生。少しみんなに里を案内してやりなさい」
「はい、お師匠様」

すつと流れるような動作で弥生ちゃんは先頭に立ち、目の前の山と森に囲まれている細々とした村を手のひらで指して、言った。

「あれが私たち如月戦闘術の親元、如月の里です。過去四百年にわたって練られ、今もなお進化をつづけている実戦仕様の戦闘術、それが私たちの武術ですが――」

小さいころから何度も聞かされているのだろつ、弥生ちゃんの説明はよどみがなく、流ちょうだった。

弥生ちゃんの説明は里のことから武術のルーツまで多岐にわたつて、道中僕らはほとんど暇をしなかった。

「……では、つまらない私の説明はこれまでにして、あとは里の皆さんとあいさつや、少しの会話でもしていただけたら、と思います」

「へえゝすごいね弥生ちゃん！」

締めくくりまで上手だった弥生ちゃんに、僕はつい拍手して褒めてしまった。

「……ありがとうございます」

僕のお礼を受けて、微笑みと一緒にぺこりと頭を下げる弥生ちゃん。

「……」

でも、すごいと思っていたのはどうやら僕だけのようで、他の四人はしかめっ面で黙りこくったままだった。

……何か面白くないことでもあったのかな？

「……なあ、四季」

「今はいけません」

「今はダメだ」

「今はダメよ」

口を開こうとした間宵ちゃんは、三人に同時に止められた。

珍しいことに三人の忠告に間宵ちゃんは従い、「……悪い」と言
って黙ったのだ。

しばらく僕たちは農村さながらのあぜ道を歩き、田舎らしい風景
を堪能する。

でも、みんなのしかめっ面がなおることはなく、僕だけがはしゃ
いでいるみたいな雰囲気で妙に居心地が悪かった。

「……みなさん、ここがみなさんに宿泊していただく旅館です。
……では、行きましようか」

指されたのは、一際荘厳な旅館だった。

手入れが行きとどいていて、くすみ一つ見当たらない外観。全部
木造だからその重圧感。

この前の成金趣味の屋敷とは大きく違い、この旅館からは歴史と

威厳が感じられた。

「いらつしゃいませ。『秀句様』ですね？」

「はい」

弥生ちゃんは出て来たおかみさんに慣れた感じで応答している。
ここも顔みしりだったりするのだろうか。

「……みなさん、部屋は二つあります。四季君、四様ちゃんです。他の皆さんは私と同室と言つことになります」

師走さんはこの里に家があるから、そこで寝泊まりするようだ。
って当たり前か……。

……僕と四様、かあ……。うわあ、またなんか言いあつたろうなあ……

「……わかったわ。お兄ちゃんと一緒ね？」

「はい」

と、思っていたんだけど、意外とみんな了承した。……なんかみんな聞きわけよすぎない？いつものパワーはどうしたんだろう？

「……では、今日は各自自由に過ごしてください。散策するも、休息するも自由です」

弥生ちゃんの言葉で、今日は解散となった。

……なんかみんな大人しいな？
そう思ったのは、どうも僕だけじゃないみたいだ。

「……お兄ちゃん、変だとは思わない？」

与えられた自室に入って、四様がすぐにそう言った。

僕たちの部屋としてあてがわれたのは、絵にかいたような旅館の和室。

6畳ぐらいの畳に、緑色の壁。押し入れがあって、中にはきつと布団とかが入っているのだろう。

「変？確かにみんななんか大人しかったけど……」

「違う違う。弥生さん」

「弥生ちゃん？」

……まあ、確かに違和感を感じるところはないわけじゃないけど

……

「特に？間宵ちゃんたちよりかはましじゃない？」

「……そう。お兄ちゃんってやっぱり鈍いね。程度で言うと『俺、ずっと管理人さんのお味噌汁が飲みたいんだ！』って熱烈な視線で言われてるのに何にも感じない超有名漫画の管理人さんレベル」

「……それって、鈍いのか……」

てか、四様ネタが古すぎるぞ。……僕も読んだからわかるけど、四様の同世代で今のわかる人いるんだろうか？

「……鈍いわよ。一緒にいて気付かなかったの？」
「何に？」

僕がそう言うと、四様は憐れむように僕を見た。
そして天を仰ぎ、胸の前で手を組み、懇願するように言った。

「……神様、どうかお兄ちゃんの鈍感が治りますように……」
「神様に頼むほど僕は鈍いのか!？」

僕は反射的に突っ込む。

「……突っ込みは早いのに」
ぼそりと言って、四様は部屋を出ようとした。

「どこ行くの？」
「弥生さんのところ。聞きたいこといくつかあるから」
「行つてらっしゃい」
「行つてきます」

そんなありふれた会話を終えると、四様は部屋から出て行った。

……独りきりになった。

暇だな……。

三秒で思う。

……疲れたし、寝よつと。

布団も敷かずに、僕は横になる。

まあ、仮眠みたいなものだ、わざわざ布団を敷くまでもない。

……めんどくさいってのが、一番の理由だけど。

すぐに眠気は襲ってきた。

「……訊きたいことがあるの、いいかしら、弥生さん？」

私の問いに、弥生さんは「いいですよ」と微笑んで言った。

間宵さん夜闇さん零さんも私の隣で弥生さんをいぶかしげな目で

見ている。

「じゃあ、まず一つ目……」

さあ、なぞ解きゲームの始まりよ。
まずは聞き込み。

最初の証言者、如月弥生。

いざ、開始。

第二七話　質問と四様の意外な趣味！？

「まず一つ。私たちは何をやらされるの？」

いい、四様。これはゲームよ。この里に入ってから様子の変わった弥生さんを元に戻して、家に帰れたら私の勝ち。

弥生さんが元に戻らなかったり、誰か一人でも家に帰れなかったら、私の負け。

そのために、頑張らなきゃ。能力を使うことは最大限控えて、できるだけ、自分の力で。

「……明日、私たちの里の者と戦っていただきます。リーグ戦で、とにかく勝ってください。……ご心配なく、負けたからと言ってなにも罰などはありません。……死者に罰など、意味のないことですから」

「……なんだと？」

間宵さんが鬼気迫る表情で弥生さんに詰め寄る。

「勝てばよいのです。勝って殺して、里の者たちを納得させてください」

「……ずいぶんと、冷静ですね？異常なほどと言ってもよいぐらいです。……何がありました？」

「なにも」

夜闇さんの気迫のこもった質問に、弥生さんは眉ひとつ動かさず

に答えた。

「……ふむ、少し気になるのだが、四季は戦わなくてもいいのか？」

「よいのです。婿には子種さえもらえればそれで十分です」

とんでもないことを真顔で言う弥生さん。

いつもなら、ここで喧嘩でも起こったかも知れない。でも、今は弥生さんの豹変の方が気になるのだろう。

「……私も？」

私はおそろおそろ聞いてみた。ちなみに私は戦うことなんてできない。

「もちろんです」

それを知っているはずの弥生さんは一言で斬って捨てた。

冷静な瞳を崩すことなく、心の奥に何かを秘めたまま、弥生さんは恐ろしい殺し合いの説明をしていく。

「……以上です。なにか質問は？」

「あるぜ」

もっくらえきれない、といったふうに間宵さんが立ちあがり、弥生さんを見据える。

「お前、誰だ？」

「如月弥生です」

「違うな。てめえはそんな堂々としてねえだろ」
「これが本当の私です」

淡々と、弥生さんは答える。

「……この里、何かあるな？」
「なにも」

「嘘だな」
「本当です」

いくら問い詰めても、暖簾に腕押しだ。

「……つたく、強情な奴！私は風呂入ってくる！……いいか弥生、絶対に正体暴いてやるからな」

ついに、間宵さんは弥生さんに訊くことをあきらめてしまった。
タオルや着替えを持って、部屋を出ようとする。

「……もし」

氷のような声で、弥生さんが言った。

間宵さんは止まって、振り向く。

「もし、それほどまでに私のことが知りたいなら——」
「なんだよ？」

間宵さんに訊かれて、弥生さんはいと笑って答えた。

「勝ってください。最後まで勝ちぬけば、私のことはおのずとわ

かるでしょう」

そう言って、弥生さんは次の瞬間にはいなかった。

「……何があつたんだよ、あいつ」

心配そうな顔をして、つぶやくように言った。

「心配なんですか、暴力女」

夜闇さんが揶揄するように言う。

すると間宵さんはみるみる内に顔を赤くして、首をブンブン振って言った。

「ち、違えよ！な、なんで私があんなわけわかんねえやつ心配しなきゃいけないんだよ！おかしいだろ！？ぜ、全然心配なんかしてねえぞ！？そ、その、あれだ。わ、私は様子が変だからいじめがないな〜って思ってたただけなんだよ！うん、そうなんだよ！」

……間宵さんのことが愛おしくてたまらなかった。

なんでこの人のかわいさに今まで気付かなかったのだろう。ああ、私はバカだ。

「そうなんですか。じゃあ、弥生さんはこのままでいいんですね？」

つい、私はそう言ってしまった。

「ダメに決まって……い、いや、その、あいつがいねえと、その、クラスの奴、心配するだろ。うん、クラスの連中のためだ！弥生が心配だからってわけじゃねえからな！勘違いすんなよ！」

今、キュンと来てた。ここまでツンデレを自然に出せる間宵さんは、きつと天才だ。ツンデレの女王だ。

今彼女にすりすり抱きついてても顔真っ赤にしながら『ば、ばか、なんだよてめえは……気色悪いな……』とか言いながらも絶対に引き離そうとはしないんだろうな……

「おい、四様。お前なんで私に恍惚とした表情ですり寄ってくるんだ!？」

きつと冗談交じりに『好きですお姉さま』とか言ったら『……わ、私はそんなガラじゃねえ』とか言いながらもしつかり気持ちを受け止めてくれるんだろうな……。

「お、おいおいおい! 四様、私はそっちの気はねえぜ! ? お、おい! 聞いてんのか! ? おうい!」

ああ、かわいらしいな、愛おしいな。

「お、おい、な、なあ、四様さん? な、なあ、頼むから、今なら冗談で許してやるから……」

百合してくれるんですか……?

「なんでもつと詰め寄ってくんだよ! ? お、おい、夜闇、零! た、助けて……」

助けて……だって! ああ、かわいい!

「……その、お気の毒ですが」

「もとの能力もそうだが、今の四様君ならおそらく神様でも倒せるんじゃないか？」

「お、おい！見捨てんのか！？」

ああ、かわいらしいな、かわいいな。もっともっと可愛がりたいな。抱きしめたいな、頬ずりしたいな、モフモフしたいな。

「わ、悪かった！し、四様、悪かった！私が悪かった！だ、だから、許してくれ、頼む！何が悪いのかわかんねえけど、許してくれ！」

百合してくれ……。はい！もちろん！

「百合しましょう！」

「うわあああああああああああああ！！？」

抱きっ！

悲鳴が響き渡った。

……。かわいい！

第二八話　反省、でもまた！??

……ああ、私はバカだ。

「……あのな、四様」

「……はい」

私は部屋の隅で壁の方を向いて膝を抱えている。

「私も一応、女の子なわけだ」

「……はい」

多分陰鬱に沈み込んでいるだろう私の背を、間宵さんが優しく撫でてくれる。

「だから、かわいいものが好き、だとか、かわいいものに触りたい、っていう気持ちはわからんでもない」

「……はい」

夜闇さんと零さんはさっきからトイレに行っている。

……きつと陰で私のことを笑ってるんだ、そうなんだ！

「……ま、まあ、その、だな。……ええと、……な？」

「……はい」

ああ、できることなら霞になって消えてしまいたい。

「……その、私に抱きついたたり頼ずりしてきたり、その、……」

胸とか、触ったりとかは、……その、うん、誰にも言わねえ」

「……うわああああああああん！」

そうだそうだそうだ！私、間宵さんに突発的に詰め寄って、抱きしめて、頬ずりして、おっぱいとか触って、それで、それで……もつと凄いこともした気がする！

「お、おい、泣くなよ……」

「だ、だって！だって！わ、私、私い……」

昔から、こうだった。

かわいいものに目がない。

可愛い！と思ったらその瞬間頭のヒューズが飛んだみたいになって、気が付いたら抱きしめたりキスしたりしていたのだ。

で、小学校の時についたあだ名が『神抱き魔』。

『神様に憑かれた抱き付き魔』を縮めたものらしい。

まったく不名誉なあだ名だった。

しかも神様に憑かれてる、ってところから何を勘違いしたのか私に抱きつかれたら幸運が寄ってくるということにいつのまにかなっていて、目いっぱい可愛い恰好して私のところに可愛いポーズでやってくるのだ。

でも、全然そういうのは可愛くない。可愛いのはやっぱり、さっきみたいな間宵さんとか、普段の弥生さん……。ああそうだ、夜闇さんとかも可愛いところがあるんだよね……。ああ、抱きつきたい

……

「おいおいおいおい！また変な目の色になってんぞ!？」

「……ああ、……モフモフ……っは!？」

ま、またやるところだった……

「……すみません」

「い、いや、いいけどよ。誰にも言わねえし。……で、ちょっとマジな話するぜ。クソメイドも零もいねえうちに」

少しだけ、真剣な顔になった間宵さんも、かわいらしくて……その無理やり男らしくふるまっているところがまた、イイ!

「……鉄拳制裁がお望みなのか？」

「ち、違います!」

あ、危ない……拳がとんでくるところだった……

「……まあいいや。……で、話始めるけどよ、弥生はあれ、どうなったんだ？」

「いきなり質問ですか？」

いや、正直言っただけの女の子ですから。荒事には向かないですよ？

「……まあ、私の中でちゃんと仮説は立ててんだけどな……ちょっと信ぴょう性に欠けるって言つか、頼んねえって言つか……まあ、とにかくお前の意見が聞きてえ」

「ま、まあ、そう言うことだったら……」

意見、ねえ。と言われても本当に弥生さんに関してはおわからないことが多いですけど……仮説ぐらいなら……今でも立てれる。

「まず一つ。これオーソドックスだけど『二重人格』。この場合は医学的に言う多重人格じゃないわね。多分この里に生まれてくるものはみんな戦闘人格を持ってる……とかそんな感じ」

「で？他には？」

「次に、誰かに乗っ取られてるって場合。……精神を完全に乗っ取るなんて方法聞いたことないけど、実戦仕様の如月戦闘術ならそれぐらいあるんじゃない？」

「なるほどな、で？」

「最後に、弥生さん自身が里にいた時に精神が戻ってるってこと」
「……どういうことだ？」

「昔はあれが、弥生さんで、長い間都会に来てて丸くなったけど、こっちに戻ったせいで幼児退行みたいに精神が戻っちゃったってこと」

「なにも情報のない今の時点で予測できるのは……これぐらい、かな？」

「……はあー！すげえな、やっぱり。お前なかなか頭いいな！私全然なにが起こってるんのかわかんなかったぜ……」

「仮説立ててたんじゃなかったんですか！？」

「まあ、その、あれだ。……てへっ」

「『てへっ』じゃない！」

なんだそれ……まったく、横着な人だ。

……でも、さっきの『てへっ』……可愛かったなあ……

「……あの、もう一度やってくれる？さっきの」

「え？……こ、こっか？て、てへっ」

頭に丸めた手をあてて、『てへっ』……なんと単純でなんとかわいらしいしぐさだろう……。

「……もう一度です……」

「お、おう……てへっ」

「もう一度……」

「……おう？」

か、か、可愛い！かわいい！抱きつきiiiiiiiiiiiiiiiiiiii
いい！

「うわああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああ！？」

頭のヒューズが飛びました。

第二八話、反省、でもまた！？（後書き）

すみません、作者のコノハです。

一週間近く休んでました。

理由はインフルエンザです。死にかけました。

昨日の夜ようやく熱がひきました。

やっと小説書けます。

お待たせして本当にすみませんでした！

駄文散文失礼しました！

ご愛読感謝、また次回！

第二九話　二度ネタ、そしてもう一度！??

「もう！知らない！やめてって言ったのに！ひどい！四様のバカ！うくつ……ぐすつ……うわあああああああああああああ
ああん！」

たつたつたつた……

「……どなたですか？さっきのは」
「どこの誰だい？さっきのは」

入れ違いになった夜闇さんと零さんがまたもふさぎこんだ私に聞いてきました。

「……間宵さん」

「嘘だ！？」

嘘じゃないです……本当に間宵さんなんです……

なんか私かなり大事なところもやっちゃったみたいで、間宵さん泣かせるなんて私最低です。

「……暴力女が、あんな風に逃げて行くななんて……」

「キミはあれだね、四様。対間宵最終兵器。今後は『四様を抱きつかせるぞ』の一言で支配できそうだ。あっはっはっは！」

「笑いごとじゃありません！もう……」

なーんで私こうかなあ……？

「まあ、今は彼女はいない方がいいんだ、どうやって払おうか思案していたところだよ」

「……私を笑ってたんじゃないんですか？」

「……最初のうちだけだよ」

「うわああああああああああああああん！」

笑ってたんだ！笑ってたんだ！

「嘘ですよ。あなたが可愛いものが好きだからと、いつ、て……」

ああ、笑ってる！私から見えないと思って声を殺して笑ってる！

「キミが気にしていることをボクが笑うわけがないだ、ろう、う、く……」

ああ！思いつきり笑ってるじゃない！

「もう！笑わないでください！」

私が振り返ってみると。

「ぷははははははは！」

「あつははははははは！これは面白い！間宵があんな風に逃げて行くななんてな！あはははははは！」

思いつきり笑ってた。

ぶっ、と私はほっぺを膨らませてアピールする。

「……む、……」

「ははは……は？」

何故だかわからないが、二人の動きが止まった。

「……ふむ、君のその性癖……笑えなくなったよ」

「奇遇ですね、零さん。私もです」

「今更そんなこと言っても遅いです！」

私はもつと頬を膨らませて主張してみる。

「……かわいい」

「ええ、そうですね」

「へ？」

私は頬を膨らませるのをやめ、二人の変化に気付いた。

目の色が、違う！

「……ふむ、この気持ちはなんというのだろうか？四季に対して抱くものに限りなく近いが……もつと暖かい」

「それは『萌え』と言っのらしいですよ、零さん」

「……ま、まってよ、二人とも？も、もしかして私のくせを笑えなくなったって……」

「うむ、キミと同じ性癖に発病したようだ」

「病氣じゃありません!？」

「関係ないよ。……さあ、ボクとキミとで秘密の花園を築こう。きっと、気持ちがいいこと間違いなしだよ?」

あ、ああ……

私は二人から後ずさりする。

でも、引いた分だけ詰めてきて、どんどんどんどんその差がなくなつて……

「「いただきまーす……」」

食べられる!?

と、思つた時だった。

「……就寝の時間です。布団を敷きますので、情事なら後にしていただけますか?」

異常に冷めた、暗い声が聞こえた。

一瞬、私は誰の声がわからなかったほど、その声は普段とはかけ離れていた。

「……弥生さん」

「何でしょう」

布団を持って、長い寝巻に身を包んだ弥生さんは艶やかで、その瞳は深い闇を覗きこんでいるよう。

本当にこの人があの明るくておどおどしている弥生さんだとはとうてい思えなかった。

「……試合はいつあるんだい？今日？明日？」

「死合いは翌日明朝より始めます」

それだけの、会話。世間話も無駄な会話もなにもない、事務的なものだけの本当に無味乾燥な会話。
息がつまりそうだ。

「……私、部屋に戻ります」

「……わかりました。四季様によろしくと言っておいってください」

「ま、同上」

二人ともお兄ちゃんのそばに居たいだろうに、弥生さんが何があったのかできるだけ知りたいし、動向をつかんでおきたいからここから動けない。……なんてもったいない。

「じゃ……」

なんとも齒切れの悪い言い方で、私は三人の部屋を出た。

……お兄ちゃん……弥生さん、何があっただろうね？

部屋に言っただけならまずそれを訊こうと心に決めた。

第三十話〜記念特別編!??(前書き)

アナウンス

……本日は『第三十話記念、『フィアンセ』特別番外編』にお越しいただき、誠にありがとうございます。本日は第三十話を記念して、いつもならないようなネタ、およびキャラクターたちの裏話などを盛大に使っております。

キャラクターについては重大なネタではないにしろ、勘のいい方ならわかってしまうようなものばかりです。嫌な方は読み飛ばすようここで注意しておきます。

では、始めましょう。

レディーーーーーー……スアアアアアアアアアアア
アアンドジェントルメー……ン!!!!

それでは、行ってまいりましょう!

しばしの間のお時間拝借!

期待されるは喜劇感激!

そのご期待に添えるべく!

やってきました記念式典!

第三十回記念——スタアアアアアアアアアアアア
アアアトオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオ!

第三十話　記念特別編！？

朝、いつものように通学路を歩いていると、前を歩いていた四様が言ってきた。

「……ええと、今日はね、大人の事情で文化祭なんだって！」

「……ええと、急にになにかな？四様。今日は十二月十七日だよ？うちの高校文化祭は十月に終わって……」

僕の右隣で歩いている弥生ちゃん（どこか遠いところで冷たく冷静でちよつと怖い感じのする弥生ちゃんになっているような気がするけどそれは全部夢で、気のせい、こことは無関係である。……無関係なんだ。）が、

「そうですよ！もうとおっくの昔に私と四季君との文化祭は終わ

「つちゃってるんですから！」

「そうじゃないよ……まあ、とにかく、昨日まで普通に学校だったし、今日も……」

僕がいい終わらないうちに、隣で歩いていた間宵ちゃんが、

「いや、学校行ってみるよ？多分文化祭やってんじゃない？」

「いや、さすがにそれはないとおもうんだけど……」

僕の言葉を受けて、後ろをついていた夜闇が、

「……おそらく、魔法でも使ったのではないかと」

「……魔法って、あるの？ないよね？」

僕の疑問を夜闇の隣でちょこんと歩いている零ちゃんが、

「知ってるかい、四季？異常発達した科学は魔法となら代わりがないのだよ」

「知ってる、零ちゃん？いくら異常発達した科学でも一日で文化祭にはできないと思うんだ」

ふう、これでいつもは会話が終わって、話しが進……

「いや、この場合の科学は魔法の代替となるほどののだ、一日で文化祭程度できないはずがないだろう！某ジャンプ作品『僕の私の勇者』のようにつ！」

……いや、それは……

「それはギャグ漫画だからだろ！ギャグの一環として、いきなり文化祭になっていた学校のテンションから取り残されてのが笑いなんだよ！」

間宵ちゃん内容を含めた突っ込みを始めた！？知らない人誰もわかんないよ！

「何言ってるんだよ二人とも！落ちついて！なんで『僕の私の勇○学』の話になってるのさ！」

「キミが始めたんだろ！」

「てめえが始めたんだろ！いちいちうるせえんだよ、四季は！『昇竜拳』！浮いたところを『竜巻旋風脚』！」

「ぐぼあ……げぼあ！？」

な、なんて危険な技を……！！

ここだけはいつものように、僕は気絶しました。はい、ちゃんちゃん。

はい、いつもの保健室でございませう！
なんとこの保健室、教室と同レベルで登場場面として多く登場するんですよ奥様！

「……何を独り言言ってるの、お兄ちゃん？」

嘘だ！？心の中を読まれた？

「読んでないよ。……見ただけ」

「それを読むと言わずになんと言っ！？」

四様に新しい能力が芽生えた……だと？

「芽生えてないよ。今日だけ、特別」

「特別？なんで？」

「記念だよ」

「記念？」

よくわからない。

「で、文化祭って言うのは？」

「……なにそれ？文化祭？10月に終わったんでしょ、お兄ちゃん」

「あ、うん、そうだった……ね？」

あ、あれ？確か、冒頭でなんか大人の事情で文化祭って……言っていたような……。

「夢だよ、お兄ちゃん」

ああ、そうか、夢かなんだそうなんだ！ 尺が全然足りないとか、いまさら書くのめんどくさいとか、そんなんじゃないんだ！

……僕は一体何考えてるんだ？

「……おやすみ、お兄ちゃん。……ゆっくり寝てね」

「うんありがと……って、なんで四様が学校いるの？」

話しの中ではいつもいるのでつい忘れがちだけど、僕と四様は二歳離れてる。

だから今はまだ中学生一年生だし、今は中学転校準備中である。

「……大人の事情って、言わなかったっけ？」

「言ったよ！？でもそれ夢だよ！？」

「あれ、まちがっちゃった、てへ♪」

「てへじゃない！」

なんで四様が使ってるんだ、それを！……あれ、なんで使っちゃいけないんだっけ？たしか間宵ちゃんあたりが使ってたような……

？でも、間宵ちゃんがそんな可愛いことするはず

「誰が可愛くねえだこらあああああああああああああ
あああ！！」

[illegible]

ドガー————ン！

保健室の扉を蹴り破って、顔を般若みたいにした間宵ちゃんが乱入してきた！？

僕まだなにも言っていないよ？

「うっせええええええええ！心の中全部丸聞こえだば
かやろおおおおお！うっせんだよさつきからかわい
いの可愛くないの！死にやがれえええええええええ！」

「なんて理不尽な!？」

ライダーキックの体勢になったまま、間宵ちゃんがつっこんできて、僕は死——！

「さません！」

ばつと、急に現れた夜闇がその蹴りを受け止めた！

「大丈夫です、四季様！あなたの身体、操は私が守り、そして私が奪います」

「奪われるの僕!？」

いきなり登場してきて何言ってるのこの人!?

「は！来たかクソメイド！今日という今日は殺してやるぜええええええええええええええええ！！」

「それはこちらのセリフです」

ドガガガガガ！

激戰、
激戰！

がらり。

「四季君、包帯替えにきました……ついでに、一緒にお着替えもして、も、もしかしたら、そ、その先も……って、なんですかこの状況!？」

「四季、僕が開発したどんな傷でもたちどころに直る傷薬だ。学会に発表すればノーベル賞ものだが、今のボクはそんなものよりキミからの賞賛がほしい!賞賛ついでに、……その、こ、子作りとか……。っと、というわけで、くれ!……って、一体なんだ!？」

二人とも、お願いですからもつと欲望をさらけ出すレベルを下げてください。全ての本音がダダもれです。

「弥生!てめえも来たか!夜闇同様消してやるぜ!覚悟しな!」

「それは、私のセリフです。四季様の隣は、私専用です」

「む!聞き捨てなりません二人とも!……本気で行きます!」

「ボクだって今のは怒ったぞ。科学者怒らせたらどうなるか、その身に思い知らせてやる!」

ちよつとまって、みんな、そんな、本気でキミたちが喧嘩したら、学校が……

「あ、お兄ちゃん、私猛烈に家に帰りたくなつたね。そして全ての事象が私の帰宅に手を貸してくれてる。……うん、じゃ、私家で大人しくしてるね?」

……直後に保健室はおるか学校全体が爆発して。

……いつも通りの、日常だった。……これがいつもどおりって、
僕は、僕は……！！

第三十話 記念特別編！？（後書き）

こんにちは！秀句四季です！

今日はお楽しみいただけでしょうか？

楽しめたのなら、ありがとうございます！楽しめなかった方は、ごめんなさい。

ここからは、キャラの紹介に入りたいと思います！

キャラの人に自己紹介してもらいますが、時折ネタばれなどがあるかもしれません。その時は容赦。というか、勘のいい人ならネタに気付く、という程度のもですが。

では、始めます！トップバッターは主人公を務めさせていただきます！
てます、僕です！

「秀句四季です。好きなものは特にありませんが、弥生ちゃんたちの料理だけは金輪際食べたくありません。あ、自殺するときは別ですが。」

ずっと前に両親が死んでしまって、その反動でさびしかったんです。だから、急に現れた三人をすんなりと家に入れてしまった、ということなんです。

名前の由来は、四季を楽しみ、四季の違いを美しく感じれるような子供に育ってほしかったらしく……え、違う？

『好色↓好く色↓（古語辞典）しゅうくしき↓（国語辞典）秀句四季』？

……え、僕つてもとそんなキャラ期待されてたの？ちょ、ちょっと沈んできました……僕の自己紹介はこの辺で……」

……き、気を取り直して、次の方！一番おしとやかで
でも今のところ大変なことになっているフィアンセ如月弥生ちゃん
です！

「え、ええつと、ご紹介にあずかりました、如月弥生、です！辛
いものが好きで、その影響かしてちよつとだけお料理も辛めの味付
けにしています。

体育とか苦手なんですけど、……その、戦いとかは、できないわけじゃ、ないです。

名前の由来は、私が二月二十八日に生まれたから、だそうです。

え、違うんですか？

「なんか中途半端な奴↓行ったり来たりな名前↓（古語辞典・パラ見）二月↓ああそう言えば二月って閏年とかあったなあ……そう言えはその日に生まれた人ってどうなるんだ？↓おそらく三月だと勝手に推測↓如月（二月）弥生（三月）『……なんです、か。』

……なぜか涙が出てきそうです。泣いてもいいです、か……？

え、ええと、弥生ちゃんはおちつと泣いて出てこれないので、次行きましょうか。

ええと、次は僕の頼れる？ 従者さん、十三夜月夜闇さんです！

「（ぺこり）四季様から紹介されました、十三夜月です。好きなものは四季様、嫌いなものは四季様の嫌いなもの、……つまり、私の料理、です……。私の名前は満月の一歩手前、つまり十三夜月を意味し、そして夜闇は……え、違う？」

『月の名前↓満月↓ごろわりい↓（古典の教科書パラ見）月の満ち欠けの名前表↓十三夜月ってかけええええええええええ！』

……？

……ええっと、コノハ、でしたか。作者は。……今から排除してきます。殺してきます。殺戮してきます！どうせパソコンの前に居るのでしょうか！覚悟なさい！」

……ええっと、ちよつとどこかに行ってしまったので、次の方！
……途中で文が途切れなきゃいいけど……

「……心葉零だ。好きなものは研究、嫌いなものは研究所の連中だ。……僕の名前に關してはまだ言えないそうだ。……ふむ、この作品でもまだまだ謎に包まれたキャラだからな。おいしいところは残しておきたいのだろう。気持ちにはわかる。もう長くない作者よ。余生あと幾分か。ま、せいぜい頑張りたまえ」

……なんかいい感じの言葉残して去って行きました。……まあ、明かせない、って言うんなら仕方ないんでしょうね。

では、次行きましょう！僕の妹、秀句四様です！

「こんにちは、いつもお兄ちゃんがお世話になってます！さっそく自己紹介行きますね！私の名前は秀句四様！トランプのガラがヒントらしいですよ！『四季』に合わせたかったんでしょうね！変換が面倒だっていつも呻いてるけど、自業自得ですよ！好きなものはお兄ちゃん、嫌いな人はお金にがめつい人です！では、失礼します！」

……一番自己紹介らしい自己紹介だったね。

……じゃ、時間も押してることだし、そろそろお開きに……

「東堂間宵。好きなものは戦うこと、嫌いな事は……こうやって

無視されることだ」

うわ！いたの、間宵ちゃん……

「私の名前は『どうどうまよい』から。けして八九寺の奴から来たわけじゃねえからな。ちなみに弥生と間宵たまに書き間違うとか作者のバカがほざきやがる……！私は許せねえ。ありえねえだろ！？『ま』、と『や』、ひと文字しか違わねえんだぜ？……ああもう！あの野郎ぶつ殺してきてやる！うがあああああ！！」

……え、ええつと、これで全員、かな？あとはちよつとしか出てきてない脇役さんとか、そんなん。

では、これにて第三十話を終了します！

駄文散文失礼しました！

ご愛読感謝またじk

第三一話　消灯前の兄妹！??

気になっていた。

僕はかめじゃないんだ、変化があれば気付くし、勘づきもする。

でも、確証がもてない。

何か、何かが頭のピースに足りないんだ。

絶対に何かが弥生ちゃんの中で起きている。それが何かがわかれ
ば……

そう、僕が煮詰まっていた時だ。

「お兄ちゃん」

きい、と実に普通に扉が開けられるのに違和感を感じ、ああ、慣
れって怖いな……と思いつつも、

「お帰り」

返ってきた妹に、僕はそう言った。

「ただいま」

どうも全体的につやつやてかてかして、血色は良くなっているん
だけど、どうも気が重いみたいだ。

僕になにを訊けばいいのか困ってる……みたいな、そんな表情。

「なにかあったの、四様？」

そんなこの子の顔は、できるだけ見たくない。ようやくやっと手に入った兄妹同士の生活なんだ、できるだけ笑って過ごしたい。

「……な、なにも、なかった」

でも、この状況で笑えるほど、僕の妹は神経が太くないようだった。

なにもなかったなら、そんな重苦しい雰囲気にはなっていないはずだよ？

「なにもなかったの？本当に？」

「……うん」

あれれ、答えてくれると思ったのにな。意外と答えてくれなかった。

どうも、何か重大な秘密があるんだと、僕は推察する。

「ねえ、お兄ちゃん？」

「なに？」

「弥生さんのこと、どう思う？」

「弥生ちゃんのこと？」

それは彼女が豹変したようになった、ということだろうか？

「……多分、彼女なりの事情があるんだと思うよ。ここではそうしてなきゃいけない、とか」

あ、とっさに出た言葉のわりには筋が通っている。

彼女はこの里では冷静で冷血でいなければならない、とか。意外

とありそう。

「……そう、かも。ありがとう、お兄ちゃん」

「どういたしまして。今日はもう遅いよ。寝よっか」

もうそろそろ十時だ。四様はそろそろ眠る時間なわけだけど……。

「……う、うん」

どうも、歯切れが悪いな。

「どうしたの？」

何かあったのかな？

「……その、お兄ちゃんって、ここで寝るんだよね……？」

「そうだよ？それが？」

「私が誰か、わかってる？」

「秀句四様。僕の妹。ちゃんとわかってるよ？」

本当にどうしたんだろう？

「……したら、知らないから」

「え？」

今なんて？

「……私に手を出したら、知らないから！」

「……は？」

手を出す？

誰に？僕が？四様に？

「……そんな心配してたんだ」
「悪い!？」

いや、悪くはないけど……、その。

「かわいらしいな〜って」

僕がそう言うと、ズササササ……と壁の端まで引いた。
そんなにドン引きするほど危ないこと言ったかな？

「……お、襲うつもりね!」
「襲わないよ!」

なんで実の妹襲わなきゃいけないんだよ!手近なところに三人も
他人がいるのに、なんで!

「……だ、だって、かわいらしいって」
「君の中ではかわいい」襲うなのか!？」

恐るべきことに、四様はうなずいた。

……そう言えば四様、昔は可愛いものがあつたら飛びついて日が
暮れるまで抱きついたり頬ずりしたりしてたなあ……。

「……まさか、あれがまだ治ってない、とか？」
「病気じゃない!」
「あのレベルまで行くと十分病気だよ!」

「な……!お兄ちゃんこそ、美少女5人もはべらせといて誰にも
手出ししないなんて病気じゃないの!？」

「なんで今数に自分を入れたんだ!？襲われたくないんじゃないかな

ったのか!？」

「それとこれとは別よ!」

「別なの!？」

四様には驚いてばかりだよ!

「……何言つてんのよ、私たち」

「ほんとだよ。兄妹で何言つてんだよ」

ほんと、兄妹で好きだとか、愛し合うとか、ありえない。そんな兄妹がいたら連れてきてほしいよ。

「……なんか、とっても身近にいる気がしてきたわ」

「奇遇、僕も」

なんでだろうね？

「……ま、いいや。布団は敷かれてるし。あとは寝るだけだね」

「……うん」

今日は長い間移動があつたし、もう僕は疲れていたので、布団に入る。

「……お、襲わない……?」

「襲わない襲わない」

僕が念押ししてくる四様に軽く答えると、ようやく信用したのか僕の隣の布団に入った。

……どれだけ信用されてないんだ、僕は。

「……おやすみ」

「おやすみ、お兄ちゃん」

僕は電気を消した。

第三十二話　闘技大会！？

「お兄ちゃん……起きてる？」

暗い部屋に、か細く、確認するような声が響いた。

「起きてるにきまつてるでしょ。電気消して二秒も経ってないよ？」

なんか調子が狂う。いつもの四様はもっと堂々としていて、力強い。それなのに今の四様はとても弱気で、頼りなかった。

「……お兄ちゃん、私ね、明日……戦うんだ」

「何それ、聞いてないよ」

四様が、戦う！？

一体だれと！？どうやって！？

「……私、なんだかこの里の人たちに示さないといけないみたい。

……お兄ちゃんの近くに居ていいのかどうかを」

「そんなの示すまでもないよ。君は僕の近くに居ていいんだ。いいんだよ」

何をこの里の人達に吹き込まれたんだろう？僕のそばにいていいかどうかなんて、誰かに許可を取らないといけないなんて今までこの子は言わなかったのに……

何考えてるんだ、この里の連中は！？四様に戦わせる！？どうせエキスパートをぶつけてきて四様をつぶすつもりだろう！？こんな

女の子を虐めてなにが楽しいんだか……

「……それでね、私、勝とうと思う」

「……どういうこと？」

僕の記憶が正しければ、四様は武術の類は一切やっていないはずだ。喧嘩は確かに強かったけど、それでも運動は苦手な方だった。

「……私、勝ちたい。勝って、弥生さんになにが起こってるのかわりたい。……知らないや。友達、なんだから」

友達。

弥生ちゃんの控えめな笑顔が頭をよぎる。

「……僕も、頑張るよ」

「うん」

きつと僕はなにもできないんだろう。でも、見守って、応援するぐらいはできると思う。

絶対に、弥生ちゃんを元に戻して見せる。

僕は誓って、目を閉じた。

隣では、四様の寝息が聞こえていた。

……次の日。

僕は起きてすぐにこの里の領主に御目通しをされることになった。

「……ふむ、弥生の許嫁か」

「はい、そうです」

淡泊で簡潔な物言い。

これがあの弥生ちゃんだなんて、一体だれが信じれるのだろうか。

「……ふん、まあいい。わしの名は睦月。如月睦月なり。この如月戦闘術の長よ」

莊嚴と厳格さをまとった声色で、堂々と名乗りあげる睦月さん。

「僕の名前は、秀句四季です」

「私は、秀句四様です」

僕と四様が自己紹介。

「……東堂間宵だ、です」

一瞬ため口を利きそうになって、言いなおす間宵ちゃん。

「十三夜月夜闇です」

「……十三夜月？」

睦月さんの隣に居る純和服の切れ目の女性が、夜闇の名前に反応した。

「はい、私は元『月』の住人。今は四季様にお仕えさせていただいております」

夜闇の返答が何かまずかったのか、その女性は睦月さんに何やら耳打ちをすると、元のたたずまいに戻った。

——何を言っていたのだろうか？

「ボクは心葉零」

睦月さんほどではないにせよ、かなり堂々と言い放った零ちゃん。子供っぽい外見とは裏腹に、何やらすさまじいオーラを感じる。

「……ふむ、よくわかった。……四季殿は顔に似合わず、色好みなのだな」

「違います！」

全然わかってない！僕をそんな女コマシみたいすけに言わないでよ！

「ぬはは、冗談だよ」

睦月さんはそう快活に笑うと、指を鳴らして周りの人たちに何かを指示する。

「お主たちに来てもらったのには二つ、理由がある」

ががが、と睦月さんと女性の間の畳が割れて行き……いや、その後ろの空間も割れてる？一体何が……

「一つは、四季殿が従えているその女性たちに弥生と並ぶ資格があるかどうか」

ああ、そうか。割れてるんじゃない。開いているんだ。
カパリとさながらドールハウスのように家が開き、外が見えるようになった。

「もう一つは。」

如月戦闘術史始まって以来の伝説、如月弥生の実力を……四季殿に見せたくてな」

その開いた先にある外に広がる光景は、まるで闘技場のようだった。

中央に位置する一辺20メートル、高さ1メートルほどの正方形の土台。

その周りを十メートルほどを囲う芝生の地面。

そして、全体を囲うようにしてある、観客席。

観客席は満員御礼で、立ち見をしている人までいるぐらいだ。

「如月戦闘術は世界に名だたる流派。故に、このような公式性のない試合でも、こうして人が集まる、というわけじゃ」

すでに――土台（以降はリングと言おう。ロープこそないがそれにしか見えない）にはもう人が二人上がって、戦闘を繰り広げていた。

斬る。切る。防ぎ、返す。それをかわして、反撃。

武道に関して素人な僕が表現できるのはこれだけであとは一瞬一瞬の連続。

このリングに妹や間宵ちゃんたちが上がるのはわかっているのだが、こう思ってしまった。

きれいだ、と。

こうして全ての技術を持って、戦う。それはとても洗練されていて、無駄がない。その動作一つを取ってみても、美しい。

「……すげえ……！すげえよ！四季もそう思うだろ！？」

そして、暴力女こと間宵ちゃんも、僕とおんなじことを思っていたようだ。

「……さ、控室へ向かうがいい。お主らの試合は最初の方だ。……
よもや一回戦で負けるなどということは……あるまいな？」

その問いにみんなは、

「おうよ！」

「当たり前です」

「フン、当然だろうな」

「当たり前よ」

と、頼もしい返事をしたのだった。

……いろいろ不安だなあ……

第三十三話 いきなし準決勝！？

トーナメントの二十回戦。

参加条件はなし。

準決勝までは一試合3分で、降参させるか、気絶させるかすれば勝ち。殺しはご法度。

武器、魔法、何でもアリ。

……とまあ、ルールを簡潔に説明すれば、こんな感じ。

僕は殺し合いのようなドロドロとしたものを想像していたのだけれど、意外とクリーンで安心できた。

これで死ぬ、なんてことないだろうから。

でも、それでも。

みんなが戦うっていうのに観戦しかできない悔しさは、消えるどころか薄れもしなかったけど。

戦闘は苛烈を極めた。

……らしいんだけどね？

いや、正直僕の認識が甘かったとしか言えないよ。

なんにも見えないんだもん。コメントも描写もしようがないって言うか……

まあ、里の人たち同士の戦いなら、ぎりぎり見えるんだけどね？

間宵ちゃんとか弥生ちゃんとか夜闇とか零ちゃんまでもが僕の、いや一般常識の認識のおよばないレベルになっていて、戦っているのかどうかもわからないくらい。

……手加減されてたんだな……ってつくづく思う。だからと言って感謝なんかしないけど。そもそも一瞬で人を半殺しにできるような力でなんの訓練もしてない一般市民（僕のことである）殴るなよな……

「ふむふむ、なかなか……」

睦月さんはそんな彼女たちを見てもなかなかどまりのようだ。

「そうですね、なかなかやりますわね」

その隣の純和服の女性、睦月さんの奥さんである如月卯月さんが

少し残念そうに言った。

「けれど、弥生が一番です」

自信に満ちた声で、卯月さんは言った。

よほど弥生ちゃんの実力を信じているのだろうか。いや、きっとそうだろう。でなければ……こんな言葉は出てこない。

そう思っているうちに、放送が流れ、次の試合の開始を告げる。

準決勝。

十三夜月夜闇と、心葉零。

二人の戦闘が今、始まろうとしていた。

「……やれやれ、暴力女と当たらなかったことを幸運と喜ぶべきか、キミと当たったことを悲しむべきか……。夜闇、キミはどうだい？」

不敵な笑みと共に夜闇に語りかける零ちゃんに、夜闇はため息一つついて、

「あなたとだけは戦いたくなかったのですが……これも運命、ですか」

氷のような表情をわずかに嫌そうにしかめながらつぶやいた。

「運命？それは四様の得意分野だろう。……ま、異常な運の良さは認めるが……弥生に当たってしまつことを鑑みれば、特殊能力というほどのものでもあるまいがね」

そう、四様は14回戦までは全て不戦勝で勝っていた。
でも、15回戦目で運悪く弥生ちゃんとあたり、戦闘開始と同時に降参するしかなかった。

……たしかに、零ちゃんの言うように、少し疑問に思うところもある。あるけど、14回も不戦勝してれば、それは十分特殊能力なんじゃないだろうか……？

「確かにそうだったとしても、私にはそのようなこと、まったく興味ありません。今私がしたいのは、あなたを打ち倒すことです、零さん」

「おや、キミとボクの意見が合うとは、これはまた珍しい偶然があったものだね？ボクだって今すぐにでも弥生と勝負し、勝利を収め、四季に褒めて……いや、四季が一体自分のために動いてくれた人間にどう反応するのかが知りたいのだ。無駄話は置いておき、始めようではないか」

「ええ」

今一番僕が頭を悩ませていたのは、これだった。

四様を除くみんなが、ノツリノリで戦っている。
まるで心配した僕がバカみたいだ。

まったく……みんな好きだなあ……

戦ってもいいことなんて、ないのにね。

「では」

「うむ」

白い髪 of 科学者と、黒い髪 of 従者。

武闘派と、頭脳派。

本来なら絶対に相まみえるはずのない組み合わせの二人が、**激突**する。

第三十四話　夜闇VS零！??

静かな戦闘開始。

夜闇が零ちゃんに向かって真つすぐに向かい、メイド服のどこに隠していたのかごついナイフを取り出して切りかかる。

「ふん」

それに対して零ちゃんはなんのアクションを起こさなかった。よけることも、うけることもしなかった。

しかしそれでも、夜闇の攻撃は零ちゃんに届く前に、まるで見えない壁が阻んでいるように止まっていた。

「なんですか、これは？」

「NO・642『プロテクト』。物理攻撃をほぼ無効化する。：

まあ、試していないが核攻撃の衝撃には耐えられる設計だ。……放射能は防げないがな」

いや、それだけ防げたらもう十分でしょ！？

「ああ、そう言えばあなたは科学者、でしたね」

「そうだとも。他にはこんなものもあるのだぞ……くらえ！」

白衣から取り出したのは、拳銃。……拳銃！？

「おいおい、零ちゃん、それじゃ殺しちゃう……」

ここからだと思えないとわかっているのに、僕は言わずにはいられなかった。

ぱあん！

軽い音と一緒に吐き出された、ワイヤー付きの銃弾。速度はゆっくりで、それほど速くはない。それでもメジャーリーガーが投げたボールの球ぐらいの速度はあるけど。

それを夜闇はなんてことない動作でよける。

「なんですか？このようなおもちゃで……」

「ふむ、『スタンガン』でもだめか」

口上を無視し、拳銃をすぐに捨てると、今度は白衣からナイフを取り出した。

カチリ、と零ちゃんが柄にあるスイッチのようなものを押すと。

[illegible]

すごい高周波の音が、闘技場中に響き渡った。

こんなに離れているところからでも十分耳に痛いのに、近くに居る夜闇はもつとうるさいだろう。

「……なんのまねです？音で攻撃ですか？」

まったく意に介さない、といった風に零ちゃんに訊く夜闇。え、うそ平気なの？

「ふむ、これでもだめか？自信あったのだが……。まあ、いい！NO・235『ソニックナイフ』！」

叫びながら、零ちゃんは高音を発するナイフを夜闇に突きつけ、突進する。

「いくら強い武器兵器を身につけようとも、やはりあなたは素人ですね。『十六夜月十字』」

零ちゃんは思い切り振りかぶり、渾身の一撃を夜闇に繰りだすが、ナイフが夜闇のいたところに届くころには、彼女はもういなかった。どこに行ったのか、と零ちゃんが確認する前には、夜闇は零ちゃんの後ろで、その白い首筋にきらめく刃を突きつけていた。

「……そのナイフ、なんですか？」
不思議そのもの、といった風に夜闇が訊く。顔は無表情のままだけ。

「刃を高速振動させて切れ味を上昇させたナイフだよ。まあ、ありていにいえばチェーンソーを小型化したもの、かな？」

その答えを訊いて、夜闇はしばらく考える。

そして。

「ここで降参して私にそのナイフを譲るか、ここで死ぬかを選ん

でください」

まるで当然であるかのように、降伏の次に自分の要求を告げた。

「やれやれ。この状況で選べもないだろう？降参だよ。こいつは少々ボクには身に余っていてね、ちよつどよかったよ。末永く、よろしくね」

「了解しました」

零ちゃんはナイフのスイッチを切って、高音を止める。

勝者、十三夜月夜闇――。

決勝進出だった。

第三十五話　弥生と間宵

準決勝、もう一組は弥生ちゃんと間宵ちゃんだった。予想はできていたし、多分こういう組み合わせになることぐらい僕にだって見えていたよ。

……でも。

この二人は、他の参加者とは格が、核が違った。

弥生ちゃんは驚異的な技術と戦況を読む力で。

間宵ちゃんは純粹に圧倒的な暴力で。

それぞれ、勝ち上がってきた。

二人が、リングに上がる。

「……よお、弥生」

「こんにちは、間宵さん」

片方は敵意むき出しに。片方は感情が消え去ったかのように冷静に。

「……さあ、弥生、話し合おうぜ。……私ら流にな！」
「ええ、話し合いましょう。話し合いましょう」

しばらく、無言。僕ら常人ではあずかり知らぬ会話を、二人はし

ているみたいだった。

「行くぜ！」

沈黙を破ったのはやっぱりと言っか、間宵ちゃんだった。
闘気をまとわせることのない、純粋な拳。

それを無言で横に受け流すと、弥生ちゃんは脚払いをかける。

「は！またかよ！そう何度も食らうかっての！」

軽やかに跳んでよけると、いったん距離をあける。

「それにしても、昨日もバトったところなのにまたお前と戦ってんだからなあ。そう言えば最近バトってばっかだな？そう思わねえか、弥生？」

「そうですね。その大半はあなたのせいですが……！」

言葉の途中で弥生ちゃんは間宵ちゃんに突進し、手刀で首を薙ぐように振る。

もちろん間宵ちゃんはよけるけど、もし当たっていたらあれ、死んでいたんじゃないだろうか？

「は？知らねえよんなこと。つつか今私らバトってんのは間違いなくお前のせいだよな、弥生？」

「それほど戦いが嫌なら彼の前から消えたらいいのでは？使えない戦士はただのクズですよ」

辛辣に言う弥生ちゃんは、悲しそうなんだけど、表情には出ない。

「はあ？私が戦士い？私はただの女子高生だよ！いつ私が戦士になった！」

「闘気をまとえてこの里の人間に余裕で勝てるただの女子高生がいてたまりますか」

「だから、私は高校生だつての」

「なぜそこまで頑なに否定するのですか。あなたらしくない」

「てめえがそれ言うか？自覚してんのか？自覚なしか？天然か？」

言い合いながらも、拳と脚は激しくぶつかり合い、競り合い、いつしかその勢いは命を研ぎ澄ますようにだんだんと速く、強くなつていった。

それと同時に言葉の強さも純粹に攻撃力を増していった。

「ええ言いますよ。普段のあなたなら笑って肯定するぐらいのこととはしたでしょうに。……彼がいるからですか？」

「はあ！？もつとわかんねえし！なんで四季がいるからって私がそんな殊勝にならなきゃいけね」

「私は『彼』と、言っただけです？」

「——！！？」

顔を真っ赤にして、心なしか攻撃の勢いがました間宵ちゃんは大きな声で否定する。

「ふざけるな！私の知り合いで男つつたら四季しかいねえだろ！てめえはどうなんだてめえは！四季のことがさんざ好きだとかぬかしやがって、勝手に部屋上がり込んで！そのわりにやずいぶんとあいつに冷てえじゃねえか！ああ！？学校でのお前は可愛子ぶりっこだったってか！？」

「違います！私は、私がこうなったのは仕方のないことで、あれは別に可愛子ぶっているわけではありません！」

「必死に否定するじゃねえか。凶星かこの野郎！」

闘気をまとわせた必殺の一撃。それをかわしてカウンターで心臓を狙った拳を放つ弥生ちゃん。

「つぶねえ！殺す気か！」

「それもいいような気がしてきましたよ。そう言えば私とあなたは、恋敵、でしたね！」

「違い！私は別にあいつのことは好きでもなんでもねえ！」

「何でもないならなぜこんな辺境にまでついてくるのです！せめてあなたの存在がなければ幾分かやりやすかったものを！」

「は！ずいぶんと暗え考え方だなあおい！そんなことだからいじめられんだよ！」

攻撃をかわしつつ、二人はどんどんどんどんヒートアップしていく。

「いじめ？違います、私が我慢してあげていたのですよ！」

「は！私だったら死なねえ程度に痛めつけるけどな！それもできなかったのかよ！」

「私はあなたではないのです！手加減なんてまだるっこしいことをやってられますか！」

「てめえとことん極端だな！殺すか無抵抗かのどっちかしか選べねえのかよ！」

「そうすることしか知らないのですよ！」

互いの衣服はボロボロ、裂けた皮からは血が滲みでて、二人はも

う充分に疲弊していた。

でも、互いに一步も譲らない。

一切も一瞬も手を抜かず、戦っている。

「いいですか、私はこの里に生まれました。如月の名を背負うために生まれました！期待にこたえるには戦う術が必要不可欠だったのです！そしてそうやって戦って戦って戦い続けて、気がつけば殺すかそうでないかの二者択一しかできない頭になっているのです！武器を取れば全て反射で動くから、絶対に手加減なんてできないのです！戦うたびに血に濡れます。戦うたびに汚れます！その度その度に、私は普通の生活ができなくなっていくのです！

あなたにこの気持ちがわかりますか！？

じゃれあいすらもできない、そんな私の気持ちが！手加減ができるあなたをどれほどうらやんでいるか、わかりますか！？

気軽になれあえるあなたたちがどれほど恨めしいか、わかりますか！？」

「わかるかよんなもん！」

今までで一番大きな闘気の塊が弥生ちゃんに命中し、弥生ちゃんは吹き飛ばされる。

仰向けの状態からすぐに起き上がり、膝をついた状態にまで立て直すけど、そこからは立たない。

……いや、立てない、かな？

「血に汚れてる？手加減ができない？んなこと私に言っな！誰に

も言つな！そんなの私らに言つてどうすんだ！これからはずつとてめえに気い使えつてか！？ふざけんな！甘えんじゃねえよ！」

「でも！私は、それでも」

「『でも』を言ふんなら、もとに戻つてからにしやがれ！」
「！！」

間宵ちゃんの、一喝。

「てめえほんと弥生じゃねえだろ？わかんだよそれぐらい！私は格闘家だ、一度戦つてその次に太刀筋全然違つたら馬鹿でも気付く。……ああん？どうしてそうなつたんだよ、てめえはよ！」

弥生ちゃんが、別人？それってどういう……。

「いいか、私はてめえが人格二つあるうが三つあるうが気にしねえ。でもな！ウジウジされるぐらいだったら相談に乗られた方がまだマシだつつの！」

「でも、さつきは誰にも言つなつて」

「てめえは愚痴と相談の判別もできねえのか！愚痴はごめんだが相談ならいつでも受け付けてやるつてんだ！ああん？どうすんだよ弥生！」

弥生ちゃんは、信じられないものを見るように目を見開いていた。

「……こ、降参します。だ、だから……」
「だから、なんだよ？」

そして、ぎゅっと胸の前で何かを決意するように手を握ると……

「だから、相談に乗ってください」
「わかったぜ。……しゃーねーな」

照れくさそうに間宵ちゃんが言うと、準決勝は終わりを告げた。

勝者、東堂間宵――

決勝は、もうすぐ。

第三十七話　決勝！そして！？

「……たく、なんでてめえと戦わなきゃいけないんだよ、夜闇」

「いえ、戦う必要はありませんよ？」

「は？」

「降参します」

「……マジで？」

「マジです」

そんな情緒もへったくれもない会話だけがかわされ、この如月の里主催の格闘大会は終わりを告げた。

あとは、帰るだけ……だと思う。

「……私は、この里に生まれました」

まるで悪役が最後の締めに関の出自を語るように、弥生ちゃん自身は自身の身の上を話し始めた。

あまりにもあっさりとした決勝の後、表彰式を終えて、如月の長二人からおほめの言葉をいただいて、自室に帰って、しばらくした

後のこと。

さっきまでの愚痴のようなものではなく、純粹にどうすればいいかを、僕たちに訊きたくて話しているようだった。

「でも『私』は優しすぎたのです。攻撃一つにもためらいを見せる、そんな優しい子供だったのです」

でも弥生ちゃん、祖父母の屋敷でも、学校でも、結構暴れてたよ
うな気が……。

いや、きつと気のせいですよ、はい。

「でも、戦わなければいけなかった」

そんなことよりも、ついさっきされた衝撃の告白についてはみんな突っ込まないのかな？

「……ふうん、血に染まらなきゃいけない運命、ってやつか」

うん、そこだよ、そこ。なんでみんな納得してるかな？ここ日本だよ？人殺しはいけません。

「実戦訓練は、外国でやっていましたから……日本の法律には触れないと思います」

「触れなきゃやっていいってわけじゃないよ！？」

すかさず突っ込んでしまった……けど、うん、これは仕方ないよね？

「……殺さなければ、殺されていたのです。正当防衛です」

……これ以上突っ込んだら日本の法律に大いに引つかかる気がしてきたので僕はもう突っ込まないことにした。確かに人殺しは悪いことだけど、うん、その、もう過ぎたことだし。これから先しなければいいこと何じゃない、かな……？

「……………殺すには、覚悟が必要です。しかし、『私』は覚悟を決めなかった。だから、別の誰かに肩代わりしてもらうことを祈った。願った。その結果が、私です」

「二重人格、ってやつか？」

「ありていにいえばそうなります」

弥生ちゃん（これから今は今の彼女のことを裏と言おう）は自分が作られた存在だと言うのに、意外とけろっとしている。

「私ですか？『私』の願いは私の願い。『私』が私に汚れると言うのなら、いくらでも汚れてあげますよ。……それに、戦うのは嫌いではない、ですしね」

……ええと、ここ一番の笑顔でそんな怖いこと言われても……反応に困っちゃうな、僕。

「……ふむ、おそらく戦闘するための人格なんだろうな。だから戦うことにかんする物はなんでも好みになる。……つまり、今のキミは戦闘嫌いの四季があまり好きではないだろう？」

「はい」

即答……。

「……と、言っても好きではない、だけです。『私』の記憶を引き継いでいるのであなたへの想いは覚えていますが、私は戦いを好まない武士らしくない殿方は苦手です」

はつきりと言われちゃったよ。……好きな記憶を持っていたてもなお嫌いだと言われる僕……。

そんなに男らしくないかな？たしかに武士らしくはないだろうけど……。

「で？どうすりやてめえはいなくなんだ？」

「いなくなりません。……しかし、私がいると言うことが『私』を困らせていると言うのもまた事実。……どうすればよいと思います？」

やつと、本題に入った。

……つまり。弥生ちゃん（裏）はいなくならないけど、このままだと弥生ちゃんが困るからなんとかしてほしい、ってわけ……かな？

「……難しいな。……ま、でもなんとかかなんたる。ちょっとこっちこいや」

「え？」

驚く僕に気にも留めず、間宵ちゃんは弥生ちゃん（裏）を連れて隣の部屋に……。ど、どうして？

「……ほっとけ」

そう言つと、昨日と同じく、二人は自分の部屋に消えたけど……
なんか意味合い違うような？

「……ボクはしばらく、そうだな、二時間ほどここに居ることにする。そっち方面はまだ、ボクには早いと思うからな」

「わ、わたしはしばらくと言わず、もう今日は絶対にあっちに行かない！……食べられたらいやだもん」

ふたりとも……何を言っているのかな？

あはは、全然わからないなあ……わからないよ……。わかってたまるか！

「……四季様」

「夜闇」

ふつと、後ろから夜闇が僕の名前を呼ぶ。

見慣れた光景からか、四様も零ちゃんも特に何も言わない。二人で姦しく会話を楽しんでいる。

その会話はどこか遠く、まるで別世界の様。

まるで僕と夜闇だけが空間から切り離されたような気さえる中、夜闇は言った。

「ご命令、完遂いたしました」

「……ごめんね、夜闇」

僕はまず夜闇に謝る。

「いえ、命令の変更に少々戸惑っただけです。特に不満には思っていないんですが」

「……それでも、頑張ってただろう？それなのにいきなり『決勝

戦で降参しろ』なんて……」

「構わないのです。私はあなたの従者。従者とはただ従うにあらず。主人が間違っているのなら、正すのが役目。」

……しかし、今回私は四季様に間違いがあるとは思いませんでした。よって、従ったままです」

「……それでも、ごめん」

僕はもう一度、深く頭を下げた。

「……四季様、頭をおあげください」

「でも」

「私は命令を完遂したのです。……謝られるよりは、その「なに？」」

何かしてほしいことがあるのだろうか？それなら、僕にできることなら、なんでもする。

「褒めてください、四季様」

そのあまりにもかわいらしい頼みに、僕はつい頬が緩み、

「いいよ。ありがとう夜闇。よくやったね」

その雰囲気流されるまま、頭をなでてしまった。

「……………」

一瞬夜闇は感極まった表情をして、でもすぐに無表情に戻った。

「ありがとうございます。これからなんなりとご命令を……………」

そう言った夜闇が言った瞬間。

「で、だな、その理論を完成させた暁には、全ての人間が等しく人間を愛するようになって……………」おや、どうした四季？」

「どうしたの、お兄ちゃん」

ふっと、二人の会話が急に近くなった。

……いや、今までが遠かったのだ。

……一歩も動いていないはずなのに……どうして？

「あ、いや、なんでもないよ」

「そうか」

「そう。……じゃあさ零さん、これは――」

……きっと、弥生ちゃんのことば間宵ちゃんがなんとかしてくれる。
相談を受けて引き受けたら絶対に解決するのが間宵ちゃんなんだ。

だから僕は、座って待ってしよう。

また、平和な日々が戻ることを確信して、僕は目を閉じた。

こてんと、畳が頬に当たる感触がする。

ああ、いい気持ちだ……

く――………――

第三十八話　ライバル登場！そして帰宅！？

「……………帰りましょう」

……………どうしたのかな？そんな風に顔を赤くしてもじもじしながら
なんでそんな風に恥ずかしそうに言うのかな？

「うし、四季。さっさと帰るぞこんなところ」

心なしの間宵ちゃんはさっきよりも肌のつやがいい……………というか
なんかすっきりとした感じだった。

……………まさか、たべちゃったんじゃ……………

気のせいだ。妄想だよ。そんなの、間宵ちゃんがするわけが……………

ありそうだけど、ないことにした。

「そうだね」

なにも知らないふりをして、僕は言った。

少しだけ、時間は戻る。

「……なあ、弥生」
「何でしょう」

弥生は布団に入って、間宵はその隣で腰掛けている。弥生は少しぐったりとしていて、間宵は少し疲れているようだった。

「この里って、一体何なんだ？ 嫌な空気が満ちてるし、変な感じもする。……なんか、気味悪い」

弥生は驚いたように目を見張り、弥生の顔を見る。
ちなみに、その表情は迷いもはつきりと見えた。

それは暗闇に目が慣れていたからなのか、互いの距離が近いからなのか。

「よくわかりに」

「もったいぶらずに教える」

少し強く言うと、弥生は簡単にうなずいた。

「……特に、何もありませんよ。あえて言うのなら、『この里』と『この里以外』では、空気が違うのです。……世界が違う、とも言えますが」

「ふうん」

なんてことないように、間宵はつぶやく。

弥生にはこれ以上訊いてきても教える気などなかったし、間宵はそれだけ知れたらもう十分だった。

「間宵さんは……どうしてこのようなことを？」

「このような、って？」

いたずらっぽく訊き返す間宵はほとんど男のようだった。

「その、『私』を気を使って封印する、などと……そんな芸当、よほどの武芸者であつても、できるとは思えません。……これはもはや、祈祷師の領域です」

「んなもん大丈夫だよこれぐらい。ちょっとした余技つてやつだ。こんなの技のうちにもはいねえって」

弥生は恥ずかしそうに顔を伏せた。自身が感心したものが、使う本人にはまるで価値がないかのように言う。弥生にはそれが、自身の武芸者としてのそこが相手に知れたように感じれて、恥ずかしか

ったのだ。

「……ということは、このような時は、いつもしているのですね？」

「……ま、そういうことになんな」

「……ほかにこれをしたことがある人は？」

「言うなよ？」

「はい」

「……一人だけ」

「は？」

一体何を言われたかと、一瞬弥生はわからなかった。

「お前とあと一人だけしか、これをしたことがねえ。……まあ、実用レベルじゃねえから、技のうちに入んねえんだよ……その一人つてのがな」

少しだけ悔しそうに、間宵はその名前をつけたした。

「……四季の野郎だ」

四季の過去に何があったのか、つい想像してしまう弥生（裏）であつた。

時は戻る。いや進む。

「つゝかゝれゝゝたゝゝ！」

間宵ちゃん部屋に戻るなり叫んで寝ころんだ。

「そ、それは、あんなふうなことすれば誰だって疲れます!」

このままもとに戻らないんじゃないか、と心配していた僕だったけど、その心配は杞憂に終わったようだ。

里を出たとたんに『あ、あれ?』みたいなことを言っていたものの弥生ちゃんに戻ったのだ。

それから行った時と同じように師走さんに乗せてもらって、帰ってきた。

師走さんは僕らを送ると『じゃな、若いもんは若いもんらしく過ごすんじゃない!』と豪気なことをおっしゃってから帰った。

「ほんとによかったよ、君がもとに戻って……」

「……四季君」

悲しそくに、弥生ちゃんは言った。

「……な、何?」

僕は何かまずいことでも言ったのだろうか?

「『私』は私です。あの『私』も間違いなく、私なんです。……だから、まるで『私』のことをその、害悪みたいに、言わないでください……」

「あ……ごめん」

素直に謝る。今のは僕が悪かった。

いくら弥生ちゃん（裏）は無表情で無感情でも、弥生ちゃんなの

だ。あんまり否定したらいけない。

「……いいんです。それよりも……」

そう言つて、弥生ちゃんはい長い前髪を振り、僕らの前に入る。隠れた瞳からは、今にも泣きそうにうるんだ瞳があった。

「ありがとうございます……！これで、私みなさんに隠し事、しなくていいんだ、って思うと……」

「弥生ちゃ」

僕は何かを言おうとした。

何だつたんだろう？

偽善に満ちた、意味のない言葉だったのかもしれない。
優しい嘘に満ちた、優しい慰めの言葉だったのかもしれない。

でも、それは今の彼女には、よくないんじゃないか？
今、僕が、僕たちが言うのは。

「……どういたしました」

みんなが同時に口を開いて言う、どういたしました。

「さ、キッチンの修理をして、明日から元気がつこ、……うっ」

みんなで一緒に部屋に入る。

……穴があいて青空が見えていたはずのキッチンが、きれいに治っていた。

いや違う、直っていた。

「ああ、秀句さん？昨日ガス爆発あったみたいでね。しちゃいけないミスを向こうがやらかしたらしくてね、無償で修理させていただきます！なんて言っちゃって、しかも仕事もすごく早かったのよ？よかったわね、怪我なくて。じゃあね、秀句さん」

下の階の大家さんから、そんな言葉が聞けた。

僕はおそろおそろ自身の妹を見る。

すると、僕の妹、神様の運を持つ少女はそっぽを向いて、そして逃げれないと悟ったのか、舌を出して、

「……てへっ」

「てへっ、じゃな〜〜い！また力使ったのか！？それもなんて無茶苦茶な……」

まさか一日でここまでできるとはいくら僕でも思わなかったよ！？

「……まさか、あの時不戦勝にならなかったのは、このことを祈っていたからか？ならば、本物、か……？これほどまでとは、思いもしなかったぞ」

零ちゃんかなりびっくりしていた。

「……ま、いいんじゃない、お兄ちゃん？どうせ修理しなきゃいけないったんでしょ？タダで修理なんてめったにできないんだし、よかったじゃん！」

「……まあ、うん」

……ああ、ここでうなずいちゃう僕大概だよな。

あんまり四様には世界は自分の思い通りになるって思ってたほしくないんだけどなあ……。

「じゃ、明日は早いし、今日は疲れたから、早く寝よっか？」

「そ、そうそうそうそうだね！……うん、そうだね？」

「では、今日の夜のご奉仕を……」

「では、男性の身体を研究しようか」

「お兄ちゃん、私と一緒に寝よ？」

びく！

僕は震えた。異常な殺気が、僕の後ろで発生したから。

「……な、何かな、間宵ちゃん？」

僕は悪くないよ？聞いてたよね、今の会話？ボクナニカワルイコトシマシタカ？

「てめえの存在が悪だよ！そんなに早く寝てえなら寝かしつけて

[illegible]

「うわあああああああああああああああああああああ
ああああああああああ！！？」

おやすみ、みんな。

第三十八話、ライバル登場！そして帰宅！？（後書き）

第三十八話　暗闇の中での！？

そ……。と微かな衣擦れのような音。

??

??草木も眠る丑三つ時。

??……と、いけないいけない。微かな音も今は立ててはいけません。
??

??なぜなら、私、如月弥生は絶賛夜這い中なのです！
?

??『私』にそそのかされた、と言うのもありますが、それよりも
間宵さんにあんなことをされたから、というほうがわりかし多いです。
私はもう、ここの誰にも隠し事をしなくていいのです！

??それに、ライバルが四季君を狙っている以上、私は先手をうた
ないといけないのです！

??……あ、四季君のお布団につきました。会って四日も経ってい
ないのに、この人はスヤスヤと私達を警戒することなく眠っていま
す。

??戦いに身を置いていた私や『私』にはこの無防備さが不思議で
たまりまん。

??だって、こうして唇同士がひつついちゃいそうな程近くにいろ
のに、起きる気配も感じられない、なんて……殺してくれと言っ
ているようなものです。

??「……いただきまー……す」

？

？？小さく呟いて、私は四季君の唇を――

？？ギリリ

？？「……弥生さん？」

「な、なななんですか？」

いつの間にか、私の首筋にはきらりと光るナイフがひとつ。それもこれ、刃をつぶしていないから普通にこれ引かれたら私死にますよ？殺す気ですか夜闇さん？

「何ですか？それは私の言葉です。なぜ四季様の寝所に侵入しようとあなたは画策しているのです？」

「それは、私が四季君のことが好き、だからです」

「好きならば何をしてもういと言っことにはなりませんよ？」

むう。正論を言われて少し黙る。

「じゃあ夜闇さんはなんでここにきてるんですか？まあ、どうせ私の気配を感じたとかそんなのでしょうけど」

「添い寝をさせていだきたくて」

「同じ穴の貉じゃないですか！」

ちなみにこの会話は四季君に聞こえたらまずいので本当に小声で

す。

「違います。私は従者、あなたは他人。その違いがあります」

「ほとんど変わらないですよ!？」

あれ、夜闇さんってこんなにお茶目な人だったかな？

「……それにしても、いきなり夜這いをするとは思いませんでした。私たちの中では一番常識人だと思っていたのですが」

四季君に絶対服従の夜闇さん。研究好きの零さん。それから戦闘狂の間宵さん。

……あれ、この状況でも私が一番常識人だと胸を張って言える気がするのはどうしてだろ……？

「と、とにかく、今日はもう寝ましようか、夜闇さん」

「ええそうですね」

話を切り上げるため、私はそう言いました。

警戒させないためにも自分から布団に戻ろうとして……

ヒュッ

キラリ

「……むう。二人とも、故事成語の漁夫の利と言うものを知っているかい？誰かと誰かが争っていて、第三者がその利益をかすめ取る、というものだ。元となった話では動物相手だからうまく言ったのかもしれないが……人間同士ではうまくはいかないものだね?」

「それは自分のことを言ってるのですか？」

布団に入っただころを見計らって、零さんが自然な動作で四季君の布団に這入ろうとしました。もちろん拳で威嚇して止めましたけど。

「そうさ。軽い自虐のようなものだよ。……しかしだね。よくよく考えてみたまえ。ボクはの場合また新たに争う側になるのかな？ いいや、違うよ」

妙に自信のある零さんの口調に、私と夜闇さんはいぶかしみます。

「……どういうことですか？」

「ふふふ、そう急くな。急いては事を仕損じるぞ？ そうだな、あえて言わせてもらおう。ボクはいまだに利をかすめる漁夫である、と」

「何言って……」

るんですか、と言おうとしたとき、零さんの狙いがわかりました。

「う、うつん……？」

そう言えば。私と夜闇さんは四季君を起こさないようにと遠慮して声をひそめていましたが、零さんは妙に声高にしゃべっていました。

今四季君の布団の横には私のと夜闇さんの布団とが敷いてあって、私と夜闇さんはそれぞれの布団に居ます。

でも、零さんは自分の布団から抜けだして四季君の布団の上に居るのです。

起きた四季君に一番最短にいるのは、零さん。

「やあ、おはよう、だな。今は草木も眠る丑三つ時。ボクのこと
は夢か何かだと思うといい。起こした罪を償いたい」

「ううん……？ れい、ちゃん……？ あれ、もうあさ……？ ……む
ぐぐー！？」

ちゅっ。

そんな湿った音が、四季君の唇と零さんの唇の間で起きました。
あまりに一瞬で零さんが動いたので、私も夜闇さんも反応できま
せんでした。

戦闘に特化した私たちの目をかいくぐるなんて、零さんって何者
！？ …… って、そうじゃなくて。

……え？

「……安心しろ。ほっぺただ。勘違いしてもらっては困る」

「あ、そうですか」

訂正です。四季君のほっぺたと零さんの唇とが合わさって、って、
そうじゃなくて！

「何してるんですか！？」

「キスだ。罪滅ぼしのようなものだ」

「やってうれしいことは罰じゃないですよ!？」

「ふむ、ならば身体でも捧げようか？」

「いいですよ!」

もっ、何考えてるんでしょうね、この人は！

「……ふふふ、明日が楽しみだな、二人とも」

「ええそうですね!」

「……そうですね」

私たちがわめきあっているのにもかかわらず、四季君は一瞬まどろんだだけでまた眠りにつきました。意外と眠りが深いんですね。一つ発見です。

……はあ、明日からどうやって攻めて行こうかな……？

まず明日起きたら零さんと話をつけないといけないな……と思いながら、私は眠りました。

第三十九話　朝の目覚めと信賞必罰！??

夜中起こされたせい、僕はその日の目覚めが悪かった。

体内時計はすでに朝を告げている。けれどいくら根気を振り絞ったところで眠気は飛ばず、目は覚めず。

「うん……」

まどろみながら、起きなきゃ起ききやと意識を総動員して起床に全力を注ぐ。

『うん、おはようみんな』

『はい、おはようです！』

『おはよう四季』

『おはようございます四季様』

『おはようお兄ちゃん！』

あはは、そうそう、こうやって今日も平和に日々を過ごして……

「起きて！お兄ちゃん起きて！早く起きないと一昨日の二の舞だよ！キッチンが！キッチンが爆発する！お兄ちゃん！」

「嘘でしょっ！？」

ま、そんなさわやかな朝なんてのは夢のかなたに吹き飛んでいて。

「……おはよう……四季君……」

「おはようございます、四季様……」

みんななぜか機嫌が悪い。と言うか顔色がよくない。

「やあ！今日もすがすがしく実にすばらしい朝だ！そうは思わな
いか四季！今日という日は今日限り、という言葉は誰が言ったもの
だったかは忘れてしまったがなるほど、実に的を得ている！今日と
いう特別な日は昨日という特別な日とは全くの別物なのだ！それに
気付かせてくれたのはそう、他でもない四季、キミとキミを存在さ
せてくれていた世界なのだよ！キミが生きていると言うことはボク
にとつてとても喜ばしく、また同時にある種の幸福をもたらしてく
れる！……まあ、つまりボクが何を言いたいか、というのだ。

……おはよう四季。今日もいい朝だね？」

「あ、うん。おはよう、零ちゃん」

なぜかいつもの冷静沈着な零ちゃんらしくない饒舌で感情的な口
調だったが、でも、楽しそうだったからそれでいいか。

「……元氣いいね。なんかいいことあった？」

四様が苦笑交じりに言った。

「あつたさ！あつたとも！ボクには何もない！なにもないが！そ
れゆえに！四季の唇を、奪えたのだっ！」

………は？

「え？なんですかそれえ！？私聞いてないですよ！？昨日零さん
確かにほったに、って……！」

「ふははは！そんなもの嘘に決まっている！ボクは目的のためな
ら手段を選ばない人間なのだ！」

小さい身体を大きく偉そうに反らせて勝ち誇る。

……かわいらしいな。まあ、感想としてはそれぐらい。

「……………っ」

「あ。…………いや、よ、夜闇。待ってくれ。な？少し、少し茶目つ
気を見せたただけなのだ。それぐらい聡明な貴女ならわかってくれる
だろう…………？ほんの、ほんの冗談なのだ…………」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…………

と音が聞こえてきそうなほど何かの雰囲気をもとつた夜闇に、さ
っきまでの威勢はどこへやら、零ちゃんはたちまち狼狽した。

「……………っ」

「ま、待ってくれ、お願いだ。ぼ、ボクは一般人…………いや、正直
言おう、その水準をはるかに下回る身体能力、耐久力しか持ってい
ない。この前の戦闘で順当に勝ち上がったのは科学の力添えあつて
こそものなのだ。わ、わかってくれる…………だろう？ぼ、ボクは障
子紙よりも簡単に破けてしまう自信がある。…………だから、な？」

なんの自慢だろう。そう思いながら、事の成り行きを見る。…………

決して、怒ってなんかいないよ？うん、勝手に唇奪われたぐらいで、
怒ったりするもんか。

…………そう言えば、今何時だ？

「……………それはそれは」

「な？ボクは貴女のように強くはないのだ、だから」
「破った後の処理が、楽そうでは有り……」
「……………！！」

ああ、もうそろそろ準備しないと遅刻してしまふ。

「し、しき……！た、助けて……」
「……………ごめん、それ無理」
「そんなっ！？ご、後生だ、頼む……！」
「……………それなりに、理想はあったのに」
「……！！」

すぐに、キスのことだと悟っただろう。

うん、理想はあったのだ。告白して、いい返事をもらえて、その時気持ちを確かめあう時にそと……とか。

「それは、その、悪かった……と、思ってる」
「うん、じゃあ。僕は準備してるから」
「ご無体なっ！？」

僕は黒い影をまとって悪鬼になりつつある夜闇になにも言わず……
……学校に行く準備を始める。

「……………御覚悟」
「ま、待ってくれ夜闇たのも頼む後生だお許しをどうかご慈悲を
お願いします何でもしますからっ！」

「……………御覚悟」
「ま、待って待ってすまなかった四季！勝手に唇を奪ったのは謝

第四十話　いまさら気付く事実！??

??「……ああ、珍しくてめえじゃなく零のやつが倒れてたのは、
そういうわけかよ」

??いつものようなさわやかな朝の登校風景。

??右側に真宵ちゃん、左側に弥生ちゃん、後ろ側には気絶した零
を運ぶ夜闇。

??……僕、ほんの数日ですごくぐらい変わった気がする。

??それもこれも、全部……

??「な、なななんですか？な、なんでも言うてください！」

??「んだよ。こつちみんな」

??「なにか御用ですか、四季様」

??この子たちのおかげだ。

??「いや、なんでもないよ。ただ、賑やかでいいな、って思った
だけ」

??「へ？い、いや、あの、その、わ、私も、し、四季君といられ
ていいなって思ってます！」

??「私も、弥生さんと同意見でございます」

??「ったく！相変わらずめえは気障ったらしいな！」

??真宵ちゃんはそう言って僕を小突く。本気の拳じゃなくて、軽

くはたく感じ。

??「てかさ」

??校門前まで着いた。荘厳、というほどではないけど、ある程度は威厳のある校門。まだ早い時間だから、生徒のかずもまばらだ。

??「てめえは賑やかでいいのかもしれないけどよ、四様はどうするんだよ？」

??「う……」

??真宵ちゃんの言葉がぐさりと僕を貫いた。

??四様。彼女は僕の妹で、三人が来た次の日図ったように現れた超絶ラッキーガールであり、今は僕達と一緒にボロアパートに住んでいる。

??……重要なのは、ボロアパートに住んでいる、という所。

??僕の妹は十三才ぐらいだから、本来なら中学生であるはずなんだ。

??けれど、今のところ僕は四様が中学に行っているところを見たことがない。

??……というか、僕はあの子がどこに通っているかさえ知らない。

??「あのな、あいつ今どこにも行ってねえんじゃねえの？」

??「え、そうなの？」

??「私に訊くんじゃねえよ。てめえの妹だろうが」

??「……うつん、確かに」

??でも、それがわかったところで、僕にはどうしようもないんだよなあ。

??お金があるわけでもないし。はあ、ほんと僕って甲斐性なしだなあ。

??「あいつが学校に行きたくなけりゃ、そりゃあそれでいいんだけどな」

??「え？」

??

??随分珍しいセリフが真宵ちゃんの口から出てきた気がする。

??「優しいんですね、真宵さん……。私はてっきり『ああ？ひきこもりなんて人間味のすることじゃねんだよ』とと学校にいかせやがれ！』ぐらい言うんだと思ってました。……女のコ、だからですか？」

??弥生ちゃんが不思議な微笑みと一緒にそう言った。

??「あのな。私は別にひきこもりが悪いことだとは思ってねえし、学校だつて行かなきゃいけないところでもないと思ってんだよ」

??「……優しいんですね」

??「違いよ。私はなんか別の事情があるような感じがしたただだよ」

??そうぶつきらばうに真宵ちゃんは言ったけど……

??優しいところもあるんだな、という僕の感想は変わらない。

??「まったく、暴力女らしからぬ発言ですね。……何か悪いものでも食べましたか？」

「うっせえよクソメイド！ほっとけ！」

夜闇が余計なこと言わなきゃいい話で終わってたのに……。

第四十一話　悩み事！??

「……で、……これが、こうなっているわけだ。……これを現代語訳してみようか」

妙に尊大な国語教師の授業を聞き流しつつ、僕は四様のことを考えてみる。

あの子は本来中学生。ならば中学校に行っていなければいけないわけだ。けれど、あの子が朝中学校に通っている姿を僕は未だに見ていない。

「いいか、わざわざ『春は朝が一番風流だ』などと訳す必要はない。単語単語の意味としては抑えておく必要がある。が、いちいち面白みのない文章にしようとするから古文がつまらなくなる。だからあえて単語の意味を無視し、文脈で訳す。……『春は朝がさいこー！』……これでいいのだ。」

あえて言うまでもないと思うが、これをテストでやったらバツだからな」

意味ないじゃん、とか思いつつ、思考を戻す。

……どうするべきだろうか。

「……さて、そこで真剣に何事やらを悩んでいる秀句四季君」
「……………」

そもそもあの子は学校に行きたいのか？……いや、行きたくなくても、兄としては行ってほしいけど……。

「四季君。弥生君たちのことで悩むのは勝手だが……」
「……」

そもそも、あの子まだ向こうの学校に籍を置いたままなんじゃないか？と言うことは、向こうの学校からしたら、無断欠席が続いている状態……と言うことになる。

「……ふふふ、いい度胸だ」
「……え」

そこまで考えて、僕は教室中が静まりかえっていることに気がついた。

「さて、ようやく思考の海から帰還したようだが……。いやはや、あと数秒遅かったな」

「え、いや、すみません！」

僕は信じられないほどの怒気を放っている国語の先生に謝った。

「いや、謝ってもらう必要など……ないよ。代わりに……」
「か、代わりに……？」

「漢字書き取りと、特別問題集をプレゼントだ」
「はい……」

彼が下す罰はいつも決まって、書き取りと問題集。別に鬼のように難しい、と言うわけではない。ないのだが。

狂うような量があることで有名だ。

「漢字などは基本、応用関係なく『覚える』ことでしか学習できないからな。小学一年生でも『壺』を写こうと思えば書けるし、覚えようと思えば覚えれるだろう？英語でもそうだ。こういう『言語』は基本的には単語の量で決まるのだよ。……と、いうわけだ。」

四季君。来週までに漢字二千文字、テキストの中から選んで書いてきなさい」

「……はい」

もちろん、これのほかにも問題集が渡されたのはいうまでもない。

「……し、四季君が授業中呆けてるのって、その、……め、珍しいですね……」

「ん？……ああ、そうかな？」

「は、はい……、いつもなら、ちゃんと先生の話聞いてるのに……何かあったんですか？」

その授業の休み時間。当たり前のように弥生ちゃんと夜闇、それから零と間宵ちゃんが僕の机の周りにやってきた。囲むような形なので、僕は椅子を引けもしない。……これって、見方が違いはいじめにも……見えませんね。クラスの半分からの嫉妬の視線が痛いです。突き刺さるようです。

それよりも弥生ちゃん、授業中僕見る暇あったら授業聞こうよ。

「……何か悩んでいるようですね、四季様」

「うん、まあ、四様のことでね」

夜闇は制服を着ているのだけれど、妙に似合っていない。うん、男の僕が言ったら変だろうけど、夜闇にはメイド服が似合ってるね。

……言った瞬間修羅場になる気がするの、気のせいじゃないはず。

「やっぱ気になんのか、四様のこと？」

「まあ、僕はお兄ちゃんだから」

ずいぶんと長い間、会えなかったけど。

それでも僕は、あの子がお兄ちゃんと呼んでくれる限り、お兄ちゃんではないと思う。

「そうか。……てかよ、あいつまともに学校行けんのか？」

「え？」

「あいつ、異常に運いいじゃねえか」

「そうだね」

「可愛い物好きだろ？」

「……病的なぐらいにね」

ほんと、まさかまだあの頬ずりぐせが治っていないとは思わなかった。

「やっぱさ、運がよすぎると、気味悪がられんじゃね？」

「……そんなこと」

ないって、言い切れる？まさか。

「ボクが思うに。問題は能力以上に彼女の性格だと思うけれどね」
「……どうしてそう思うの、零？」

「彼女、怒ると手をつけられなくなるだろう？」

「まあ、ね」

「そんな人間と、友達になりたいと思う人間はいないと思う」

「……言いすぎだよ」

そんなことない。きっと、きっと。

「じゃあ、君は不良と仲良くできるとでも？」

「……四様は不良なんかじゃないよ」

「そうだ、彼らの方がよっぽどましだ」

「零、怒るよ？」

さつきからなにを言っているんだろう？なんで零はこんなひどいこと……。

「不良を怒らせたら、拳がとんでくる。しかし彼女を怒らせたら、何がとんでくるかわからない。石ころかもしれないし、車かもしれない。はたまた、隕石なんかかもしれない」

「いくらなんでも……」

言いすぎか？

少しだけ、不安になった。

「……まあ、単なる予想だよ。彼女が積極的に学校に行こうとしないのは、それが原因じゃないかと、思ってたね」

「……」

ああもつ。なんでこんなにも悩み事が多いんだ。

「ふむ、少し、雰囲気にそぐわなかったかな」

「ククク、この教室の、だよ。おそらくキミを殺さんばかりの勢いでにらんでいる男子諸君は……きつと、ボクと四季との昨夜の甘い出来事のことでも話してると思っているのだろうね?」

なんで今蒸し返して……と、訊く前に。

「遠慮しておくよ！今日の行為に差し支えるからな！」

どかーん！

はあ。

第四十二話　喧嘩……だよな！？」

間宵ちゃんと零が戦ってる。と言っても零ちゃんは防戦一方だけだ。

「……四季様」

「夜闇」

ふうつと、周りの時間がゆっくりになった気がした。事実、零に飛びかかっている間宵ちゃんの動きがスローモーションになっている。

「あまり、お気になさらずとも」

「四様のこと？」

それ以外に何があるのだろうか？

「ええ。私とは『違う』のが彼女です。幸運……それは本当に神様からの贈り物なのですから、大丈夫です。彼女はおそらく、誰よりも神様に愛されているのですから、四季様が心配なさらずともよいのです」

ふうつと、今度は時間が元通りになった。

教室のやかましい音が僕の耳もう一度入ってくるようになる。

「……夜闇」

「何でしょう四季様？」

「……さっきの、何？」

弥生ちゃんの時もそうだった。なんか時間がすつと遅くなったような気がして……。

「……スーパーメイドパワーと言うものがありまして、それを四季様にかけて、『はいばーめいどたいむ』になって……」

「……説明する気がないのはよくわかった」

不思議だけど、いくら不思議だからってまるでこの場で作ったような嘘にはだまされない。

「……そうですか。……あ、そろそろ暴力女が零にとどめを刺しそうな勢いですが、どうしましょう?」

「……止めてきて」

「御意」

うん、幼馴染に人殺しにはなってほしくないからね。止めなきゃ。

すつと夜闇は間宵ちゃんの前に立った。

「……んだよ!今私はこいつを」

「……」

「みぎゃっ!?!」

クルリ、ダン!

夜闇が少し手を動かすと、間宵ちゃんはひっくり返って床にたたきつけられた。

「な、て、てめえ……いつの間に、こんな力を……!」

天井から夜闇を見上げながら、間宵ちゃんが言った。

「……メイドと言うのは、ご主人様の命令があれば三倍強くなるのです。心得ておきなさい」

夜闇は間宵ちゃんに最大限の冷笑を浴びせ、あざける。対して間宵ちゃんは茫然とした表情で立ちあがり、次の瞬間には怒りの表情と感情をめいっばいにたぎらせて、夜闇に……いや、こっちに……いや、……もしかして……僕に向かつてる？え、なんで？

「おい、コラ」

「な、ななななにな……？」

ずんずんとまるで不良のような足取りで間宵ちゃんは僕のところに来た。

「だ、ダメです！四季君はやらせませ……ふぎゃ！」

間宵ちゃんの進路を阻もうとした弥生ちゃんが、一撃で視界から消えた。次の瞬間どっからがっしやーんとすごい音が聞こえた。……だ、だいじょうぶ……かな……？

「……メイドはてめえの命令があれば三倍強くなるんだと」

「そ、そうみたいだね……？」

「ってことは、だ。……てめえが命令しなきゃ強くなれねえってことだよな……？」

あ、今心配すべきは弥生ちゃんの体じゃなくて、自分の体だったんだ。……なんて、後悔してももう遅い。

「……ええ、っと……その、零がね、その、危なかったから……」
「ちなみに、教えといてやる」
「な、なにを？」

冷や汗だらだら。体温急上昇。危険な状態に陥った男女は恋をするなんて話がどこにはあるみたいだけど、僕に限っては無いようだ。……危険な状態に陥ってるの僕だけだし、原因は目の前に居るし。

「私はな、お前への怒りなら……」

あ、そう言えば次の時間なんだっけ。……数学、その次が英語、か。まあ、休んでも特に問題ない教科かな。じゃあ、何も問題はないわけだ。……涙が出そう。

「三百倍は強くなれんだよおおおおおおおおおお!!」

ブツン。

意識が途切れる音なんて、初めて聞いたよ。……いつ起きれるかな……？

第四十三話　夜闇と一緒！？

「……どうしてそんなにないてるの？」

「……」

「ふうん。しゅぎようがつらいんだ」

「……」

「でも、だいじょうぶだよ」

「……？」

「きつと、きつと。きつと、どりよくしたらいいことあるよ。そうでないとおかしいよ。神さまは、がんばってる人にいいことしないほど、……ばかじゃないはずだもん」

「……」

「あ、やつと笑ってくれた！……ねえ、キミのなまえは？」

「……」

「……にいづき、さくや？『つき』からきたんだ！へえ、おつきさまには、人がいるんだ！」

「……」

「え？ぼくのなまえ？」

「……」

「ぼくのなまえはね、しゅうく、しゅうくしきって言うんだよ！」

「……」

「しきさまじゃなくて！しーき！しきだけでいいの」

「……」

「もう！どうして『さま』なんてつけるのさ！……ねえ、もうだいじょうぶ？」

「……」

「そう！よかったよかった！元気でがんばってね！」

「……」

少女は去り際、一言少年に言った。

「しき様。わたし、新月にいづき 朔夜さくやの心は永久にあなたさまのもとにあります。どうか、おわすれなきよう……」

……

「……っは!？」

がばり、と僕は起きた。

「……あ、あれ、ここは？」

ここは？なんて訊くまでもない。ここは僕のアパート。……あれ、みんなは？

「四季様、ここは四季様のアパートで、皆は夕食の材料を購入しています」

「そ、そうなんだ……」

ふと、僕は思い出した。

「え？夕食の、ざ、材料！？」

「そうでございます」

え、え、あの、あの三人に材料を選ばせるのか！？そ、それは――
――！

「大丈夫です。皆には鍋だと伝えてあります」

「余計不安だ！」

鍋って、よりもよって鍋って！闇鍋になる可能性大じゃないか！

「は、はやく止めてこなきゃ……って、あれ？」

いくら立ち上がって走ろうとしてもへたり、と腰が抜けてしまう。
……ど、どうして？

「……四季様、あまち無理をなさらぬよう」

夜闇がやさしく僕を布団に横にさせる。普段なら抵抗するだろうけど、今はどうしても力が入らない。……なぜ？

「……四季様は、気絶なされていたのです」
「どのくらい？」

ちなみに今は外が夕焼けに染まっという具合の赤色になっている。たしか気絶した音が聞こえたのが昼過ぎちよつとだから、だいたい

4時間くらい？

「三日ほど」

「……は？」

み、みみみ、三日？

「……お氣を確かに。氣持はわかります。けれど、その。零さんや私、果ては四様さんの力まで借りて、三日です。よほどのショックだったでしょう……」

「……ええつと、意外と僕、ピンチだった？」

「かなり」

……ええつと。こういうときってやっぱり叫んだりしたほうがいいのかな？

まあ、三日くらい氣絶するのは慣れてるけど、高校生になってからはほとんどなかったからなあ……。

「驚かれないのですね？」

「慣れてるから」

そう返すと、夜闇はしばらく何かを思案し始めた。

「……あの暴力女、真剣になんとかしなければなりませんね……」

「あ、あの、夜闇？」

「なんでしょう？」

「暴力は、駄目だからね？」

「それは彼女にこそ言うべき言葉では」

「うう……それはそうだけど……！」

でもねえ……。僕にとって間宵ちゃんのは暴力というより「コミュニケーションだし……」。

「……すごく、哀れです」

「ほつとしてよ、もう」

それからしばらく、僕と夜闇は二人きりの空間を楽しんだ。

……え、そっぴえば二人きりだった！？

第四十四話　みんなの帰宅！??

二人きりになっていることを自覚すると、急になんだか、その、二人きり、という状況が強調されていく気がする。

??「どうかされました？」

??「え、いや、あの、どうして夜闇はついていかなかったのかな、って」

??

??「苦し紛れ、というか照れ隠しにそんな質問をしてみる。」

??「私が四季様の従者だからです」

??「……え」

??「返ってきたのは、そんなそっけない言葉。」

??「……と、言うのが建前で、本当は不安だったのです」

??「不安？」

??「も、もしかして、心配してくれてたのかな？」

??「最初はみな、四季様を看病すると言って聞きませんでした。」

普段なら跳ね除けるのですが、状況が状況でしたので、がまんして四季様の隣を譲りました」

??「え、えつと。なんか僕が普段と違う気絶をしたと言われた気がする。なんか、深刻な病気にかかったやつた、みたいな。」

??「しかし……その」

??ふい、と夜闇は目を背けた。

??「どうしたの？言ってよ」

??

??どうしたのだろうと思いつながらも、先を促した。

??「ご、ご命令とあらば」

??いや、命令なんて強い口調じゃなかったよね？

??でも、夜闇が『命令』にしたがっていた理由は、すぐにわかった。

??「まず、暴力女ですが、四季様を起こそうと躍起になって、その、ほつぺたを叩き続けました。……あ、もちろん軽くですよ？だから、大丈夫です。そう、大丈夫なんですよ？、だから、何も心配はいりませんよ？」

??「余計不安になるよ！」

??何があつたんだ一体！？

??「こほん。次に、零です。彼女は四季様を治そうと躍起になって、その、あの……い、いえ、命令なのです、包み隠さず全てを言います。あなたを改造しようとして、裸を」

??「も、もういいよ！」

??その先は言わないで！きっと夜闇が止めてくれたんだろうけど、もし僕が知らぬうちに改造人間になっていたとしても、僕はいい。知りたくないよそんな事！

??「そうですか。では、最後に四様さんですが」
??「ですが？」

??きつと、あの子だけだよ。四様だけが、ちゃんと看病を……

??「怪しげな祈祷を始めまして、危うくこの部屋が燃えかけました」

??「まさかの失敗だよ!？」

??「というか僕、気絶しても全く平穩が戻ってない!なんて不運だよ……」。

??「けれど、四季様の意識回復を一番助けたのはおそらく、四様さんの祈祷かと思われます」

??四様が一番僕の回復につとめてくれた、ってことはよくわかった。けど、けどそれでも……。

??「そろそろみなさんが帰ってきます。騒がしくなると思っているので今はお休みください」

??「う、うん、わかったよ……」

??なんか、あの子達が帰ってきたら平穩なんてない、みたいな言い方だね……?でも、たしかに今僕すつごく疲れてる。お言葉に甘えて、休ませてもらおうかな……。

??ガチャ。

??「ただいมาแล้ว。……っ、し、しし四季君!起きたんですか!?
よ、よかったです!わ、わ、私四季君の晩御飯買ってきました!」

?? 弥生ちゃんが、たくさんのスーパーの袋をさげて帰ってきた。

?? 「あ、ありが」

?? 「四季、食材を購入してきたぞ。これで君も…… っと、起きていたのか」

?? 次に零が、弥生ちゃんと同じぐらいの量の荷物を手に、帰ってきた。

?? 「あ、零もなんだ、ありが」

?? 「おいこら四季！とっと起きやが、って、起きてんのか。おら、エサだ。喜んで食いやがれ！」

?? やつぱり真宵ちゃんが前の二人とおんなじぐらいの手荷物片手に帰ってきた。

?? 「あ、真宵ちゃん、ありが」

?? 「お兄ちゃん、おはよう！私、頑張ってお兄ちゃんを守ったよ！」

?? 四様が満面の笑顔で帰ってきた。手に荷物はない。

?? 「あれ、四様は何も買わなかったの？」

?? 「私も買っちゃったらお兄ちゃんのお腹が破裂しちゃうよ」

?? 「じゃあ、なんでついていったの？」

?? 「そう、それですよ！」

?? 弥生ちゃんが、不機嫌をあらわに言った。

??「四様ちゃんが、あれは買っちゃだめ、あれもだめ、これだめ、ダメダメダメって言って全然お買い物させてくれなかったんです！だから、その、あんまりおいしいお鍋にならないかも、しれませんが……」

??申し訳なさそうに、弥生ちゃんと言った。

??「あのね、弥生さん！鍋にする、って言うてるのになんであなたは辛いものばかりか買おうとしたの！？お兄ちゃん辛いもの苦手なんだよ！？」

??あれ、四様は僕の好みを覚えてくれていたのか。……妙にうれしいな。

??「大丈夫だよ、お兄ちゃん、みんな好き勝手に買おうとしたけど、私が全部阻止したから！安心して！」

??「う、うん、ありがとう」

??本気で四様の親切がありがたかった。

?? ? ?

第四十四話　みなでお鍋！??

くつくつ、くつくつ。

おいしそうな匂いが部屋を包む。

?? 小さなちゃぶ台に、お鍋が一つ。それをみんなで囲っている。

?? 鍋の中身は普通のもの。変に赤かったり錠剤が入っていたり炭が入っていたりはしない。いや、これは鍋なのだから、それらが無いのは当たり前だ。でも、なぜがその当たり前が、とてもとても、身にしてみてうれしかった。感動したとも言える。いや、感動、なんて稚拙な言葉でこの気持ちが表現しきれるだろうか、いや、ない！

?? 「んだよ。幸せそうな顔しやがって」

?? 真宵ちゃんが気味悪そうに僕に言う。でも、全く気にならない。

?? 「き、きつと、お鍋がおいしそうなんですよ。四季君、一緒に食べましょ？」

?? 「うん！」

?? 昨日とかだったらたじろいだかもしれないけど、今は本心から、そう頷けた。

?? 「……そうか。そうだったのか。これが、キミにとってのおいしい料理、か。なるほど……」

?? 煮立つ鍋を興味深そうに睨みながら、零が呟いた。

??「……それでは四季様、いただきましょうか」
??「そうだね!」

??みんなが各々の小鉢へよそつていく。

??「あ、お兄ちゃん!お肉ばかり食べちゃだめ!野菜も食べなきゃ!」

??「えー。僕野菜よりもお肉の方が好きだもん」

??「今後一週間野菜しか食べられないような状況になりたい?」
??「なにをするつもり!?」

??四様の怖るべき脅しについ叫んでしまつ。ま、まさかこの世から牛とか豚とか消しちゃうつもりじゃ……。

??「私は、何もしないよ。私の予想だと、お兄ちゃんがお肉を買いおとしたら売り切れる、とか、そんな地味だけど確実なやつをオネガイするつもりだよ?」

??「うう、野菜も食べます……」

??僕はしぶしぶ、野菜をよそう。

??「まったく!四様もなんでそんなに野菜を食わせようとすんだよ?別に肉だけでも死なねえぞ?」

??「そんなことしてたら健康によくないよ!偏食は健康の敵なんだから!」

??「でも、私毎日肉しか食つてねえけど元気だぜ?」

??「それは、真宵さんが大人になるまでの話です!大人になって、運動しなくなったらだんだん酷いことになってきますよ!」

??「な、なんだって……?」

?? 驚愕の表情で、野菜を見つめ始める真宵ちゃん。その表情には不確かな未来に感じた不安と絶望がいい感じに混ぜられて、普段とはまた一味違うしおらしさが……。

?? 「……かわいい」

?? あ。

?? 「え？」

?? 「……可愛いな。可愛いな。真宵さん、可愛いです」

?? 「え、あ？」

?? 普段言われなれない言葉と、雰囲気の切り替わった四様に混乱しているのか、近づいてくる彼女を跳ね除けようとしめない。

?? 「……あ、しまっ……!？」

?? 「もふもふさせてください!」

?? 「ちょ、あ、そういうことは許可もらってから、みゃあああああああああああ!？」

?? 意外にも、四様は十分ぐらいで正気に戻った。あれ、昔はずっとしてたのに。

?? 「というか。まだ治ってなかったんだね……」

?? 「病気じゃないってば!」

?? だから、そのレベルまでいけば十分病気だよ……。

?? 「むっ!」

?? 四様は頬を可愛くふくらませ、ポカポカと猫がじゃれつくように僕をたたくのだった。

?? …… ああ、なんだか平和だなあ！。?
?? ?

第四十五話　四様、問い詰められる！??

??「ううつ、おいしい……」

??僕は鍋を口に入れて、そのあまりのおいしさに打ち震えた。

??「お兄ちゃん、三日ぶりのご飯だもんね。なんでもおいしい、
って感じると思うよ？それこそ、この人たちのゲテモノ料理でも」
??

??そんな恐ろしいことを四様は言うてくるけど、全然気にならない。
もし目の前にあるのが弥生ちゃんや夜闇が作った料理でも、僕は
喜んで食べただろう。それほどまでに僕はお腹が空いていた。餓
えは最大のスパイス、っていうのは誰の言葉だったっけ？

??「四様さん、ゲテモノ料理は少し心外です。私だって本気で
おいしい料理を四季君に食べて欲しくて……」

??「あなたのは香辛料を使いすぎです。辛みに含まれるカプサイ
シンはとりすぎると人体に影響を及ぼすですよ？」

??「……むつ。ど、どうしてあなたはメイドさんなのにお料理で
きないんですか？掃除洗濯だけでなく、お料理も重要な家事ですよ
？ハウスメイドさんの名折れじゃないんですか？」

??「……あなたはなんですか？」

??「わ、私は、四季君のお嫁さんですから」
??

??「ならなおさらお料理の勉強しなきゃいけないんじゃないかな……
……って思うけど、僕は告白された側だしってどうか今僕告白され
たっ！？」

??「え、あ、あの、や、弥生ちゃん、い、今何を」

??「あれ、言ってませんでした？私、四季君のお嫁さんになりましたきたんですよ？」

??「そんなこときいてないよ！って、よく考えたら僕まだ十七歳だから結婚できないよ」

??よかったよかった。

??「待ってますから、大丈夫ですよ」

??「……」

??ど、どうしよう。

??「おいこら四季」

??ゾクッ！

??底冷えするような真宵ちゃんの声。

??「……また、三日くらい気絶するか？」

??

??ふるふるふるふると、僕は必死で首を振る。い、嫌だ。まだ、まだ僕は死にたくない！

??「ふん、わかりやいいんだよ、わかりやな」

??「う、うん」

??わからなかったらどうなるのだろう。……こ、今度こそ、こ、殺されちゃったり……しないよね。うん。

??「……もくもく、うん、おいしいね、お兄ちゃん！」

?? お肉を頬張りながら、四様が朗らかに微笑む。

?? 「……そうだね」

?? うん、やっぱり平和だ。

?? 「……四様、少し真剣な話になるが、かまわないか？」

?? と、思っていた矢先、零がそんなことを訊いた。

?? 「……なに、零さん」

?? 「君の、学校のことだが」

?? 「………」

?? ピタリと動きを止めて、四様は零の言葉を聞いている。

?? 「君は、一体今どこの学校に通ってるんだ？」

?? 「………通ってない」

?? 四様は、半ば諦めたような感じで、そう、答えた。

?? 「……そうか」

?? 零も、ある程度は予想できていたみたい。

?? 四様はただ、僕を見つめている。

?? その姿はまるで、イタズラがバレた子供のようだった。

?

第四十六話　四様の決断！??

??「……通ってないって？」

??

??僕は四様に訊く。

??「……だ、だってあいつら、……私のこと、怖がるんだもん」
??「……」

??僕は悲痛な顔をして黙り込んだ四様に、何も言うことができない。

??「なぜ、そのようなことに？」

??「……私、あそこじゃかなり、名前知れちゃったから」

??「は？お前、別に幸運のこと触れて回ったわけじゃねえんだろ？」

??「……そうじゃ、ないけど」

??四様は所在なさに黙る。

??「四様さん、黙っていても、誰も何もわかってくれませんよ？」

??「……私、向こうでは、願い屋さん、っていつのをやらされていたの」

??「ね、願い屋さん、ですか？」

??四様はこくりと頷いた。

??「誰かのお願いを聞いて、私が願うの。それで、お金をとる。かなり、有名だったみたい」

??そのお金は、今は檻の中にいる祖父母の元に転がり込んでいるんだろう。

??「そのせいで、キミは向うでバケモノ扱い、か。さすがに気の毒だな」

??「……いいの」

??「よくないよ」

??でも、どうしようもないのもまた事実だと思う。だって、僕に四様の学校を変える権利なんて、ない。

??「……でもよ。お前に今学校がない、ってことは、てめえ、行きたくねえだろ？」

??「……」

??恐る恐る、四様は頷いた。

??「が、学校には、いかないとだめだと、思います」

??「いや、それは一般論だろう。四様は一般人ではないのだ、それが適用されるとは思えん」

??「だからといって行かなくてよいということにはならないですよ」

??「でもよ、やっぱり辛いと思うぜ？バケモノ扱いなんてよ。私だったら耐えられねえ」

??へえ。

??

??「真宵ちゃんも女の子らしいところあるんだぶえ」

??「黙れ四季」

?? 思いつきりではないけど、僕は殴られて畳をなめた。

?? 「だから、殴ってはいけません、暴力女」

?? 「はいはい、気をつけますよ。……で、どうすんだよ？」

?? 「い、行くべきです！」

?? 「たかが学校、行かなくとも事足りる」

?? 「私は、むこうかこちらかはともかく、通うべきかと」

?? 「通う必要なんてねえ。行きたいやつだけ行きゃいい」

?? みんな、みごとに意見が別れてるね。

?? 「……お兄ちゃんは、どう思う？」

?? 「……僕？」

?? 四様はさすがのように僕を見つめてくる。うつん、どうしたものか。

?? 「……そうだね。僕は君の好きにすればいいと思うよ」

?? 「……して、いいの？」

?? 「いいんじゃない？よく考えたら、君は運がいいんだから。君の好きに、世界は回ると思うよ」

?? だから、結果的に四様の好きになる、ってこと。

?? 「……私、こっちで通う」

?? 「それはよかった」

?? 「だから」

?? 四様は僕を見つめくる。じっと、射抜くように。

??「だから、褒めてくれる？」
??「……もちろん」

??なぜ、そんなことを言うのだろう。僕はそう思ったけど、四様は頑張ってるんだ、褒めてあげなきゃ。

??僕は四様の頭の上にポンと手を乗せて、くしゃくしゃと撫でる。

??「よく決断したね。普通にできることじゃない。……よく、頑張ったね」

??「……うん」

??つつ、と四様の目に涙が浮かぶ。よほど、辛かったんだろう。

??「……さ、お鍋が冷めちゃうよ。食べようか」

??実際は未だにぐつぐつと煮立っているのだけど、そこは雰囲気とか情緒とか、ね。

??「は、はいです。お、おいしそうです……」

??「まったく。なぜわざわざ辛い思いをしようとするのか理解できません。が、まあ、よしとするか。……うまそうだな」

??「そうですね零さん。では、いただきます」

??「……まったく。無理すんなよ、四様。いざとなったら私たちを頼れ。わかったか？」

??「……はい」

??また再び、平和な時間が戻ってきた。

第四十七話　試験前！??

?? 四様の中学校が決まったので、僕たちはその後楽しく過ごした。

?? 鍋を囲んで、楽しくはしゃいで。夜闇が真宵ちゃんを皮肉って、真宵ちゃんがキレたり。

?? 零や弥生ちゃんはそれを楽しそうな目で眺めたり。四様と僕はいつものように、とぼっちりくったり、笑ったり。

?? そんなことをしているうちに夜が来て、僕らは眠った。

??

?? 次の日。

?? 「そっぴゃ、そろそろ中間テストだよな」

?? いつもの登校風景。僕が真ん中で、右に弥生ちゃん、左に真宵ちゃん、前を零、後ろに夜闇の完全包围網。

?? 「あ、そ、そうですね！」

?? 「テスト、か。ケアレスミスに注意しないとな」

?? 「テストですか。本来なら四季様以外の人間に試されたくはないのですが……」

?? みんなはたのしそうに話しているが、僕は気が気でない。

?? 「……そういえばよ、四季。お前、テスト勉強やってんのか？」

?? 「できるわけないでしょー!？」

?? 最近僕は旅行行ったり気絶したり気絶したり気絶したりで忙しかったんだ！しかもほとんど、真宵ちゃんのせいじゃないか！

?? 「お、おう。そうだったな。お前最近気絶しっぱなしだったから」

?? 「何を他人事のように。それら全ては暴力女、あなたがしたのですよ？」

?? 「だから、悪かったって言ってるだろ」

?? 「なら、いいんだけど」

?? 「それで済みますのか？」

?? 零ほか二人が目をまんまるにしていた。

?? 「え、何か変なことでも？」

?? 「あるにきまつてる！ 君はいつたい……ああ、もう」

?? 何かを言おうとして、とちゅうでやめた。

?? ……何を言おうとしたんだろう？

?? そんな感じで、僕らは学校について、教室に入った。

?? 「よう、四季！ また美人四人もはべらせて、うらやましいねえ！ ちょっとは自重しろよこの野郎！」

??

?? と、同時に男友達の喜田 政臣君がいきなり僕にヘッドロックをかけてきた。

?? 「い、痛い、痛いよ！」

??「うるせえ！　なんでお前だけ！　この、この！」

??ぎゅーぎゅー締め付けてくるけど、正直言って真宵ちゃんに比べたら全然痛くない。」

??「……つたく。お前はほんと幸せそうだな。テストも余裕だからか？」

??効いてないことがわかったのか、政臣君はあっさりと離れてくれた。

??「え、ええっと……」

??「当たり前です」

??ちよつと夜闇！？　何勝手に言ってるの！？

??「へえ。じゃあ勝負しようぜ、四季！」

??「は、なに言って」

??「構いせんとも」

??おーい！　いつもの忠誠心はいったいどこに！？

??「オッケー！　よし、じゃあテストの合計点数で勝負だ！　負けた方は、昼飯一週間奢りな！」

??「え、ちょ、政臣君」

??「のぞむところです」

??ええ……。

??「……もう好きにして」

??僕は呆れながらもそうつぶやくしかなかった。だって聞いてくれそうにないんだもん。
??

第四十八話　テストに向けて！??

??それからしばらく、僕は平和な授業を受けた。なんだか久しぶりに何もされずに普通に授業を受けた気がする。相変わらず内容は全然頭の中に入ってこなかったけど。そんな風に過ごしていると、あつという間に昼休みになった。

??「夜間、どうして朝あんなこと言ったの？」
??

??いつものようにみんなで僕の机を囲み、お弁当を食べる。

??「すみません。しかし、ああでもしなければ四季様が勉強をすることは無い、と思いましたので」

??「まあ、確かにな。四季は致命的なまでに勉強嫌いだからよ」

??「……あ、あなたがそうさせたんじゃないんですか……？」

??「いや、弥生。別に、四季が勉強を好きになる必要はない。勉強など所詮作業だ。未来の自分に投資していると思って耐えるしかないぞ」

??零の言葉が妙に心にしみる。

??「つたく、これだからカクシヤは嫌いなんだよ。なんでもかんでも理屈っぽく言いやがる。ちよつとは普通に頑張れって言えねえのかよ」

??「頑張れ？　?そんな言葉は四季には意味がないだろう。頑張れる環境ではないのだからな、キミのせいだ」

??「ああん？　?やんのかこら」

??「まるで不良だな。キミを慕う人間が一人でもいるというのが不思議でたまらないよ」

?? 一気に険悪な雰囲気になった。ちなみに、僕も信じられないんだけど、間宵ちゃんって結構女子に人気あるみたい。横柄な態度だけど、根は優しいし、リーダーシップがあるし。

?? 「ま、まあまあ、二人とも落ち着いて」

?? 「四季、元はキミが勉強をしないのが悪いのだ。少しだけ勉強を見てやるから、あの男の倍の点数ぐらいとってみせろ」

?? 「む、むちゃくちゃ言わないでよ！」

?? そんなのできるわけじゃないか！ ？政臣君は赤点ギリギリだけど、僕はもっと低いんだよ？

?? 「そ、それは、いい考えです、ね。わ、私も、その、勉強あまりできませんけど、その、教えて、あげます」

?? 「よく言うよ弥生ちゃん」

?? 国語に関しては学校一番なのに。

?? 「もちろん私も見て差し上げます。私は歴史が得意なので」

?? それは意外だ。

?? 「ちなみ私は英語が得意だぜ。英検一級、TOEICで九百点とった」

?? 「……それは得意と言うレベルではないでしょう。もはや通訳レベルです。……ちなみに、将来の夢はなんですか？」

?? 「格闘王！」

?? 「な、なんでそんな夢なんですか」

??

??といつかなんでそんな夢なのに英語が得意なんだか。

??「いいじゃねえかよ格闘王。世界でも通用する実力が欲しいと思うのは男だと当たり前だろ?」

??「君は女の子だよな?」

??「なんで疑問形なんだよ!」

??

??「……いや、なんでって言われても。」

「といつか、なぜその夢でそれほど英語を勉強したのだ?」

「はん! わからねえかな、零。将来格闘王になろうとするだろ

? そうしたら、日本一になるまでは日本語でオツケーけどよ、世界に行ったらやっぱり英語は要るだろ。それも相当詳しく、だ。

『こいよ糞野郎』ぐらい一発で英訳できるぐらいじゃねえとな」

「……それで英検一級、TOEIC九百点ですか。化け物ですね」

「ほめるなほめるな」

「ま、ま、間違いなくほめていないとおもいます……」

うわ、弥生ちゃんすつごい勇氣ある。

??「……とにかく、今日から四季様には勉強漬けになっていただ
きます」

??「ええ」……」

??「ええー、じゃねえ。てめえ留年したらどうすんだよ」

??「うつ……」

??僕はうつなるしかなかった。うつ。勉強いやだなあ。

??

第五十話　テスト勉強と四季の不運！??

??それから放課後まで授業を受けて、僕たちは家に帰った。ごく普通にこうして帰る、ということがずいぶん久しぶりな気がする。

??「ただいま」

??「お帰り、お兄ちゃん！」

??アパートに帰ると、先に中学校から帰っていた四様が普段着にエプロン姿で出迎えてくれた。

??「どうしたの、四様？」

??「ご飯作ってるの。ここでまともにお料理作れるのって、私とお兄ちゃんだけでしょ？」

??恐ろしいことに、後ろの四人はそろって首を傾げた。って。

??「なんで真宵ちゃんがいるの？」

??「いたら悪いか？　四季の勉強見てやるって話だっただろうが」

??「……あ」

??そういえばそうだった。

??「忘れてやがったな？　??たく、都合のいい脳みそしやがって」

??真宵ちゃんはそう言うと、部屋にずかずかと入り込んで、卓袱台の上に筆記用具等を用意した。

??「あ、あのさ、まず、『ご飯食べてから……』」
??「逃げんな。殺すぞ」

??君が言ったら洒落にならない!?

??「すぐに脅すから、あなたは暴力女なのです」
??「うつせ。黙れクソメイド」

??「喧嘩している場合か。さ、四季、早く始めようか」

??零は卓袱台の上に、化学と数学の教科書を広げた。

??「おいこら零。なんでてめえが一番先にやってんだよ。ここは幼馴染の私がやるところだろ?」

??「知るか。四季はただでさえ成績がよくないのに、化学と数学はダントツで悪いからな。先にやって、時間を取るのが当然だろう」

??「こいつ英語も壊滅的なんだぜ? What time is it now? ?もわからねえぐらい」

??「それぐらいわかるよ!」

??真宵ちゃんに僕は一体どれほど勉強できないと思われているんだ?
だ?

??「なら、訳してみる」

??「え? ?ええっと、ワットが何だか、いつ、になるんだよね。じゃあ、『いつはそれの今ですか』だ!」

??四様を覗く全員が僕を可哀想なものを見る目で見た。……え?

??「……悔しいが真宵の案に賛成だ。化学より何より英語をしな

ければ……」

??「だろ？」

??「……四季様……」

??「なんだか、夜闇の視線が、本気で僕を心配しているような表情で僕を見た。その視線はまるで、出来損ないの領主を遠くから見守る忠臣のようで……」。

??「ね、ねえ、お兄ちゃん」

??「な、何かな、四様」

??「四様まで、何がなんだかわからない、という目を向けてきた。き、君もなの、四様？」

??「英語つて、何？」

??「……」

??「中学生、だよな？」

??「僕だけでなく、みんながそう思ってると思う。だって顔に書いてあるもん。」

「し、知らない、のか？」

「うん」

「今まで学校はどうしていたのです？ テストも、授業もあつたでしょうに」

「私、中学からは行ったことないよ？ それに、テストも小学校の時から『偶然』テスト用紙がなくなったり、『偶然』先生が失踪したりして、一回しか受けたことない」

「……そ、それは、虐待、ではないんですか……？」

弥生ちゃんが四様を心配そうな目で見ると、僕も知らなかった。というか、重い！

「……ま、まあ、キミにはその神の運があるから勉強はできずとも生きていけるだろう。だが、問題は四季だ」

「お兄ちゃん、テスト、嫌なの？」

四様の質問に僕は唾を飲み込む。だって、ここでもしうなずけば、テストはなくなるだろうからだ。

「う、うう、ううん。ば、僕は、テスト、したいなあ……」

「そうなんだ」

四様は残念そうに言った。……くう。

「へえ。てめえにも見どころあんじゃねえか」

ありがとう間宵ちゃん。キミの言葉が一番の励みだよ。

「じゃあ、うんと難しくしとくね」

「……へ？」

「だって、『困難は大きければ大きいほど、乗り越えたときの達成感は強い』んでしょ？　どこかの本で読んだことあるよ」

「え、で、でも」

「ええっと、神様神様、どうかお兄ちゃんの学校のテストを難しくしてくださいますように……」

それから、本気で四様は願い始めた。神の運を持つ四様が本気で願ったら、何もかもが思い通りになる。と、いうことは。

「……み、みんな、勉強しよう！」

「賛成です。私も自信がなくなってきました」

「わ、私もだぜ！」

「わ、わわわ、私も、その、赤点を取ってしまうかも、なんて…

…」

「まずいな。これは勉強せねば……」

僕たちは、今までのテストを大きく上回るであろうテストに備え、勉強することを決意した。

第五十一話　みんなカリカリ！？

？？カリカリ、カリカリ……。

？？「……もぐだめだっ！」

？？

？？僕はシャーペンを卓袱台の上に投げ出した。

？？「諦めんじゃねえ！」

？？「無理だっ！　？　なんなのこの暗号！」

？？今僕は長文読解をやっているわけだけど、だんだん英語で書かれているはずの文が、エニグマ暗号機で打たれた暗号のようにしか思えなくなっていた。

？？「までこらてめえ。なんで英語わかんねえくせにエニグマ暗号機知ってんだよ」

？？「なんで君は僕の考えが読めるのっ！？」

？？「私とてめえは幼馴染。忘れんなよ？」

？？それはあれかな、幼馴染は以心伝心できるといふ都市伝説かな？

？？「……え、エニグマなんちゃら、って、何なんですか？」

？？「第二次世界大戦中開発された、日本の暗号機だ。専用の解読表がなければ絶対に解けず、世界有数の諜報機関が解読表を求めて日本中を歩きまわった、とかいう噂もある」

？？「へえ、そうなんだ。さすが零さん、博識」

？？「キミには負ける。エニグマ暗号解読表が欲しいと願えば手に入るかもな？」

??「……そんなの欲しくないもん」
??「む、そうか」

??なんかこっちはこっちで雑談してるし！

??「四季様、手が止まっておられます。今は心を機械のようにして努力なさってください。暴力女、あなたも、同様に」

??「う……」

??「うぐ……」

??何も言えずに僕は黙る。そう、僕たちは四様のせいで、異常なまでの勉強を強いられているのだった。あれ？　勉強を強いられる、って重ね言葉じゃないのかな？　だって勉強って、もとから無理やりさせられるものだもん。とかいう現実逃避も、そう長くは続かない。

??「……ああもうつ！　？　こんなやっていられるかつ！」

??

??ついに、今まで我慢強かった零が、ボールペンを叩きつけた。

??「なんで一研究者のボクが『世界平和を実現させる科学的な方法』を考えねばならないのだっ！　？　こんなものが高校の、それも四季が受かるようなレベルの高校のテストに出るものかつ！　？　もし出たとしても、『全人類にロボトミー手術を受けさせる』と書けば凌げるっ！」

??「ろ、ロボトミー……？」

??「それくらい自分で調べろっ！　今のボクには時間がないんだっ！」

??

??「……というか零、ロボトミーって……」。

??「つたく。みんなカリカリしてんなあ。夜闇、てめえはどうだ？」

??「話しかけないでいただけますか。今英語が得意なあなたに話しかけられると、例えようもない怒りがどこからかふつふつとこみあがってきます」

??

??「無表情で言われても説得力がないよ。でも、説得力がないのは表情だけで、他の所はちゃんと怒りを顔にしている。おもに、腕とか指先とか。

??「はん。持てない者の僻みってか？　？できる者はつらいねえ」

??「……今の発言、許しません。……殺っ！」

??「ダン！　？と夜闇は飛び上がると、黒と白のメイド服をはためかせ、真宵ちゃんに飛びかかる。手には、無骨すぎるナイフ。

??「はっ！　？ヤル気か？　？いいぜ、やってやるぜ！」

??「真宵ちゃんはノリノリで全身に闘気を纏わせ、構える。

??「うるさいですよっ！　？私今苦手な数学の勉強中なのです、黙ってくれないと気が散るじゃないですかッ！」

??「今までおとなしく零と話していた弥生ちゃんが、そう叫んでバツグから刃付きのメリケンサックを取り出し、指にはめた。すると弥生ちゃんの目の色が変わった。

??「……殺して差し上げます、お二人とも……」

??裏弥生ちゃんだ。

??「上等だ弥生！」

??「いいでしょう。時間浪費、いえ、暇つぶしに付き合っ
てさしあげます」

??三つ巴でにらみ合う三人。またここで暴れるのっ!?

??「まてっ！」

??その時、零が立ち上がった。あ、やっぱり止めてくれるんだね、
零。

??「キミらは一体いつまでそんな原始的なことを続けるつもりだ
? ?ボクが文字の奔流に狂いそうになるのをしっ
ていながら、隣でそんな非科学的なことをされたら……」

??ふと、零がさっきまでやっていたテキストを
てみる。国語の教科書だった。そうか、理科が
終わった零は、苦手な国語をやり
始めたんだ。

??「……吹き飛ばしたくなるじゃないか」

??ゴロン、ゴロゴロ、ゴロン。

??重低音がして、物凄く小さな黒い塊が、いくつもいくつも零の
白衣からこぼれた。

??「……くふふ、くふふふっ! ?これは『ボム』。ボクはこ
れにその名以外を名付けるつもりはない。この爆弾の役目はたった

ひとつ、単純にして明快！」

??「え？」

??「ちょっとまって、今爆弾って!? ?なんで急にそんなことに!?」

??「ちっ! ?零を潰すぞ!」

??「わかってます」

??「理解しています!」

??真宵ちゃん、裏弥生ちゃん、夜闇が零に向かって攻撃を放つ。

真宵ちゃんの極高密度の闘気は寸分違わず零のお腹にクリーンヒット。げぼ、なんて悲痛な声を上げて零は吹き飛んだ。

??次に裏弥生ちゃんの鋭いかかと落とし。ぼきぐしゃ、なんて残酷な音が零の首から聞こえた。

??最後に夜闇の破壊的な峰うち。ただのナイフでの攻撃だが、夜闇のは桁が違い、メリメリッと袈裟懸けに零は切られ、どこか遠くへと吹き飛んで行った。その途中に零が呟いた一言は、僕の耳に絶望をもたらした。

??「くふふっ! ?あと三秒……」

??「一、弐の、

??「あ、だめ、死んじゃっ

??「惨。」

第五十二話　みんなレベルが上がってる！？

?? 気が付けば、青空の見えるようになった部屋で僕は目覚めた。
どうも朝になったみたい。

?? 学校、いかなきゃ。

?? 「みんな、起きて！」

??

?? 反応はよつつあった。

?? 「お、おー」

?? よろよると、真宵ちゃんが立ち上がった。その姿はまるで戦が終わったばかりの武士のようだ。

?? 「は、ははは、はいですっ！」

?? しゃきん、と一瞬で瓦礫を押しつけ立ち上がったのは、表弥生ちゃん。

?? 「……不覚」

?? 夜闇が冷静にそう呟いて、音も立たせずにすくりと立ち上がった。

?? 「……うにゅ、おはよ、お兄ちゃん」

??

?? やつぱりというか、恐るべきことに四様はむにゃむにゃと目をこすりながら起きた。その体には瓦礫の一片どころか埃一つついて

いない。さすが、神様の運。

??「大丈夫、四様?」

??「むにゅ? ?……あ、うん、大丈夫」

??でも、もしかしたら頭を打ったかもしれない。病院に連れていったほうがいいのだろうか。なんて説明しよう? ?同居人の爆弾で部屋が崩落して……。

??ダメだ。零に手錠がかけられる光景が簡単に浮かんだ。

??「あれ、零は?」

??「知るかあんなヤツ!」

??真宵ちゃんはすぐさま言った。

??「おそらく、どこかへ吹き飛んだかと。本気でやりましたので」

??「ど、どどれくらい飛ぶんですか?」

??「約二百メートル前後かと」

??「へえ〜。そんなものですかあ〜」

??世にも恐ろしい会話がここでなされている気がする。人を二百メートルも飛ばして、『そんなもの』!?

??「と、とにかく学校行こうよ、学校」

??「ま、それには賛成。とっとと行こうぜ。勉強道具も全部吹っ飛んだし、手ぶらで行ってもかわんねえだろ」

??「ですね」

??「そ、そそそそうですねっ!」

??「行ってらっしゃい、お兄ちゃん!」

?? 四様は手を振って僕たちを見送る。……もしかして。

?? 「君も行くんだよ、学校」

?? 「……あ」

?? やつぱり、忘れてたな。ダメじゃないか。

?? 「あ、あはは……いつてきます、お兄ちゃん」

?? 「行つてらっしゃい、四様」

?? 僕は挨拶をして、学校へ向かった。

?? 「……はい？」

?? 学校に来て、一時間目。さっそく僕は来なきゃよかったと思つた。

?? 「この問題をといてみる。テストに出るからな」

?? 先生がいつものように、さも簡単そうな口ぶりで言う。そんな簡単なものじゃないよ！

?? 「……なん……だと……？」

?? どこからかいつのまにか復帰していた零がバケモノでも見るか

のような目で、黒板にかかれた式を凝視していた。

??「どうしたの、零？」

??「これは、フェルマーの最終定理だ。……高校生解けるようなものでも、ボクが解けるようなものでも、ない……まさか、これ程とはっ！」

??今更ながらに、僕は四様の實力を思い知らされるのだった。

??そして、次の時間、国語。

??「さあ、とつととやれ！　？この程度の漢字、貴様らにできないはずがない！」

??やけに尊大な先生が、黒板の漢字をバンバン叩きながら言った。

??「……そ、そんなっ！　？わ、私に読めない漢字があるなんて……っ！　？漢検一級なんかじゃ、全然足りないんですかつ！？」
??「はははっ！　？甘いぞ如月！　？我が校の生徒でいたいなら、漢検一段は持つていないとな！」
??「そんな……」

??弥生ちゃんの地味な實力も、ことごとく上回っていた。って、こんなのでよくみんな我慢してるなあ……。

??「……おい、どうする？　？やるか？」

??「そうだな。今は四季の野郎より、あいつらだ」

??あ、全然我慢してない。秘密会話で殺人計画練ってる。

??このクラスから犯罪者がでないことを祈りながら、国語の時間を過ごした。

?? 次の時間も、その次の時間も、世界レベルの難しい授業になっ
ていて、ただでさえ勉強ができなかった僕は、背筋が凍る思いだ。

?? …… いや、冗談抜きで、大丈夫かなあ？

第五十三話 お昼休みの話し合い！？

?? その日の昼休み。いつもなら昼食をとっているクラスメイトで賑わう教室も、今日はやけにひと気が少ない。主に男子の数が。先生方をどうこうするって息巻いていたけれど……。

?? 「……先生方、大丈夫かなあ……？」

?? 「心配すんなよ。マジで殺るわけじゃねえだろうし、大丈夫だよ」

?? 「しかし、みなさんかなり殺気立っていたようですが……」

?? 「能力的に不可能なことを強制されるぐらいなら、多少のリスクはあっても原因を消す、と思っっているかもしれんな」

?? 「だ、大丈夫なんですか……」

?? みんなは昨日とおなじように僕の机を中心に包囲網を敷いている。右側に夜闇、左側に零、正面には弥生ちゃんと真宵ちゃんが狭そうに座っている。

?? 「ほ、ほ本当に大丈夫でしょうか……男子さん達」

?? 「心配するのそっち!？」

?? 「当たり前だろう。午前中のような授業内容ままのテストなど出されればもはやボクらに未来はない」

?? 「ですね。それを阻止するためにも、先生方には消えていただかないと。せめて安らかに逝けるよう、祈りましょうか」

?? 「だな。あとそれと男子連中が成功することも一緒に祈ってやるうぜ」

?? 「みんな何言ってるのっ!？」

?? 「なんて物騒なことを平然と……。僕の必死の叫びをあざ笑うか

のように、真宵ちゃんは冷徹に言った。

??「何言ってるか意味くらいわかんたろ。……ま、てめえには現実を知る必要があるな。周りを見てみな」

??僕は言われた通りに周りを見渡す。今教室にいるのは弁当組の女子生徒だけだ。……でも、なんか様子が変。いつもなら僕たちに否定的な目を向けるのに、まるで正義のヒーローを見るような、そんな目で僕たちを見ている。

??「ついでに、聞き耳も立ててみたらどうだ？」

??零の言う通りに僕は話をしている女子生徒二人に聞き耳を立ててみる。その二人は特に声も潜めていないので割と聞き取れる。

??「……いっつも暴走してるあの人達だし、きっと今回も、だね」
??「うん。変に難しい問題を出してくる先生におしおきしてくれるよね！」

??「おしおきって……まったく、あなたは純粹ね。殺してバラバラにして埋めちゃえ、とか言ってもいいのよ？」

??「そんなの悪いよ……」

??「まあ、そうだけど。きっと勝手に暴走して勝手に排除してくれるわ」

??そんな会話が聞き取れた。

??「な? ? センコーどもの排除はクラスの総意なんだよ。わかるか？」

??「この国は民主主義。ならばキミも、大多数にならうべきだろう」

??「数の暴力じゃないか！」

??「数の暴力が気に入らないとおっしゃるのなら、私が純粋な暴力で教師連中を片付けて来ますが」

??「しなくていいよ！」

??「な、なら私が、男の人達止めて来ますね！　？すぐに行つて来ます、し、四季君の前に、男子全員分の亡骸を耳揃えて」

??「両極端にもほどがあるよっ！」

??どつちにしろ人死んじやってるじゃないか！　？それじゃ意味ないよ！　？というか弥生ちゃん、人殺ししたくないから裏人格できちゃったんじゃないの！？　？なんで嬉々として向かつて行くのさ！

??

??「うっ……怒られちゃいました……」

??困っている顔をしているんだけど、どこか嬉しそうなのは気のせいかな？

？

??「……ならば、どうするのだ、四季」

??ひどく面倒くさそうに零が聞いてきた。

??「どうするって言われても……」

??

??思いつかない。

??「皆さんの意見を取り入れたとするのなら……やはり」

??「やはり？」

??夜闇の提案なんてロクなものではないだろうけど、一応聞いて

おく。

??「教師連中、男子連中全ての殲滅かと」

??「なんでそうなるのっ!?!? ？なんでそう恐ろしいこと考えるの!?!」

??「……お気に召しませんか」

??「お気に召すわけないでしょ!」

??「みんな実はただ暴れただけなんじゃ? ？急に勉強しはじめたからストレス溜まつてるのかなあ……」。

??「……まったく。教師も消すな、男子も消すな。一体ボク達は誰を消せばいいのだ?」

??「誰も消さなくていいよっ!」

??「というかどうして誰かを消すのが前提なのさっ!」

??「……まったく。冗談はともかくこのままだとマジでやべえぞ?」

??「どうすんだ四季」

??「冗談だったの?」

??「誰がたかがテストで人殺しすんだよ。少なくとも私はやらねえぞ?」

??

??「そ、そうなんだ……ちょっと安心。そう僕が胸を撫で下ろしている」と。

??「ボクはわりと本気だったがな。教師連中はともかく、研究対象の四季をどうしようかと企んでいる連中を生かしておくわけにはいかない」

?? 零は冗談めかして言っているが、真意はどうかわからない。もしかしたら真剣に……なんてこともありえないわけじゃない。

?? 「あ、あああのあの！　？ど、どうするかはとりあえず置いて今日はとにかく乗り切りましょう！」

?? 「うん、それが一番平和的だよ」

?? 「私もそれでいい。なかなかいいこというじゃねえか、弥生」

?? 「……四季様が賛成なら、私も賛成です」

?? 「いろいろ言いたいことはあるが、とりあえずは賛成しよう」

?? 弥生ちゃんの提案に、みんなが賛成する。うん、平和的解決が一番だよ。うんうん、よかったよかった。

?? 「……でも、またあの授業受けなきゃいけないのか……」

?? 「……」

?? 確かにうれしいんだけど、気分はあんまりよくない。むしろ憂鬱な気がする。

?? ……はあ。

第五十四話　よつやくの放課後！??

??。

?? 「.....お、おい、四季?? ?生きてるか??」

?? 「い、生きてるよ?? 多分」

?? 真宵ちゃんの問いに、僕は力なく答える。地獄のような二時間が終わって、放課後。僕は全体力を使い果たして机に突っ伏していた。めずらしいことに真宵ちゃんも同じように倒れ、机を枕にしていた。

?? 「.....全く。変に理解しようとするからそうなるのだ。どうせ理解できないのなら寝るなり喋るなりすればよかったのに」

?? 「真宵さんまでこんなことになるなんて..... よつぽど辛い授業だったんですね」

?? 「随分他人事ですな? ? 私もできることなら眠りたいのですが.....」

?? 「私、午後は眠って過ごしましたから」

?? 零や弥生ちゃん、夜闇が僕の席の前でぐちぐちと言っている。

?? うつゝ。あたまいたい。

?? 「.....うつし! ? 全快!! ? よし、いくぞ四季! ? 早く帰ろつぜ!」

?? 「うつゝん」

?? ピシッと飛び起きた真宵ちゃんとは反対にのっそりと起き上がる僕。

??「……さて、と。早々に帰ろう。四様に言わねばならんことがあるからな」

??「……?」

??四様に言わなきゃいけないこと? ?なにそれ。

??「四季様、肩をお貸ししましょうか?」

??「い、いや、いいよ。自分で歩ける」

??

??夜闇の魅惑な提案をかううじて断ると、僕はよろよろと歩き出す。

??

??「無理すんなよ。ったく」

??「え?」

??「あつ!」

??体がふつと軽くなったかと思った。でも本当はそうじゃなくて、真宵ちゃんが肩を貸してくれたから、って……

??「ま、真宵ちゃん?」

??「んだよ。私が肩貸すんじゃない嫌か? ?んん? ?お前肩貸してくれる相手選べるような身分じゃねえだろうが」

??「あ、あはは、そ、そうだね」

??照れ隠しとかじゃなく、本気でそう思ってるみたい。

??「ま、ま、真宵さんっ!」

??「んだよ?」

??「し、し、四季君に何を……!」

??「別に殴ったり殺したりしてるわけじゃねえんだ、別にいいだろ?」

??「そついう問題じゃ……ああ、もう!」

??弥生ちゃんは一度うなると、真宵ちゃんの反対側に来て、空いている方の僕の肩をとった。

??「……なにしてんだおまえ?」

??「こ、こうすればもつと楽に歩けますよね、四季君?」

??「え、ええつと……」

??実のことをいうと、もうとつくの昔に元気になって、歩けるどころから走り回ることだつてできそうなんだけど……。ま、まあ、楽だし、このままでいいかな?

??「つたく。教師連中どもが、四季をこんなにも疲れさせやがつて……許さねえ」

??「……普段あなたがしていることよりは遥かにマシだと思われませんが、暴力女」

??「そうか? いつも通りだと思っけどな」

??「……不憫な四季様」

??よよよと効果音までつけて、夜闇が悲しむふりをする。

??「し、し、しし四季くん、だ、大丈夫、ですからねっ!」

??「僕は君の方が心配なんだけど……」

??カタカタ震えてるし、声も上ずってるし。弥生ちゃんの方がよっぽど疲れてるんじゃない?

??「……二人とも」

??「んだよ、零」

??「なんですか、零さん」

??教室を出ようとしたとき、零の冷ややかな声が後ろから聞こえた。

??「四季のことなんだがな」

??ぴくり。僕の肩が反射的に跳ね上がる。ま、まさか……。冷や汗が背筋を流れる。

??「歩き方が常人と変わらん。もうとっくの昔に回復してる」
??「……」

??すると、真宵ちゃんが貸してくれていた肩が外れた。

??「え、え、えつと、ま、真宵……ちゃん？」

??ゴゴゴゴ……。今の真宵ちゃんが持つオーラを擬音にすれば、そんな感じ。背中からなにか得体のしれない化け物が見える気もする。

??「……へえ。そうかよ、四季」

??僕を睨みつける真宵ちゃんの顔は、なぜか真っ赤だった。

??「てめえは私の好意を利用して、あんな恥ずかしいことをさせたんだな？　せつかく私がゆうき、じゃなかった、仕方なく肩貸

してやったのに、よおっ！」

??「え、え、ま、こ、殺されるっ!？」

??「僕は希望を求めて弥生ちゃんを見る。彼女は涙目になりながらふるふると首をふっていた。

??「そ、そんな、し、四季君……わ、わた、私を、私を騙していったんですね……？」

??「騙してなんか」

??「こら、四季」

??「ぐい、と無理やり首を回され、真宵ちゃんの方を向かされる。ほつぺたに真宵ちゃんの柔らかい手があたって、ちよっという気分……じゃなくて！

??「な、なにかな？」

??「なに私と話してる最中に弥生の方を向いてんだよ。弁解聞いてるから、早く言え。さもなきゃ全身の関節を逆に曲げる」

??「真宵ちゃんの手が肩にかかる。力がどんどんかかって……いた、いた、痛いっ!？」

??「痛い痛い!　?や、やめて真宵ちゃん!」

??「わかったから、早く言えってんだ」

??「少しだけ力が弱くなる。今言わなきゃ多分僕は……。早く言わなきゃ、当たり前障りのない嘘を……」

??「嘘ついたら針千本飲ます」

??「楽だし、気持ちがよかったから黙ってました」

?? あ、余計なことまで言っちゃった。

?? 「……ほお。へえ。わかった。とりあえず、そうだな……死んどくか？」

?? 「え、ちよつ、真宵ちゃ」

?? 真宵ちゃんの手が肩から首に動いていつて……何をするつもり？

?? 「四季君っ!？」

?? 「え、なに、弥生ちゃ」

?? 「……この期に及んで……っ! ? 私によくも恥ずかしいことをさせてくれやがったな! ? ? しかもそのうえ他の女ばかりっ!」

?? 「あ、しまっ」

?? コキリキユ。

?? 首から、異音。

?? 「四季君っ! ? ? しっかりしてください、四季君、四季くんーん!」

?? 弥生ちゃんの叫び声を聞きながら、僕は意識を失った。

第五十五話　異常テストの終結！??

?? もう僕は二度と復活できないかもしれない。そんなことを考えながら目が覚めた。考えられる時点でもうすでに矛盾していることに気付いて、ほつとする。……いや、ここがあのだって可能性は……。

?? 「……お兄ちゃん」

?? 四様の顔を見て、僕はここが現世であることを確信する。だって四様は生きているし、神様に守られてるんだから死ぬはずもないし。

?? 僕は身体を起こして周りを見回す。どうやら、ここは僕の部屋みたいだ。どうも皆は気絶した僕の身体をアパートまで運んでくれたようだった。空が見えているから、部屋と呼べるかどうかかわからないけど。四様は僕の左側で起き上がった僕を心配そうに見ている。

?? 「お、おはよう、四季君」

?? 「うん、おはよう、弥生ちゃん」

?? 僕は正面で正座をしている弥生ちゃんにあいさつをした。彼女はどことなく不安そうな表情をしている。僕が死んじやったと思ったのかな。ごめんね、心配かけて。

?? 「四季様、おはようございます……」

?? 「あ、うん、おはよう。どうしたの？」

?? 僕の右隣には、制服からメイド服に着替えた夜闇が正座で座っていた。どうしてかはわからないけど、夜闇は酷く申し訳なさそう

にしている。

？

??「……その、また暴力女の暴走を止める事ができませんでした。今は彼女自身の部屋に監禁……いえ、謹慎させていますが、不手際だったのは事実。申し訳ありませんでした」

??彼女は深々と三つ指について謝った。

??「こうなれば四季様に私の身体を捧げ、満足して頂くしか……」
??「それ、全く罰になっていない」

??僕の後ろの方から、零の声が聞こえた。後ろを振り返ると、白衣姿の彼女が立っていて、冷やかな目を夜闇に向けているところだった。

??「罰になっていない、とは？」

??「お前、悦ぶだろう？　？苦痛が伴っていなければ罰とはいえない。路地裏にでも立つか？　？そうすれば罰にもなるし金も入ってくる。一石二鳥だな」

??「な、なんてことをいうんだよ、零！？」

??僕はとんでもないことを言った零に叫ぶ。何てこと残酷なことを。冗談にしてもひどすぎるよ。

??「……？　？お兄ちゃん、どうして路地裏に立つのが残酷で、ひどいことなの？」

??「なんで君は当たり前みたいに僕の心を見透かすのっ！？」
??

??僕が悲痛な叫びをあげると、四様はにまっと笑った。

??「兄妹だからだよ。知ってる、お兄ちゃん？　？世界にはね、死んでもお兄ちゃんのことを想い続けて、生き返った妹がいるんだよ？」

??「それが読心術の原理なの？」

??四様はコクリと頷いた。

??「うん。……それで、どうして路地裏に立つのが残酷なことなの？」

??「え、えつと、それは……」

??僕は言いながら、零を睨む。どうして四様に持たなくてもいい疑問を持たせたんだっ！？

??僕はそういう意図を視線に含ませたつもりだったけど、零はそうは取らなかったみたい。

??「ふむ、了解した」

??「え、なにが」

??僕が止める暇もなく、零は、口を開いた。

??「いいか、四様。路地裏に立つというのは簡単かつ明瞭に言うならば、ばいし」

??「夜闇、止めてっ！」

??「はい」

??ギリギリで僕が言うと、夜闇が音もなく零に近づいて、何かをした。僕の後ろで行われたことなのでわからないけど、静かになったから、きつと口を塞いでくれたんだろう。でも、もごもごと、とかの零がもがく声が聞こえないなあ？

??「……お、お兄ちゃん、れ、零さんが……」
??「え？」

??僕は振り向いて、絶句。零が倒れていて、ピクピクと痙攣している。

??「四季様、止めました」

??「口を塞いでつて意味なんだけど!？」

??「塞ぎましたが……」

??わざわざそういう物騒な塞ぎ方をする意味を小一時間問い詰めたいのをかるうじて我慢する。

??「……そ、そう。じゃあ、起こして」

??「はい」

??少なくとも、誤解をするようなことを言った僕が悪い。零には悪いけど、夜闇にはなんにも言わないことにする。

??「……う、うむう……? ? 一体なにが……?」

??「零、四様の教育に悪い言葉は謹んでくださいという四季様のお達しです」

??「……むう。確かに、ボクの配慮が足りなかったか」

??零は素直にそう言つと、白衣の乱れを直して再び立ち上がった。

??「さて、四季。確かに罰として夜闇と交わるのも悪くはないし、四季が床で女をどう扱うか興味もあるが……今はそれどころではない」

?? 淡々と、とんでもないことをなんでもないことのように言う零は、まさしく浮世離れた研究者、っていう感じだ。

?? 「……そ、そうですね」

?? 今まで黙っていた弥生ちゃんが、切実な表情で言った。

?? 「確かに。何よりもまずやらねばならないことが今、確かにあります」

?? 夜闇も、真剣な表情で言う。

?? 「え、えつと、なに、かな？」

?? 皆の視線を一樣に浴びた四様は、戸惑いながら言った。

?? 「頼みがある。テストの難易度を下げてくれ」

?? 「お願いします、その、あの、テストを簡単にしてください！」

?? 「テストを私にも解けるレベルに戻していただけますか？」

?? 三者三様に、『願い』を四様に言う。願いを聞いた彼女は、目に見えて不機嫌になった。

?? 「……なんで？ いいじゃん、ちょっとくらい難しくても」

?? 「世界レベルの学力がなければ解けないテストをちょっとと言わせるわけにはいかないな」

?? 零が皮肉げに言った。

??「……だからって、私に願いごとなんてしないでよ」

??寂しげに四様は言ったのだった。……そうか、四様は前、願い事屋、なんてことをやらされてたんだ。だから、願い事をされることは、四様にとっては嫌なことではかないんだ。

??「……四様」

??「なあに、お兄ちゃん？　……お兄ちゃんも、私にお願いするの？」

??「……」

??お願いするべき？　？いいや、違うよ。そもそもこんな風にテストが難しくなったのは四様が勝手に勘違いしたせいなんだ。それを当然だと四様が思っているにせよ、悪いのは四様。……なら、ここで『お願い』するのは間違ってるんじゃないだろうか？　？僕がするべきことは、兄がこの場面でするべきことは……きつと。

??「四様はさ、なんでテストを難しくしたの？」

??「……難しくした方がいいと思ったから」

??「そんなの、僕が言っただけ？」

??「……」

??四様は突き放された子供のような顔をした。少し胸が痛むけど、今は我慢。

??「今すぐ、元に戻すんだ。……いいね？」

??僕が少し厳しめに言うと、四様はなぜか嬉しそうな顔をした。

??「うん、わかった、お兄ちゃん。ごめんなさい。いますぐ戻すね」

??にこやかに微笑むと、四様は手を胸の前で組んで、祈る。……怒られて喜ぶなんて、変な四様。

??「……ふむ、そういうこと、か」

??祈る四様を見ながら、零が興味深そうに呟いた。

??「どうしたの？」

??「なに、簡単なことだ。今まで四様を叱る人間がいなかったのだろう。誰もが自分にひれ伏し、願い事を言っていく……。叱られたことのある人間なら、喜ぶ状況だろうが、生まれた時から叱られたことがないとなると、それは苦痛以外の何ものでもないだろう」

??零の説明はもっともだった。祖母も祖父も、きつと理不尽な怒りをぶつけることはあっても、正しく導くために叱ることはなかっただろう。

??「……よく歪まずに育ったものだと感じます」

??

??夜闇はそう言うけど、僕はそう思わない。こんなに簡単に世界が変えられると思うこと自体、すでに歪んでる証拠じゃないだろうか。

??「……私のようにならなければいいんですけど……」

??弥生ちゃんが珍しくどもらず、とちりもせずにセリフを言った。
……裏人格のことを言っているんだろうか。

??「……うん、できたよ、お兄ちゃん！」

??祈り終わると、四様はぱあっと明るく笑った。

??「うん、よくできました」

??本当はお礼を言いたかったけど、それを言ったら、さっき叱ったのがテストのための方便みたいに思われちゃうかもしれない。だからここは、褒めるに留める。

??「もう勝手に勘違いして世界を変えちゃだめだからねっ！」
??「はあい……」

??四様は嬉しそうに返事をした。

??「……さすがだな、四季。いいお兄ちゃんをしているではないか」

??「ありがと、零」

??零の単純な褒め言葉が、純粹に嬉しかった。僕も、ちゃんとお兄ちゃんにいるかどうかが不安だったのかな。

第五十六話　えっとこれってもしかして！??

??それから僕たちはいつものように四様のご飯を食べて、みんな
で固まって眠った。時々喧嘩をすることもあったけど、みんな概ね
仲がよかった。うん、いいことだね。

??そして、それから僕らはテスト勉強をしたり、学校に行ったり、
他愛もないケンカをしながらも一週間を過ごした。難しさが元に戻
ったテストを受けて、結果も返ってきた。

??真宵ちゃんは相変わらず英語が満点。弥生ちゃんは国語が満点
だった。夜闇は社会が、零は理科がそれぞれ満点だった。僕？　？
あはは、いつも通りボロボロだった。だからみんなからさんざん色
々と言われたけど、まあ、政臣との勝負には勝った。昼食一週間分
は払う必要がないみたい。よかったよかった。それが決まったのが、
金曜日。今日は、その次の日だから、土曜日だ。

??「……おい？」

??「え、なに真宵ちゃん？」

??そんな風に昨日までのことを思い出していると、隣を歩いてい
た真宵ちゃんが声をかけてきた。他には誰もいない。弥生ちゃんも、
零も夜闇も四様もいない。それは、今日真宵ちゃんが全国大会の試
合だからだ。みんな、真宵ちゃんの試合を応援したかったみたいだ
けど、真宵ちゃんは僕以外来て欲しくないと言ったのだ。

??「お前さ、ちゃんと応援してくれよ？」

??「わかってるよ、真宵ちゃん」

??大会会場に向かう道で、真宵ちゃんは珍しく不安そうに僕に聞

いた。全国大会で優勝し、格闘王になるのが夢の彼女だけど、大会の成績はあまりよくない。それはいつもいつも反則で退場させられてしまうのだ。

??「でもさ、それよりも僕は真宵ちゃんが反則負けしないかどうかが不安だよ」

??僕がそう言うと、彼女はしょぼんと頂垂れた。

??「……わかってるよ。わたしは喧嘩っ早いからな。いつもの感覚でやつちまって、ミスるんだよなあ……」

??「そうそう。だからこの前の大会なんか、真宵ちゃん謎の飛び道具使ったってことになって負けたんだよね」

??「……いつもの癖だったんだよ」

??この前の大会で真宵ちゃんは僕にするみたいに闘気の塊を対戦相手にぶつけて失格となったのだ。まあ、時々真宵ちゃんが何の拳法学んでいるのかわからなくなるときがあるけど、それは大会審判も同じみたい。

??「……なあ、四季。私、勝てると思うか？」

??「反則しなきゃ勝てるんじゃない？」

??「軽く言ってくれるぜ……」

??真宵ちゃんを励ますつもりで言ったのに、逆に落ち込んだ。なんとかならないかな……

??「ね、ねえ、真宵ちゃん。勝ったらお祝いしようよ」
??「……お祝い？」

??ピクリと真宵ちゃんが反応した。

??「そうだよ。勝つたら何が欲しいの? ?言ってみて?」

??「……私、は……」

??真つ赤になってもじもじとしながら、真宵ちゃんは口ごもった。

??「私は、その、お前と、じゃなかった、ええと、その……。よし! ?欲しいものがたくさんありすぎてすぐには決められねえから、てめえ、私と一緒に来て荷物持ちしろ。他の奴らにさせるわけにはいかねえから、お前以外は呼ぶんじゃねえぞ!」

??「あ、うん、わかった」

??僕は頷く。真宵ちゃんったら、欲張りだなあ。まあ、真宵ちゃんらしくていいけど。

??「お、おう。そ、それから、何があってもあいつらは呼ぶなよ。そ、その、あいつらは女の子なんだから、荷物持ちなんてさせられねえだろ?」

??「うん、そうだね。真宵ちゃんだって女の子なんだから、重いものは持たせたくないよ」

??ここで怒らせても意味ないので、女の子、って呼ぶ。多分真宵ちゃん僕より力持ちだろうけど、そこは見栄ってやつだ。

??「……っ。お、お前、私のこと女だって……?」

??「……? ?違うの?」

??「い、いや、違わねえけど……。なんか調子狂うな……」

??真宵ちゃんは気恥ずかしそうに頬をかいた。なんか照れてる真

宵ちゃんって結構可愛いかも。

??「……なんだよ、ジロジロ見て」

??「いや、可愛いなあって」

??「っ!？」

??真宵ちゃんの目が見開かれる。まずいっ!　?とっさに身構え、
衝撃に備え防御体制に入る。

??「……そ、その、ありがとよ」

??予期しないことに、真宵ちゃんは何もしてこなかった。

??「……と、とにかく!　?早く行こうぜ!」

??顔を赤くして嬉しそうにスキップする真宵ちゃんを見て、僕は
違和感を感じずにはいられなかった。

??「……あれ?　?こんなに真宵ちゃんってこんなに大人しかっ
たっけ?　?こんな調子で大会大丈夫かな……?」

?

??そんな僕の不安とは裏腹に、真宵ちゃんは対戦相手の全てをル
ールに則った上で瞬殺し、圧倒的差をつけて優勝したのだった。そ
れから僕は怒涛の勢いで翌日にお祝いをする約束を取り付けられた
のだった。

??

第五十七話「これってデートっ!??」

??「遅い! ?三秒遅刻だ!」

??「ご、ごめん間宵ちゃん!」

??大会で間宵ちゃんが優勝した次の日。最寄の駅前で、僕たちは待ち合わせをしていた。今の時刻は朝九時。ここから大型ショッピングモールまで電車に乗って約一時間。十時には着くと思う。

??「つたく。三秒遅かったんだから、三秒長く付き合えよ。わかつたな?」

??「う、うん、わかってるよ」

??顔を怒りで真っ赤に染めながら、間宵ちゃんは僕に念押しした。というか遅くなったのはみんなの説得に時間がかかったからで、僕はこれでも急いだ方……。なんてことを言ったら、遙か彼方へ吹き飛ばされるんだろうけど。

??「あいつら連れて来なかったらうな!? ?……その、あいつら、女の子ばっかだろ? ?やっぱり荷物持ちさせんのは悪いからな」

??「幼馴染に荷物持ちさせるのはいいの?」

??「いいんだよ!」

??「えー……」

??そんなことを言いながらも、僕は内心楽しみだった。だって、街のショッピングモールなんて、滅多に行く機会がないから。

??「楽しそうじゃねえか。そんなに私とのデー、じゃなかった、

荷物持ちが楽しみか？」

??「楽しみというわけではないけど……。まあ、ショッピングは楽しいしね」

??「お前ホントに男か？　？ショッピングが楽しみなんてやつ、

私始めて見たぜ」

??「それ、偏見だよ？」

??「うるせえ。黙ってついてこい」

豪快に言つて駅に向かっていく間宵ちゃんは、まるで男の人のようだった。僕はあわてて彼女を追いかけて、隣を歩く。

「……お、おい、四季」

「な、なあに、間宵ちゃん」

間宵ちゃんは僕を親の仇を見るような顔でじろりと睨みつけてくる。……何か僕まずいことでもしたのかな……？

「……そ、その。……右手が」

「右手？」

僕の右手には、何もない。荷物持ちをやらされるのは決まっているのに、どうして余計な荷物を持つてくるだろうか。……もしかして、それが癪に障ったのかな？

「……ほら、手」

「え」

す、と間宵ちゃんは左手を僕の方へと向けた。これは、どういう意味なのだろう。

「……繋げ」
「うん」

ゆっくりと、僕は間宵ちゃんの手をとって、握る。格闘家を目指すだけあって、その手は僕よりもがっちりとしていた。

「どうだ？ 私の手、なかなかいけるだろ？」

「……い、いけるって、何が？」

「思ったよりも華奢だろ？ な？」

何か期待を寄せるような顔で、間宵ちゃんが聞いてきた。

「……ええつと、うん、びっくりしちゃった」

「そうか！ あはは、私もまだまだ捨てたもんじゃねえな！ さ、行こうぜ四季！」

「え、うわっ！」

間宵ちゃんは急に僕を引っ張って、改札口を抜け、一気に駅のホームまで来た。この駅は小さなホームがあるだけで、売店もなければ待合室もない。人の姿はまばらで、学生の姿もこの時間だとないに等しい。周りの人たちは、急になだれ込むようにしてホームに入ってきた僕たちを見て不思議そうな表情をした。間宵ちゃんは僕と手をつないだまま、うれしそうにくるくると回っている。つまり、彼女と手をつないでいる僕もくるくる回っているわけで。

「ど、どうしたの、間宵ちゃん！」

「ん、なんでもねえよ」

僕が、普段と様子が違うことに驚いて聞くと、間宵ちゃんは照れくさそうに顔を赤くすると、回るのをやめた。

「……ちょっと昔が懐かしかったただけだ」

「昔？」

「……気にすんな。あと二分で電車が来る。……それまで、黙ってる」

「でも」

「……」

ぎろり、と睨まれた。あわてて僕は口をつぐむ。

待っている間暇なので、間宵ちゃんの様子を見る。表情は普段と変わらず、どことなくむっとした表情。でも、その中に待望の想いが隠されていることを、僕は見つけた。普段は喧嘩ばかりの僕たちだけど、ちゃんとかういう感情の機微ぐらいは、読みとれる。きっと、早くモールに行きたいんだろっな。

「……」

僕たちはそれから二分間、黙って電車を待った。

がたん、ごとんと電車は揺れる。人はあまりおらず、僕たち二人は余裕を持って座っている。

「なあ、四季。今日はどれくらい時間とれるんだ？」

「え？ ……そうだなあ、五時ぐらいまでかな？」

「……そうか」

僕の隣に座っている間宵ちゃんは、しょんぼりと言った。

「どうしたの？」

「……もつと時間とれねえのか？」

「うーん……。四様がいるからなあ……」

僕は妹の顔を想い浮かべながら言った。零や夜闇、弥生ちゃんは多分二日三日放っておいても大丈夫だろうけど、四様はまだまだ子供だから……。

「……そうだったな。昔と違って……今は、あいつがいるもんな」
「まあね」

僕は複雑な心境だった。昔は、僕の隣には誰もいなかった。今のように弥生ちゃんや夜闇、零がいるわけじゃないし、間宵ちゃんだって、今みたいに毎日顔を合わせる、ということもなかった。

「じゃあ、最低五時まで、お前は私の物、ってことだな」

「そんな、物扱いしないですよ」

「うるせえ。その代わり……」

ふと、さりげなく間宵ちゃんは僕の方を向いて、満面の笑顔で、僕に言う。

「その代わり、最低五時まで、私はお前の物だ」

どうしてか、心臓の鼓動が速くなった。ドキドキする。それと同じに、僕は気付いた。

……あ、もしかして、これってデートなんじゃ。

だって、異性の人と、休日にお出かけする。……うん、完全にデートだ。

……どうしよう。僕、完全に思い違いしてた。今まで本気で、僕

は間宵ちゃんの荷物持ち、という程度の認識しかなかった。でも、さっきの言葉で、気付いた。これは、もうどこからどうみてもデートだと。

……どうしよう。

やることは何も変わらないはずなのに、デートと認識したとたん、僕は緊張してきた。

第五十八話　ちょっとした異変！??

この町から一番近いショッピングモールは、街の中で最大級の品ぞろえを誇る超大型のモールだ。多くの人が集まり、いろんな人が和気あいあいとここでショッピングを楽しむ。ファミリーやカップル、子供連れ、いろんな人がここにはいる。

まあ、周りをみると、楽しんでいるのは女性くらいで、男の僕らはちゃっちゃと買い物済ませて早く帰りたいオーラが半端ない。僕はちよつと違っけど。

「あ、四季、重くねえか？」

「あのね間宵ちゃん。あんまり馬鹿にしないでくれる？」

今僕は間宵ちゃんの荷物を持っているわけだけど、あんまり大きな上これ布だからものすごく軽い。にも関わらず、間宵ちゃんはこんなことを聞いてくる。いくら僕がひ弱だと言え、ねえ。

ここはファンシーショップ。僕は最初どれほど高級な物を買わせるのだろうと内心びくびくしていたのだが、間宵ちゃんは比較的安価なものを選んでいる。しかも、量も少ない。

『これほしいなあ』

と間宵ちゃんが口にしたことはかなりあつたけど、

『四季、これ買ってくれ』

と言ってきたのは今のところ一度。僕が『かわいいね』と言ったカチューシャひとつだけだった。黒の生地にゴシック調の模様が施されたシンプルなものだったけど、意外なほど間宵ちゃんに似合っ

ていた。

「む。悪かったな。……でさ、四季、これ私に合うと思うか？」

そう言っで間宵ちゃんは試着しているワンピース姿でくるりと回った。赤とピンクの服はかわいらしいけど、間宵ちゃんには似合っていない。

「ううん、間宵ちゃんにはもっと似合うのがあると思うんだ」

僕はそういつて、ブティックの中を回る。白くて、窓枠がついたような模様がついたＴシャツに、青いタイトなジーンズ。

「これとか、間宵ちゃんにぴったりだと思うんだ！」

僕はそういつて、間宵ちゃんにその服を差し出した。彼女は服を受け取ると、赤い顔をした。

「ま、まあ、四季が着ろつてんなら、着るけどよ。お前こんなのが趣味だったんだな、知らなかった……」

そうぶつぶつ言いながら、間宵ちゃんは試着室へと向かった。それからすぐに、間宵ちゃんはさつき渡した服を着て出てきた。

思ったよりも胸元が強調されていて、間宵ちゃんの整ったプロポーションがよくわかる。そんなのを着せた僕っていったいなんなんだろう。

「……き、着たぞ。どうだ？ 似合ってるか？」

「ばっちり！ ほんとかわいいね、間宵ちゃん」

僕がそういうと、間宵ちゃんは頷いた。

「そうか、ありがとよ。……じゃあ、この服買ってくれるか？ その、ちよつと値が張るけどよ」

「大丈夫！ 今日は今まで貯めたお金全部使うつもりで来たから！」

そりゃ、もちろん語弊のある言い方だ。本当に大切なお金は使えないし、使うつもりもない。けど、自由にできるお金は全部間宵ちゃんのプレゼントに使う気概でここに来た。

なんとたつて今日は、今までずつと、万年初戦敗退の間宵ちゃんが初めて優勝したお祝いなのだから。

……そして、僕の初デート。やっぱり、意識すると恥ずかしくなってくる。それを悟られたくないから、必死で普段通りふるまってるけど、気づかれてないかな……？

「……そ、そこまでしなくていい……じゃなくて、ありがとよ。ありがたく使わせてもらうぜ」

間宵ちゃんは不敵に笑った。

けど、それからいろんなところを回ったけど、一切欲しがらなかった。

「ふう……」

僕はトイレで用を足して、手を洗った。あれからしばらくして昼食をファーストフードで済ませ、そしていったんトイレ休憩をはさむことにしたのだ。

僕が手を洗って外に出ると、さっき買った服を着て、さっき買った

た力チューシャを頭に乗つけた間宵ちゃんが数人の男に絡まれていた。

「ねえ彼女、今暇？　暇でしょ？」

「いいお店知ってんの。来てくれる？」

いつもの間宵ちゃんならばと片づけて僕が止めるところなんだけど、今日はちよつと様子が変だ。苛立たしそうな顔をして、男たちをにらんでいるにとどめている。悪口さえ言わないのは、どうしてだろう。

「……ねえ、ってかおい、なんか言えよ！」

どん、と男のうちの一人は間宵ちゃんの肩を押した。

あ、あの人死んだ。

そう思った僕に反して、間宵ちゃんはじっと彼を見据えるだけに終わった。

「……あ？　何怖い目してんの？　いいじゃんちよつとお茶するくらい」

男たちの雰囲気がどんどん悪くなっていく。

さすがにまずい。

そう思って、僕は駆け出した。

「おい！」

名前は言わず、ただ呼ぶ。間宵ちゃんはそれだけで気づいてくれた。間宵ちゃんは今僕を見ると、ほっとしたような顔をした。どきっと、一瞬だけ僕の心臓が跳ねた。

「来てくれたか。助けてくれ」

僕は頷いた。別の意味で、心臓が跳ねる。僕は男たちのそばまで歩くと、間宵ちゃんとの間に立った。

「ああ？　なんだよ優男。どけよ」

男が僕を押した。僕はよろめいて、数歩下がる。すると、背中が間宵ちゃんにあたった。守らないと。理由は知らないけど、間宵ちゃんは今戦えない。僕が、守ってあげないと。

「イヤ。この子、僕の彼女なの。わかる？　お邪魔虫は消えて。それとも君ら、人の彼女横からかつさらうつもり？　ん？　どうなの？」

「なめやがってこの野郎！」

ぱきりと、顔を殴られた。僕は受け身も取れず、後ろに倒れる。間宵ちゃんは後ろに下がっていてくれたおかげで、間宵ちゃんを巻き込んで倒れるなんて無様な真似はせずに済んだ。

「もしもし警察ですか？　今彼が暴漢に襲われていまして。はい、……町の……」

間宵ちゃんが携帯片手にそう言い始めると、男たちは途端に焦り始め、周りの人たちが集まってくると、あわてて逃げて行った。

「……すまねえな、四季」

「気にしないで。君がこうならなくてよかった」

僕は腫れた頬をさすりながらそう言った。

「さ、行こうぜ。適当に治療具買って、手当してやるよ」
「え？ でも警察……」

僕の言葉に、間宵ちゃんはやりと笑って答えた。
「嘘、だったのか。」

「治療具くらいは私が買う」
「え、でも悪いよそんなの」
「私に買わせる。いいな？」

有無を言わさぬ物言いに、僕は頷くしかなかった。

第五十九話 間宵ちゃんの異変！??

ちよん、ちゃんと消毒液に浸したコットンが僕の頬に触れる。

「い、痛いよ間宵ちゃん」

「我慢しろ」

それから間宵ちゃんはガーゼを当てて、医療用のテープで固定した。応急処置は、これで終わり、かな。

「……終わりだ。とりあえずひでえことにはなつてねえが、痛みがひかねえようなら医者行けよ」

「ありがと、間宵ちゃん」

間宵ちゃんは照れた様子で頬を掻いた。

周りにいる人たちが、興味深そうに僕たちを見ている。

ここはモール内にあるドラッグストアの前。医療道具を買った間宵ちゃんは、近くにあったベンチに座り、僕の治療を始めた。こんなところで始めちゃったもんだから、周りの視線が痛くて痛くて……。

「礼を言うのは私のほうだ。ありがとよ、四季」

「いや、いいけど……どうして？」

僕は思わず聞いていた。気に入らない奴はぶち殺すが行動基準の間宵ちゃんにしては、さっきの様子はずいぶんしおらしくったから。

「……それから、今まで、本当にすまなかった、四季」

「え？ 何が？」

僕は思わず聞き返していた。間宵ちゃんは、似合わない苦い顔を見ると、申し訳なさそうな声で言った。

「今まで、殴ったり蹴ったりして」

「え？」

驚く僕に、間宵ちゃんは続けて言う。

「昨日、優勝して、家に帰ってベッドに入って、初めて自分の強さに気付いたんだ」

「え？」

もしかして気づいてなかったの？

「いくら小さい大会だって言っても、優勝できるくらいの実力があつたんだ。そう思ったら、私、今までお前になんてことを……」

なんだろう、嬉しいなあ。これでもしかして僕、殴られずに済むんじゃないか？

「今まで無自覚だったのが、余計に怖かった。私は格闘家。自分の実力は、なにより把握していなきゃいけなかったのに……」

僕は驚いていた。まさか、大会での優勝が、ここまで間宵ちゃんを変えるきっかけになったなんて。僕はてっきり、自分の実力を信じて僕にもっとひどいことをするんじゃないかって……。

「だから、さっきのやつらにも、攻撃するのが怖かった。手加減の仕方なんて全然知らなかった。今までは運が良かったから……そう、

四様の兄ちゃんのお前だから、私は殺さずに済んだのかもしれない。もし私が普通の人に攻撃したら、もしかしたら、死んでしまうんじゃないか、殺してしまうんじゃないか、そう思ったら……」

いつもは大きく見えたその体が、とても小さく見えた。縮こまって、持っている力に怯える女の子のように思えた。

間宵ちゃんが、苦しんでいる。助けて、あげないと。

僕は間宵ちゃんを抱きしめた。

「ふえ？ あ、ええ？ な、し、しき」

「大丈夫だよ、間宵ちゃん」

小さく震えて、あわあわと驚く間宵ちゃんが、妙にかわいらしかった。

「間宵ちゃんは、大丈夫。手加減だってできる。力の扱い方は、これから学んでいけばいいんだよ。ね？ 間宵ちゃんは普通の高校生なんだから、さっきみたいな変なことがない限り、戦う必要なんてないんだよ。ううん、さっきみたいなことがあっても、大丈夫。僕が守ってあげるから」

ぴたりと、間宵ちゃんの動きが止まった。

「ま、まも、まも？」

「うん、守ってあげる。だから、無理に強くならなくてもいいんだよ」

ぎゅ、と腕をつかまれた。僕はうつむく間宵ちゃんを見た。

「……ダメ。私は強くないと」

すくりと、間宵ちゃんは立ち上がった。

僕と、視線が合った。

「……励ましてくれて、ありがとな、四季。ホント、見直した。でもダメだ。私は、強くないと。強くなり続けないとダメなんだ。世界で一番、強くなるんだ」

強くなりたい。間宵ちゃんの幼い時からの夢。でも、中学生の時から、その言葉は、あまり聞かなくなった。僕はつきり、『自分が強くなった』と間宵ちゃんが思ったからだと思っていたけど……。

間宵ちゃんのこの悲しそうな目を見るかぎり、そうじゃないみたい。何か、ある。

なんだろう。

「間宵ちゃん、何かあったの？ 僕でよかったら、相談に乗るよ。話して？」

間宵ちゃんは、首を振った。

「ほんと、お前は優しいよ。ああ、だから私は……。だけどな、こればかりは、話すわけにやいかねえ。

ああ、そうさ。私にや覚悟が足りなかったんだよ。実際、それだけの話さ」

ひょうひょうと笑って、間宵ちゃんは言った。

「……私は、今日から修行の旅に出る。場所は聞くな。……じゃあな」

間宵ちゃんは僕のほうに近づいてきて、顔を近づけてきた。その眼はまるで鷹のようで、僕は睨まれた小動物のように、動けなかった。

顔はさらに近づいてくる。そして、そして。

僕と間宵ちゃんは、口づけをした。

すると、僕の首に間宵ちゃんの手が伸びる。

「……四季」

トン、と首に衝撃。

「ま、間宵、ちゃん」

僕は地面に倒れ、そのまま気を失った。

第六十話 情報収集開始！？

『あたし、せかいでいちばんつよくなる！』

小学生のころ、間宵ちゃんは僕とケンカして、僕に勝つたびそう言っていた。お父さんやお母さんのようになるのだと。

『強くなる』

どこまで、を言わなくなったのが、中学生になってからだだった。なんだか一緒にいるのが気恥ずかしくなって、お互い疎遠になっていたから、心の内を話してくれなくなったただけかも、しれないけど。

『私は、戦う』

向上心が間宵ちゃんから消えたように思える言葉を彼女が言うようになったのは、高校生になってからだだった。まるで表向きの夢とでもいうように、間宵ちゃんは世界で活躍するなどは言っていたけど、世界一強くなる、という大言壮語を言うことはなくなった。

現実を知ったのだろうか。違うだろう。戦闘集団との戦闘大会で優勝を飾るほどの実力を持つ間宵ちゃんなら、世界一はとても身近な、もう少し努力すれば手に入るレベルのものはずなんだ。

どうしてだろうか。

「……なあ、しき、ちょっときいてくれ」

「えどうしたのまよいちゃん！ おんなのこがそんなことばづかしちゃだめだよ！」

真っ黒な画面から一転、僕の視界は間宵ちゃんの暗い顔でいっぱい

いになった。さつきキスしたみたいに、間宵ちゃんが僕に目いっぱい近づいているからだということは、すぐにわかった。ちよっと周りを見渡すと、そこは公園……昔、四様と一緒に遊んでいた、あの公園だった。

これは、夢か。僕はすぐに気付いた。

「わたしな、つよくなるよ」

「え？」

「おとうさんとおかあさんはきつと、よわかったんだ。よわかったから、あんなころされかたしたんだ。つよくなれば、ころされない。せかいでいちばんつよかったら、だれにもころされない」

その表情は、今にも壊れてしまいそうなほどはかなげで、まだ十にもなっていない女の子がするのは、あまりに哀れな表情だった。どうして僕は、かつて間宵ちゃんがこんな顔をしていたことを、忘れていたんだろうか。

「……しき、まもってやる。おまえをずっと、いつしうまもってやる。おまえはよわい。つよくなるのはむりだ。だから、わたしがまもってやる。だれよりもつよくなるから、あんしんしろ」

間宵ちゃんのたどたどしい誓いから、数日後。

東堂 巡めぐりと東堂 廻まわるという夫婦が山奥で酷い死に方をしたというニュースが流れた。

「……」

僕は目を開けた。夢から覚めたみたいだ。いつもの古臭い天井が見える。家に帰ってきたようだ。僕が体を起こすと、不安そうにし

ている弥生ちゃんたちが見えた。

「どうやって、ここまで？」

「警察から電話があったの。もう、心配かけないで。道の真ん中で寝てるんだから、びっくりしちゃったわ」

そういったのは、四人の中で一番明るい顔をしている四様だった。きつと、絶対自分にとって不利なことは何も起こらないという自信からくる明るさなんだろうな。

「……あの、四季君、間宵さんは？」

「間宵ちゃんは……」

何が、彼女に決断を迫らせたのだろう。僕が、やられてしまったからかな。

「四季様、暴力女は、どこへ？」

「……修行の旅に出るんだってさ」

僕の言葉に、みんなが驚いた。

「修行の旅？　今まであいつはそんなそぶりかけられも見せなかったが？」

零が、そんな疑問を口にする。

「……僕が目の前で殴られたのが、引き金みたいなんだ」

僕は、間宵ちゃんが修行の旅に出た経緯を、少しずつ話していく。……でも、僕は最低だ。夢で見るまで、僕は間宵ちゃんの事情を、

忘れていたのだから。

「殴られた？ 何を言う。君のことを彼女はさんざ殴っていたじゃないか」

「……でも、僕が殴られたところは、今日初めて見たんだよ」

そう、今までも何度か、今日みたいなことがあった。全部、僕が殴られる前に片が付いていた。間宵ちゃんの攻撃で。

「……間宵さんと、四季君が殴られてしまうことと、何か関係があるんですか？」

「ある。僕も詳しいことは、知らないけど。僕は、間宵ちゃんのご両親が殺されてしまったことと、関係があると思ってる」

四様が、うつむいた。ちょっと、刺激が強かったかな。

「……では、まずは暴力女の事情を調べましょう。私と零、二人で調べます。四様と弥生さんは、ここで四季様と待っていてください」

二人は頷いた。

「……間宵ちゃん」

僕は、何もできないのかな。

『しき、わたしは……』

幼いころの間宵ちゃんと、さつき、僕を気絶させる時の間宵ちゃんの表情が重なる。悲しい色に染められた、彼女らしくない表情。

「夜闇、零、よろしくね」

そう言うことしかできない僕が、腹立たしかった。

「かしこまりました、四季様」

「了解、四季。待っていてくれ。ボクのすごさを、見せてやる」

二人は微笑んで、僕にそう言うてくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6419i/>

三人のフィアンセ！？

2012年1月7日14時58分発行